井戸下遺跡

2001年3月

長野県飯田市教育委員会

井戸下遺跡遠景

井戸下遺跡調査区遠景

井戸下遺跡

2001年3月

長野県飯田市教育委員会

序

飯田市川路地区は、飯田市街地の南に位置し、名勝天竜峡を擁する肥沃な土地に恵まれた地域であります。この肥沃な土地を利用し、私たちの祖先は生活を営み、その痕跡が遺跡として現代に残されてきています。これらは私達の地域社会や文化を形作ってきた様々な証であり、できるかぎり現状のままで後世に伝えていくことが私たちの責務でありましょう。

川路地区は、三遠南信道路の計画を始め道路整備や住宅化が進みつつありますが、常に天竜川と向き合い、その恩恵に浴しながら、一方で川との長い闘いの歴史を持つ地域であります。今次調査の要因となった治水対策事業も、水害対策として低地を埋め立て、安心して暮らせる土地にしようとすることが目的です。しかし、埋め立てることにより私達の祖先の暮らした痕跡が地中深くに眠ってしまうことになり、その確認がほぼ不可能になってしまいます。このため関係各機関と協議の結果、工事実施に先立って発掘調査を行って、記録保存を図ることとなりました。

調査結果については本文に述べてあるとおりですが、今回の調査では、いままで天竜川の河原と思われていた場所で、弥生時代中期から中世にかけての集落・水田・屋敷跡が見つかり、古くから人々が、天竜川と闘いながらも川辺の肥沃な土地を利用していたことが明らかとなりました。調査で得られました様々な知見は、これからの地域の歴史を知っていく上で貴重な資料になると確信しています。

最後になりましたが、調査の実施に当たり文化財保護の本旨に多大なご理解とご協力をいただいた近隣地域の方々をはじめ、調査に関係されたすべての皆様方に深く感謝を申し上げます。

平成13年3月

飯田市教育委員会

教育長　冨田　恭啓

例　言

1．本書は治水対策事業（川路地区）に伴い実施された、飯田市川路地区所在の埋蔵文化財包蔵地井戸下遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2．発掘調査は飯田市治水対策部からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3．調査は平成９年度に現地調査を、10・11・12年度に整理作業および報告書作成作業を行った。
4．遺跡名は、当初「富岡遺跡」として事業を実施したが、調査の進展の中で、遺跡の範囲および周辺の地名を検討し「井戸下遺跡」と改称した。なお調査時の図面類・遺物の注記については「ＩＳＤ」の略号を一貫して用いている。
5．発掘調査・整理作業・報告書を通じて以下の略号を使用している。
竪穴住居址・竪穴状遺構－ＳＢ、建物址－ＳＴ、溝址－ＳＤ、土抗－ＳＫ、その他－ＳＸ
6．井戸下遺跡における発掘調査位置は国土基本図の区画、ＭＣ－04に位置し（社団法人日本測量協会　1969　「国土基本図図式　同適用規定」参照）、グリット設定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュに基づいて、株式会社ジャステックに委託した。
7．本書の記載は、時代毎にＳＢ・ＳＴ・ＳＫ・ＳＤ・ＳＸの順としている。
8．弥生中期の遺物実測図に付された網は朱塗りを示し、古墳時代の高坏に付された網は黒漆を示す。また須恵器の断面は黒塗りしている。
9．土層の色調・土性については、小山正忠・竹原秀男　1996　『新版標準土色帳』を用いている。
10．本書に関わる図面の整理は、担当調査員・整理作業員の協力により下平博行が行った。
11．本文の執筆は、第Ⅳ章第３節を小林正春が、それ以外の執筆及び編集を下平が行い、現場での遺構写真は伊藤尚志・下平が行い、遺物写真については奈良国立文化財研究所　中村一郎氏の指導を受け西大寺フォト　杉本和樹氏に、遺構の空中写真は株式会社ジャステックにそれぞれ委託した。
12．本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。
13．本報告書を作成するに当たって以下の方々（敬称略）に御指導いただいた。
赤塩　仁、青木一男、市川隆之、牛島　茂、臼井直之、郷道哲章、徳永哲秀、中村一郎、原　明芳、原　祐一、贄田　明、広瀬昭弘、広田和穂、宮沢恒之、松井　章

目　　次

本文目次

巻頭写真

序

例言

目次

第Ⅰ章　経過

第1節　調査に至るまでの経過 …… 1

第2節　調査の経過 …… 2

第3節　調査組織 …… 3

第Ⅱ章　遺跡の環境

第1節　自然環境 …… 4

第2節　基本層序 …… 6

第3節　歴史環境 …… 8

第Ⅲ章　調査の概要

第1節　調査の概要 …… 11

第Ⅳ章　遺構

第1節　弥生時代の遺構 …… 13

1）　住居址（ＳＢ） …… 13

第2節　古墳時代の遺構 …… 15

1）　住居址（ＳＢ） …… 15

2）　建物址（ＳＴ） …… 21

第3節　奈良～平安時代の遺構 …… 21

1）　溝址（ＳＤ） …… 21

2）　水田址 …… 21

第4節　中世の遺構 …… 22

1）　竪穴状遺構（ＳＢ） …… 22

2）　建物址（ＳＴ） …… 22

3）　土坑（ＳＫ） …… 28

4）　溝址（ＳＤ） …… 30

5）　その他の遺構（ＳＸ） …… 32

第5節　近世の遺構 …… 32

1）　土留め状遺構 …… 32

第Ⅴ章　遺物

第1節　弥生時代の遺物 …… 33

1）　弥生中期の土器 …… 33

2）　弥生中期の石器 …… 35

3）　弥生後期の土器・石器 …… 36

第2節　古墳時代の遺物 …… 36

1）　土師器の器種分類 …… 36

2）　各住居址の様相 …… 40

3）　住居址の時期区分 …… 40

4）　須恵器 …… 41

5）　石製品 …… 42

第3節　平安・中近世の遺物 …… 42

1）　平安時代の遺物 …… 42

2）　中近世の遺物 …… 42

第Ⅵ章　総括

第1節　出土遺物について …… 49

1）　弥生時代中期土器群の様相 …… 49

2）　石器群の様相 …… 51

第2節　各時代の集落について …… 53

1）　弥生時代中期 …… 53

2）　弥生時代後期 …… 53

3）　古墳時代中期 …… 53

4）　平安時代 …… 54

5）　中世 …… 54

6）　近代 …… 55

第3節　結語 …… 60

主要引用参考文献 …… 61

報告書抄録

表目次

表1　土坑観察表 …… 44

表2　陶磁器観察表（1） …… 45

表3　陶磁器観察表（2） …… 46

表4　木器観察表（1） …… 46

表5　木器観察表（2） …… 47

表6　銭貨観察表（1） …… 47

表7　銭貨観察表（2） …… 48

挿図目次

挿図1　井戸下遺跡位置図 …… 5
挿図2　明治44年地形図 …… 7
挿図3　基本層序 …… 7
挿図4　周辺遺跡図 …… 9
挿図5　基準メッシュ調査位置図 …… 12
挿図6　土師器分類表（1）…… 37
挿図7　土師器分類表（2）…… 38
挿図8　土師器分類表（3）…… 39
挿図9　弥生～古墳時代遺構分布図 …… 56
挿図10　奈良～平安時代遺構分布図 …… 57
挿図11　中世遺構分布図 …… 58
挿図12　近世遺構分布図 …… 59

図版目次

図版1　ＳＢ01～06 …… 62
図版2　ＳＢ08・10・～12・16 …… 63
図版3　ＳＢ09 …… 64
図版4　ＳＢ14・15・17 …… 65
図版5　ＳＢ18 …… 66
図版6　ＳＢ19・21・23 …… 67
図版7　ＳＢ20・22・24 …… 68
図版8　ＳＢ25・26・29 …… 69
図版9　ＳＢ27・13 …… 70
図版10　ＳＢ30・31・35 …… 71
図版11　ＳＢ32・33・34・38 …… 72
図版12　ＳＢ36・37 …… 73
図版13　ＳＢ39・40 …… 74
図版14　ＳＢ41～44 …… 75
図版15　ＳＢ45・46・50 …… 76
図版16　ＳＢ47～49 …… 77
図版17　ＳＴ01～04 …… 78
図版18　ＳＴ05～10・23 …… 79
図版19　ＳＴ11・12・17・19・20 …… 80
図版20　ＳＴ13～16・22・24・25・27 …… 81
図版21　ＳＴ18・21・26 …… 82
図版22　ＳＫ01～05・07・08・10・11 …… 83
図版23　ＳＫ09・12～17 …… 84
図版24　ＳＫ18・20～26 …… 85
図版25　ＳＫ27～36 …… 86
図版26　ＳＫ38～43・45～48 …… 87
図版27　ＳＫ49～55 …… 88
図版28　ＳＤ01 …… 89・90
図版29　ＳＤ02・10 …… 91
図版30　ＳＤ03～05 …… 92
図版31　ＳＤ06～08・ＳＸ02 …… 93
図版32　ＳＤ11・12 …… 94
図版33　土留め状遺構 …… 95・96
図版34　水田址 …… 97・98
図版35　ＳＸ01・03 …… 99
図版36　周辺ピット割付図 …… 100
図版37　周辺ピット図1 …… 101
図版38　周辺ピット図2 …… 102
図版39　周辺ピット図3 …… 103
図版40　周辺ピット図4 …… 104
図版41　周辺ピット図5 …… 105
図版42　周辺ピット図6 …… 106
図版43　周辺ピット図7 …… 107
図版44　周辺ピット図8 …… 108
図版45　ＳＢ06出土土器（1）…… 109
図版46　ＳＢ06出土土器（2）…… 110
図版47　ＳＢ14出土土器（1）…… 111
図版48　ＳＢ14（2）・43出土土器 …… 112
図版49　ＳＢ08～10出土土器 …… 113
図版50　ＳＢ11・13・15出土土器 …… 114
図版51　ＳＢ17・21出土土器 …… 115
図版52　ＳＢ18出土土器 …… 116
図版53　ＳＢ18・19・20出土土器 …… 117
図版54　ＳＢ22・24出土土器 …… 118
図版55　ＳＢ25出土土器 …… 119
図版56　ＳＢ26出土土器 …… 120
図版57　ＳＢ27出土土器 …… 121
図版58　ＳＢ29出土土器 …… 122
図版59　ＳＢ30・31出土土器 …… 123

図版60　ＳＢ32・33出土土器 …… 124
図版61　ＳＢ33出土土器 …… 125
図版62　ＳＢ34～36出土土器 …… 126
図版63　ＳＢ37・39・41出土土器 …… 127
図版64　ＳＢ40・42・44出土土器 …… 128
図版65　ＳＢ45～50出土土器 …… 129
図版66　ＳＢ01～05出土土器 …… 130
図版67　ＳＫ出土遺物 …… 131
図版68　ＳＤ01出土土器（１） …… 132
図版69　ＳＤ01出土土器（２） …… 133
図版70　ＳＤ01（３）・02出土土器 …… 134
図版71　ＳＤ・水田出土土器 …… 135
図版72　水田出土遺物 …… 136
図版73　ＳＸ01・02・グリット出土土器（１）137
図版74　グリット出土土器（２）…… 138
図版75　グリット出土土器（３）…… 139
図版76　グリット出土土器（４）…… 140
図版77　グリット出土土器（５）…… 141
図版78　グリット出土土器（６）…… 142
図版79　グリット出土土器（７）・遺構外（１）143
図版80　遺構外出土土器（２）…… 144
図版81　遺構覆土出土弥生中期土器（１）… 145
図版82　遺構覆土出土弥生中期土器（２）… 146
図版83　遺構覆土出土弥生中期土器（３）… 147
図版84　ＳＢ06・14出土石器 …… 148
図版85　ＳＢ14出土石器 …… 149
図版86　ＳＢ出土石器（１）…… 150
図版87　ＳＢ出土石器（２）…… 151
図版88　ＳＤ出土石器 …… 152
図版89　ＳＤ・ＳＫ・水田址出土石器 … 153
図版90　グリット出土石器 …… 154
図版91　石製品・鉄器 …… 155
図版92　出土銭貨 …… 156
図版93　ＳＢ02・ＳＫ10・20出土木器 … 157
図版94　ＳＤ01出土木器 …… 158
図版95　ＳＤ01出土木器 …… 159
図版96　ＳＤ・ＳＸ・水田出土木器 …… 160
図版97　ＳＤ01・遺構外出土木器 …… 161
図版98　遺構外出土木器 …… 162

写真図版目次

図版１　遺跡遠景・遺跡近景 …… 165
図版２　中世遺構全景・水田址全景 …… 166
図版３　ＳＢ01・02 …… 167
図版４　ＳＢ04・06 …… 168
図版５　ＳＢ08・14・17 …… 169
図版６　ＳＢ18 …… 170
図版７　ＳＢ19 …… 171
図版８　ＳＢ20・21・22 …… 172
図版９　ＳＢ23・24・25 …… 173
図版10　ＳＢ27 …… 174
図版11　ＳＢ29・30・31 …… 175
図版12　ＳＢ33・34・36 …… 176
図版13　ＳＢ37・40・41 …… 177
図版14　ＳＢ43・45・46 …… 178
図版15　ＳＫ20 …… 179
図版16　ＳＫ05・07・08 …… 180
図版17　ＳＫ18・21・22 …… 181
図版18　ＳＫ25・30・53 …… 182
図版19　ＳＤ01 …… 183
図版20　ＳＤ02・06・12 …… 184
図版21　ＳＸ01 …… 185
図版22　土留め状遺構 …… 186
図版23　作業風景 …… 187
図版24　ＳＢ06・14出土土器 …… 188
図版25　ＳＢ06出土土器（１）…… 189
図版26　ＳＢ06出土土器（２）…… 190
図版27　ＳＢ06出土土器（３）…… 191
図版28　ＳＢ06出土土器・石器 …… 192
図版29　ＳＢ14出土土器（１）…… 193
図版30　ＳＢ14出土土器（２）…… 194
図版31　ＳＢ14出土土器（３）…… 195
図版32　ＳＢ14出土石器 …… 196
図版33　ＳＢ32・48・グリット出土土器 … 197

図版34　ＳＢ24・26出土土器 …… 198
図版35　ＳＢ09・11・13出土土器 …… 199
図版36　ＳＢ17・21出土土器 …… 200
図版37　ＳＢ17・22出土土器 …… 201
図版38　ＳＢ18出土土器セット …… 202
図版39　ＳＢ18出土土器（1） …… 203
図版40　ＳＢ18出土土器（2） …… 204
図版41　ＳＢ18出土土器（3） …… 205
図版42　ＳＢ18・19・20出土土器 …… 206
図版43　ＳＢ25出土土器セット …… 207
図版44　ＳＢ25出土土器（1） …… 208
図版45　ＳＢ25出土土器（2） …… 209
図版46　ＳＢ27出土土器 …… 210
図版47　ＳＢ29出土土器（1） …… 211
図版48　ＳＢ29出土土器（2） …… 212
図版49　ＳＢ30・31出土土器 …… 213
図版50　ＳＢ33出土土器セット …… 214
図版51　ＳＢ33出土土器（1） …… 215
図版52　ＳＢ33出土土器（2） …… 216
図版53　ＳＢ33（3）・ＳＢ34出土土器 … 217
図版54　ＳＢ36・39出土土器 …… 218
図版55　ＳＢ40出土土器 …… 219
図版56　ＳＤ01出土土器 …… 220
図版57　出土木器（1）・（2）…… 221
図版58　出土下駄 …… 222
図版59　ＳＫ・ＳＤ出土遺物…… 223

第Ⅰ章　経　過

第１節　調査に至るまでの経過

飯田市川路地区は伊那盆地の最南端、天竜川左岸に位置し、下流には名勝「天竜峡」が所在する。しかし、天竜川によって形成された峡谷部は、時として上流の天竜川氾濫源・低位段丘面に洪水をひきおこし、川路・龍江・竜丘地区に甚大な被害をもたらしてきた。殊に昭和36年の災害（三六災）は、川路地区の中心部が水没する大災害となった。こうした点から天竜川の治水対策が大きな課題となっていたのである。

そこで川路・龍江・竜丘地区において、昭和36年の水害の被害状況を勘案し、「天竜川治水対策事業」を行うこととなった。この事業は昭和36年の災害時に浸水した高さまで盛土を実施するものであるが、盛土対象地および盛土採取地には多くの埋蔵文化財包蔵地が存在する。このため、昭和61年10月16日、その保護について長野県教育委員会文化課・飯田市治水対策部・飯田市教育委員会の三者による最初の保護協議が実施され、以後数回にわたる協議を経て、平成４年度に龍江地区において事業地内の遺跡の状況を把握するための試掘調査が行われた。

その後平成５年３月９日に行われた保護協議時の指導及び同年５月６日付け文化庁の指導を受け、平成５年５月19日付け５教文第７-21号による県教育委員会からの回答で、同事業に関わる埋蔵文化財の保護について下記の原則が示された。

○　原則として試掘調査により把握された遺構確認面及び遺構包含層から２ｍを越える盛土の範囲は発掘調査を行い記録保存を図る。

○　２ｍ以下の盛り土の範囲についてはトレンチによる確認調査を実施し、遺跡の状況を把握し、地下遺構の保存を講ずると共に、その判断された内容を記録保存し、後世に伝える。

これに基づき、まず天竜川左岸の龍江地区から発掘調査及び試掘調査が行われることとなり、平成５年12月15日から平成７年９月11日まで龍江城遺跡・龍江阿高遺跡・田中下遺跡・細新遺跡の４遺跡の本発掘調査が実施された。

竜丘・川路地区については、平成７年10月に治水対策部と飯田市教育委員会との間で協議が行われ、平成８年１月から島・金山・久保田・留々女・殿村・富岡（井戸下）の６遺跡で試掘調査が実施された。このうち金山・富岡遺跡では中・近世の水田址の存在が明らかにされた。

平成９年３月には富岡遺跡の未試掘部分の調査が行われたが、調査実施中に中世の館遺構・古墳時代の土器など多量に出土したため、平成９年４月に長野県教育委員会・飯田市治水対策部・飯田市教育委員会の三者で再度協議が行われ、館の北限を示すと考えられる杭列から南側部分について本調査を実施することとなった。

その後平成９年４月１日付けで飯田市治水対策部と協定を締結し、平成９年６月９日より発掘調査を実施する運びとなった。なお、遺跡の名称については当初、「富岡遺跡」としていたが、周辺の地名等を考慮した結果、「井戸下遺跡」が適当であると判断されたため、名称を変更した。今後、報告書中では「井戸下遺跡」で統一使用する。

第２節　調査の経過

試掘調査の結果を受けて、平成９年６月９日より７月15日にかけて重機による表土剥ぎを行い、㈱ジャステック委託による基準点設置作業を行った後、７月16日より作業員を入れて本発掘調査に着手した。14世紀から15世紀と推定される建物址・柱穴・住居址・溝址・古墳時代から奈良時代と推定される水田址を検出し、順次掘り下げて精査を行うと共に、個別の写真撮影・断面実測を行った。その後㈱パリノサーベイ委託による水田のプラントオパール分析および年代測定分析を行った。また、溝址などから出土した下駄などの木製品類はその遺存状況の悪さから早急の保存処理が必要と判断されたため、㈱吉田生物研究所に委託して保存処理を実施した。

中世面の調査が終了した段階で、９月20日現地見学会を実施し、調査の成果を一般に公開した。見学者は250人にのぼり、関心の深さを窺わせた。

その後の補足調査の段階で、溝址の底面から古墳時代の遺物が多量に出土することが確認され、周辺の精査を行った結果、中世面の下層に古墳時代の集落の存在が予想された。この為飯田市治水対策部と調査期間の延長についての諸協議を行った後、古代面の調査に着手した。古代面からは弥生時代中期から古墳時代にかけての集落址を検出し、順次掘り下げ・記録作業を行い平成９年11月30日、現地での作業を終了した。

平成10年度は４月１日、飯田市治水対策部と井戸下遺跡整理作業ほかの協定を締結し、同日より作業に着手した。土器・石器については水洗作業・ジェットマーカーによる注記作業の後、土器・陶磁器類については各遺構毎の接合作業に着手した。遺物量が多いため年間を通じての作業となった。石器については注記後、種別作業を行い、実測作業に着手した。木製品については保存処理をした製品以外について、水洗後、劣化を防ぐためホウ酸ホウ砂溶液につけ、パッキングし保存した。

図面類については台帳を作成した後、各遺構毎の二次原図作成作業・全体図作成作業に着手し一部トレース作業に着手することができた。

平成11年度は４月１日、飯田市治水対策部と飯田市教育委員会との間で協定を締結し、同日より作業を着手した。土器は昨年度に引き続き接合・復元作業を行い、終了後、遺物実測・拓本作業を行った。石器・木器・陶磁器については実測が終了しトレース作業を行った。

図面類については二次原図作成が終了し、トレース作業についてもほぼ完了することができた。

平成12年度は４月１日、飯田市治水対策部と飯田市教育委員会の間で協定を締結し、同日より作業を開始した。土器のトレースおよび完成図面の版組作業を専らとし、８月８日には奈良国立文化財研究所牛島　茂・中村一郎　両氏の指導を受け、西大寺フォト　杉本和樹氏に委託し遺物写真撮影を実施した。図版作成作業に併行して原稿執筆作業を行い、本発掘調査報告書を作成した。

第3節 調査組織

1）調査団

調査主体者　飯田市教育委員会　教育長　小林恭之助（平成11年12月24日まで）
　　冨田崇啓（平成11年12月25日から）

調査担当者　下平博行　伊藤尚志

発掘作業員　新井幸子　伊藤和恵　伊藤孝人　伊東裕子　井上恵資　今村文一　尾曽ちぶき
木下貞子　木下義男　木下　傳　木下力弥　熊崎三代吉　小林定男　榊原政雄
坂下やすえ　佐々木文茂　斯波幸枝　清水三郎　下田芙美子　代田和登
杉山春樹　高橋セキ子　竹本常子　橋千賀子　塚原次郎　仲田昭平　仲村　信
服部光男　林　員子　林　悟史　林　伸好　久田きぬゑ　久田　誠　牧内　修
松井明治　松下成司　松下光利　三浦照於　山田康夫　吉川和夫

整理作業員　新井ゆり子　池田幸子　金井照子　金子裕子　唐沢古千代　木下早苗　小池千津子
小平晴美　小平まなみ　小林千枝　小林理恵　斉藤徳子　佐々木真奈美　佐々木美千枝
佐藤知代子　関島真由美　高木純子　高橋恭子　田中　薫　筒井千恵子　中沢温子
中田　恵　中平恵子　林勢紀子　林ひとみ　原　昭子　樋本宣子　平栗陽子　福沢育子
福沢幸子　牧内喜久子　牧内八代　松下博子　松島直美　松本恭子　三浦厚子
南井規子　宮内真理子　森藤美知子　森山律子　吉川悦子　吉川紀美子

2）指導

長野県教育委員会文化財・生涯学習課

3）事務局

飯田市教育委員会

教育次長　久保田祐久
博物館課長　小畑伊之助（～平成12年3月31日）
　　米山照実　（平成12年4月1日～）
埋蔵文化財係長　小林正春
埋蔵文化財係　吉川　豊（～平成11年3月31日）　山下誠一（～平成11年3月31日）
　　馬場保之　澁谷恵美子（平成11年4月1日～）　吉川金利　伊藤尚志
　　福澤好晃　下平博行　坂井勇雄（平成11年4月1日～）
庶務係長　麦島博晴　（～平成12年3月31日）　今村　進（平成12年4月1日～）
庶務係　牧内　功（～平成11年3月31日）　松山登代子（平成11年4月1日～）

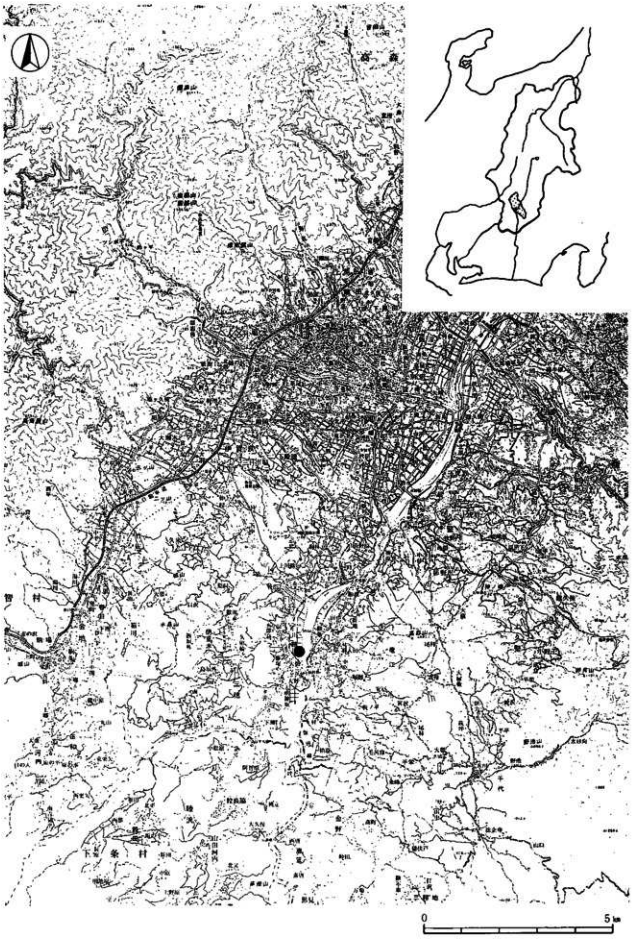
第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　自然環境

井戸下遺跡の所在する飯田市川路地区は、長野県の南端を南北に併走する伊那山脈・木曽山脈の間に広がる伊那盆地の最南端にあたり、飯田市街地から南に約８㎞の天竜川右岸に位置する（挿図１）。川路地区はこの天竜川と、西側から天竜川に注ぐ久米川、南の弟川によって挟まれた面積およそ6.16㎢の地域である。天竜川は峡谷部である天竜峡によりその流れを阻まれ、川路地区で大きく迂回する。このため、天竜川氾濫原が地区の大半を占め、周囲は標高450m～550mの低い丘陵に囲まれている。国道より西側は比高差約30m程度で低位段丘Ⅰの桐林面あるいは伊久間面に相当する段丘面の琴原・藤治ヶ峰・上平・祢宜屋原・初ノ免・藤塚・大明神原に続く。これら数段の段丘面を東西へ分断するように、北から久米川・相沢・留々女川・南沢・祢宜屋沢・観音沢・大畑沢・初沢・弟川の小河川が天竜川に注ぎ、削られた段丘はＶ字状の谷や凹地形を形成している。

川路地区の地形は天竜川の流路と共に大きく変化している。天竜峡の峡谷部は時として天竜川の水流を妨げる障害となり、峡谷部の入口である川路・竜丘・龍江地籍で東西に迂回を繰り返したと推定されている。伝承・絵図類を基に天竜川の移動を推定した「川路村史」によると、16世紀代には時又島地籍から２本に分流し、本流は現JR川路駅付近まで弧状に迂回し、井戸下遺跡付近で合流して天竜峡に流入し、17世紀初頭には本流部分が島地籍から天伯岩付近へ西に弧状に迂回し、17世紀中葉にはこの中州部分利用のため河川改修がなされ、時又からほぼ一直線に天伯岩の東側が流路となったと推定されている。また、明治44年陸地測量部の地図によると、天竜川は久米川合流点で二股に分かれ、本流は川路側を留々女川合流点まで一直線に流れ、その後東側に大きく迂回し龍江側から天竜峡に流れ込む。支流は留々女川から弧状に川路側を流れ、天竜峡付近で本流と合流している。昭和12年に完成した下流の泰阜ダムは、河床の上昇の一因となり、昭和31年の川路村図では一転して天伯岩付近西側が本流となり、天竜峡に流れ込んでいる。このように天竜川の水流は、自然営力・人為的作用により次第に変化しており、かつ昭和36年の災害後、土砂の堆積・河川改修・土地改良等の要因により川路地区の最低位段丘面の有無は不明となっていた。しかし、明治44年測量図（挿図２）によると、当時の天伯岩北側での河床標高は360m以下（現363m前後）で、旧川路村役場東側から天竜川川岸までの間に小段丘が２段程度認められ、低位段丘Ⅱに比定される段丘面が存在した可能性が極めて高い。

今次調査地点は、天竜川が西側に大きく迂回し、天竜峡の峡谷部へそそぎ込む入口部の北西側にあり、南側は月の木古墳群の所在する段丘の段丘崖に接し、北側前面には天竜川氾濫源を臨む。遺跡の北側には観音沢川・祢宜屋沢川があり、南沢川と合流し天竜川に注ぐ。天竜川までは東に約150mであり、標高は372mと現在の天竜川との比高差は約10m程度しかなく、一見して天竜川の河原に遺跡が立地する感を与える。しかし前述のとおりダム以前の河床は現在より低いと推定され、遺跡が小段丘上に立地していた可能性がある。また、JR飯田線線路付け替え工事に伴うボーリング調査では、今次調査区の隣接地から北側の南沢川付近には氾濫源に特有な礫などが確認されず、幅約100m・層厚約10mの粘土質シルト層の堆積が認められ、調査区周辺が河床になりにくい微高地であった可能性を示している。



挿図1　井戸下遺跡位置図

第2節　基本層序

今次調査区は自然環境の項でふれたとおり天竜川に面した小段丘上に立地していたと推定され、調査区全体でも南沢川に隣接する調査区北側・月の木台地直下の調査区南側と地形的な特徴の異なる要素を有し、北側・中央部・南側では土層堆積が異なる部分がみられる。このうち南側層序は中央部の基本層序に対比が可能であるが、北側は対比できない。このため3箇所の土層について概要を述べる。なお、遺構・遺物の説明で用いる土層は中央部AN-49グリットでの土層を基本層序として用いている。また、土色・土質については、小山正忠・竹原秀雄　1996　『新版　標準土色帳』を用いている（挿図2）。

調査区中央部セクション（AN-47グリット）

調査区のほぼ中央部、今次調査区の基本層序。分層は以下のとおりである。

Ⅰ層　耕作土　層厚約1m

Ⅱ層　オリーブ灰色（2.5GY5/1）シルト質壌土　中世の遺構検出面

Ⅲ層　緑灰色（10GY5/1）シルト質壌土　弥生時代後期～古墳時代の遺構検出面

Ⅳ層　灰色（N4/）シルト質壌土　炭化物わずかに含む。遺物なし。

Ⅴ層　オリーブ灰色（2.5GY6/1）シルト質壌土　砂を多く含む。遺物なし。

Ⅵ層　灰オリーブ色（5Y4/2）シルト質埴壌土　炭化物多く、弥生中期の遺物を多量に含む。

調査区南側セクション（BR-46グリット）

調査区の南西部、月の木台地の直下に当たる箇所。分層は以下のとおりである。

Ⅰ層　耕作土

Ⅱ層　暗オリーブ色（2.5GY4/1）　砂質埴壌土　基本層序のⅡ層に対応。

Ⅲ層　暗緑灰色（7.5GY3/1）シルト質埴土　水田層、層上面に厚さ5㎜～1㎝程度の砂層がある。

Ⅳ層　灰色（N4/0）シルト質埴壌土　古墳時代の遺物を含む。基本層序のⅣ層に対応。

調査区北側セクション（AY-03グリット）

南沢川に最も近く、試掘調査時では天竜川氾濫原とされた箇所である。分層は以下のとおりである。基本層序に対応する箇所は見あたらない。

Ⅰ層　耕作土　層厚約1m

Ⅱ層　緑灰色砂土（5G6/1）

Ⅲ層　黒色砂土（N3/）

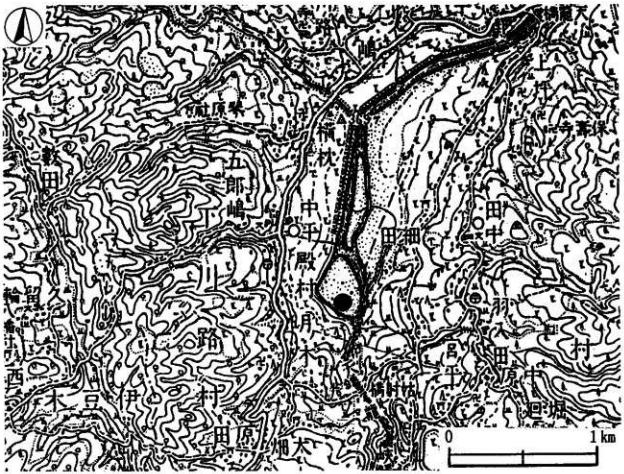
Ⅳ層　黒色砂土（7.5Y2/1）

Ⅴ層　オリーブ黒砂土（5Y3/1）時期不明土器少量混入

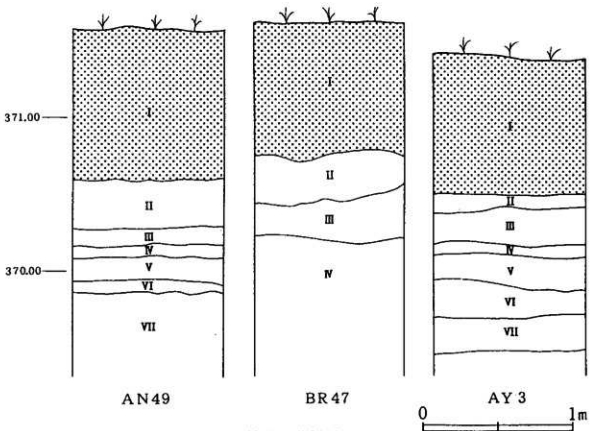
Ⅵ層　緑灰色砂土（10GY5/1）上面に寛永通宝出土

Ⅶ層　黒色砂土（N2/）

Ⅷ層　緑灰色土（7.5GY6/1）グライ化した重埴土



挿図 2　明治44年地形図



挿図 3　基本層序

第３節　歴史環境

川路地区の地形は、天竜川に面する最低位段丘面と、桐林面に相当する標高400m以上の低位段丘面に大別される。特に最低位段丘面には前方後円墳の正清寺古墳をはじめ多数の古墳があり、、飯田市内でも有数の古墳集中地帯となっている。また、隣接する上川路地区には白鳳期の瓦が出土した開善寺・重要文化財の四仏四獣鏡が出土した御猿堂古墳など古墳時代から奈良時代にかけての主要な遺跡が集中する地帯である。こうした遺跡を中心に時代毎の遺跡の概観を行い、川路地区の歴史的変遷を追ってみたい（挿図３）。

１）縄文時代

川路地区に人々が生活した痕跡を残したのは縄文時代に始まる。今次調査区南側の月の木遺跡からは、縄文時代前期前半の住居址が確認され、周辺に当該期の大集落が存在する可能性がある。また、久米川南岸の今洞遺跡からは縄文時代前期後半の住居址が確認されている。両遺跡とも、調査面積・遺跡の状態から大規模な集落の存在は確認されていない。

縄文時代中期になると遺跡は低位段丘面上が中心になる。川路地区の南端に位置する大明神原遺跡では、中期初頭から後葉にかけての30軒を越す集落が確認されており、拠点的な大規模集落が形成されていたと考えられる。同一段丘面の初ノ免遺跡・藤原塚遺跡でも縄文時代中期と考えられる遺物が表採されている。

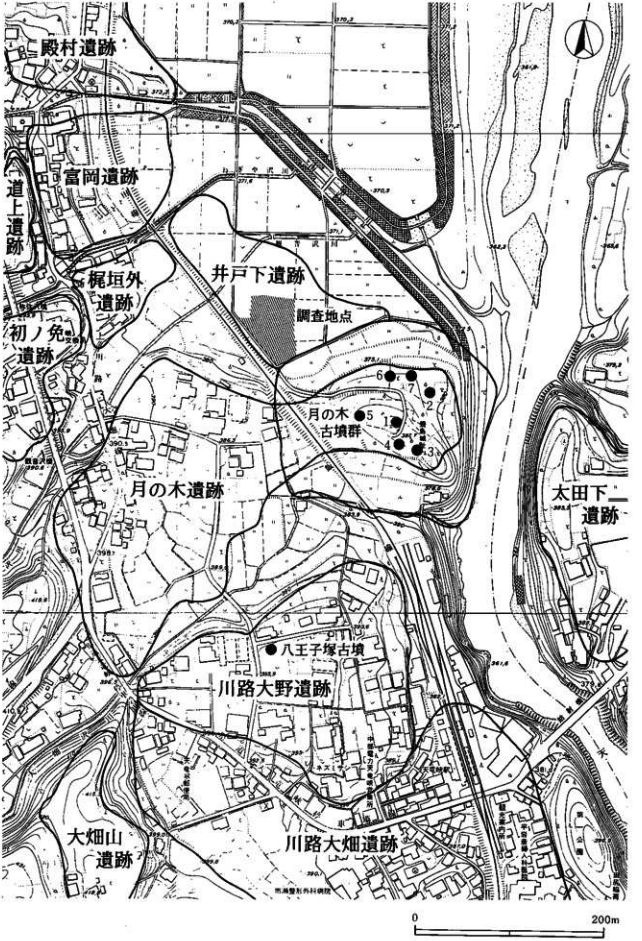
縄文時代後期・晩期は生活の舞台としての川路は不明瞭となり、遺跡数も少なく、断片的な資料のみである。今洞遺跡からは浮線網状文の施された氷Ｉ式土器が出土しているが、当該期の遺構等は確認されていない。これは、川路地区の縄文時代全般を通じ遺跡の立地は段丘上に多く見られるものの、全国的な傾向として、縄文時代後期・晩期は遺跡が水場に近い低地に進出し、河川を積極的に利用していることから、不明瞭な最低位段丘面に同時期の遺跡が存在する可能性が高い。

２）弥生時代

弥生時代に入ると、段丘上の東原遺跡で住居址が１軒確認されているものの、断片的な資料が多く、集落の存在も不明瞭であった。しかし今次調査区からは弥生時代中期から後期にかけての集落の一部が確認され、同様な標高に集落が多数存在する可能性を示している。

３）古墳時代

古墳時代にはいると地区内に多くの古墳が築造される。正清寺古墳（前方後円墳）をはじめ地区内には48基の古墳が確認されている。古墳は花御所地籍・正清寺古墳周辺・月の木地籍に集中しており、古墳群を形成している。その立地は正清寺古墳周辺の古墳を除き、低位段丘面上に位置している。こうした古墳の多くは破壊され、地区内に多くの出土品が伝えられている。川路最大の古墳である正清寺古墳は、全長約60mの前方後円墳で、後円部に横穴式石室を持ち、五鈴鏡・玉類・馬具・武具類が出土している。平成11年度の治水対策事業に伴う発掘調査では、２重周溝・造出しを有し、周溝部分が一度修復されていることが判明している。周溝内からは多数の埴輪・須恵器・土師器類が出土し、５世紀末～６


殿村遺跡
富岡遺跡
道上遺跡
梶垣外遺跡
初ノ免遺跡
井戸下遺跡
調査地点
月の木古墳群
月の木遺跡
太田下遺跡
八王子塚古墳
川路大野遺跡
川路大畑遺跡
大畑山遺跡
0
200m

挿図4　周辺遺跡図

世紀と推定されている。今次調査区北西側の山麓にある花御所1号古墳からは金銅装の馬具類・玉類等の豊富な出土品が知られている。また下辻古墳は全長8.8mの横穴式石室を有し、馬具類・玉類等の出土品がある。今次調査区北西側の最低位段丘面にあった殿村1号古墳からは四獣鏡・素文鏡が出土している。井戸下遺跡に隣接する月の木古墳群1号墳は、かつて直刀4本の出土が伝えられていたが、治水対策事業に伴う発掘調査で、木棺を有する主体部3基が確認され、内1基からは横矧板鋲止短甲・直刀・鉄鏃等出土し、別の主体部からは胡ろくに入った状態での鉄鏃束等重要な資料が出土している。また月の木7号墳では小規模な石棺状の石室が確認され、8世紀台に溯る可能性がある。この他、調査成果からは月の木古墳群全体で7基の古墳が確認されており、5世紀後半から6世紀を主体として8世紀近くまで造営されたと推定される。一方、古墳時代の集落は、治水対策事業に伴う発掘調査で、今次調査地点を始め、留々女遺跡・辻前遺跡・久保田遺跡で大規模な集落が確認され、川路地区の最低位段丘面全体に生活の痕跡が残されている。

4）奈良・平安時代

奈良・平安時代の川路地区は断片的な資料のみで詳細は不明であったが、上川路には奈良時代と推定される布目瓦等出土した開善寺境内遺跡があり、周辺に寺院の存在を窺わせる。川路地区では、治水対策事業で調査された留々女・辻前遺跡から平安時代の住居址などが確認されている。また、井戸下遺跡では奈良時代～平安時代と推定される水田址・溝址が確認されており、低位段丘面一帯に集落と水田が営まれていたと推定される。

5）中世

川路地区が文献上に現れるのは貞和2年（1346年）の三浦和田文書中の7月19日室町幕府下知状案である。これは当時、伊賀良庄地頭であった江間氏の族人江間尼浄元が庄内の中村・河路の2郷を開禅寺（開善寺）に寄進し、それを新給人が了承した旨の記載がある。また、織田氏の信濃攻略により開善寺から持ち出された梵鐘（現高遠町桂泉院に存在）には文和4年（1355年）の銘があり、その文中に伊賀良庄上河路郷の記載がある。こうした史料から室町時代には川路地区が上河路郷・下河路郷にわかれ、伊賀良庄に含まれていたと考えられる。また、康永3年（1344年）小笠原貞宗譲状の中に伊賀良庄が記載されており、室町時代には小笠原氏が川路地区を領有していたことがわかる。その後、武田氏の伊那侵攻後、天正7年（1579）の上諏訪造営帳に伊賀良庄内の役銭納入状況が記されており、その中に上河路郷・下河路郷等の記載が見られる。このように川路地区は伊賀良庄の一郷として文献に記されている。河路郷の詳細は不明であるが、今次調査区からは14世紀代から15世紀代にかけての屋敷跡が確認されており、留々女遺跡でも同時期の掘立柱建物址群が検出されている。こうした成果から河路郷の集落の実態が判明すると思われる。集落の他に今次調査地点北西側の城山には、尾根を利用した山城が確認されている。伝承等も無く、詳細は不明な点が多いが、戦国期の山城と推定されている。また今次調査区南側に隣接する月の木地籍には「じょうばた」・「おもてきど」・「ほり」等の地名が残されていることから「幾島城」と伝えられてきた。しかし治水対策工事での発掘調査では城郭の痕跡等は確認されていない。以上遺跡を中心に川路地区の歴史を概観したが、今次調査を含め治水対策に先立つ発掘調査で確認された成果により、詳細な歴史が判明すると思われる。

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査の概要

１）調査地（挿図３）

今次調査区は飯田市川路3238・3243・3244・3245・3249・3250-1・3250-2番地の現状水田で行われた。井戸下遺跡は前述のとおり、当初「富岡遺跡」として水田址を確認する試掘調査が行われたが、中世の建物址が確認されたことにより遺構が確認された箇所を中心に、およそ5,500㎡が調査対象となった。

なお調査を行う中で周辺の地名などを考慮し、遺跡名称を「井戸下遺跡」と改名した。

２）調査区の設定（挿図４）

調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図（以下、基準メッシュ図と略す）に基づいて、株式会社ジャステックに委託設定した（設定方法については、飯田市教育委員会　1998　『美女遺跡』他参照)。今次調査地点はＭＣ04　13-37･13-38･13-45･13-46内に位置する。

３）遺構

今次調査は試掘調査段階で確認された中世の遺構（Ⅱ層）および中世面終了段階で確認されたⅢ層の弥生時代後期末から古墳時代の遺構の調査が主体となり、Ⅴ層に確認された弥生時代中期面は調査区南側および基本層序の確認を行ったAN-47グリットとその周辺などごく狭い範囲の調査にとどまっている。これは試掘調査時の遺構確認面の検出が十分でなかった結果、時間的制約が大きく響き、不十分な調査に終わってしまったことに起因する。工事の要因である盛土のため、遺跡が完全に破壊されなかったことは幸いである。こうした中で確認された遺構は、弥生時代中期から中世にかけての住居址50軒・建物址27棟・土抗55基・溝址12条・不明遺構３基・水田址１面・柱穴多数、近代の土留め状遺構などである。

このうち住居址は事例の少ない弥生時代中期の住居がみられる他、古墳時代中期を主体としており、建物址および土抗・柱穴は中世が主体となる。建物址のほとんどが同一方向に主軸をもつことから、中世の屋敷跡と推定される。水田址についてはその帰属時期が不明な点が多いものの、平安時代と推定される溝によって切られており、古墳時代面より上層にある点からその間に構築されたと推定した。

４）遺物

弥生時代中期から中世にかけての遺物が出土している。弥生時代中期では類例の少ない阿島式段階の土器群が東海系の土器群と良好な石器セットを伴って住居址から出土している。古墳時代の遺物としてはＳＢ25・18などでカマド出現以前と出現後の良好な土器セットが出土している。中世の遺物としては各遺構およびグリットから陶磁器類が出土しているが、遺構数の割に遺物は少ない。また木製品もみられ、曲物・刳物・農具などの他に馬形木製品・人形木製品が出土している。

挿図5　基準メッシュ調査位置図

第Ⅳ章　遺　構

第１節　弥生時代の遺構

１）住居址（ＳＢ）

①ＳＢ06（遺構－図版１　遺物－図版45・46・84　写真図版－４・24～28）

AA-00グリットを中心にＶ層上面から弥生時代中期の住居址を検出した。北半分のプランの検出は他の住居に比べ容易で、炭化物の混入により確認されたが、住居址南半分は不明瞭であった。一辺３ｍ程度の隅丸方形になると推定される。検出面から床面まではおよそ20cm程度で、壁は緩やかに立ち上がり、床面はやや堅くしまっている。炉址・柱穴等は確認できなかった。覆土は１層のみで炭化物を少量含み、遺物の多くは覆土下層の床面近くから出土している。

出土遺物は多く、住居址西半分から器形を復元できる条痕文系土器の甕・阿島式の壷・東海系の土器等がまとまって出土している。また石器類は石包丁・有肩扁状形石器・石鏃・大型の打製石斧など豊富に出土している。

②ＳＢ14（遺構－図版４　遺物－図版47・48・84・85　写真図版－５・24・29～32）

AB-42グリットを中心にＶ層上面から弥生時代中期の住居址を検出した。住居址西側1/3程度のプランはやや不明瞭である。4.6×3.8ｍ程度の長方形になると推定され、主軸はＮ－１°－Ｅを測る。検出面から床面まではおよそ10cm程度で、壁は緩やかに立ち上がり、床面は部分的に堅い箇所もみられる。炉址・柱穴など確認されなかった。覆土は１層のみで炭化物・土器片を含んでいる。

出土遺物には阿島式の壷・東海系土器・条痕文土器の甕が出土している。また石器類には石包丁・小形の磨製石器・打製石斧などが出土している。

③ＳＢ43（遺構－図版15）

AR-08グリットを中心にＶ層から弥生時代中期の住居址を確認した。上層の中世柱穴および重機による掘削により床の大部分が破壊されているものの、4.2×3.8ｍの方形を呈する。検出面から床面まではおよそ10cm程度で、床面の残存部分は堅く叩き締められている。炉址・柱穴などは確認されなかった。遺物は少なく破片が多いが阿島式の壷・甕が出土している。

④ＳＢ24（遺構－図版７　遺物－図版54　写真図版－９・33）

AC-02グリットを中心にⅢ層から弥生時代後期終末～古墳時代の住居址を検出した。住居址北側が中世のＳＤ01・古墳時代のＳＢ18と重複関係にある。。６×5.2ｍの隅丸方形を呈し、主軸はＮ－15°－Ｅを測る。検出面から床面までの深さはおよそ40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は叩き締められており全面に炭化物・炭化材が多量に見られることから焼失家屋と考えられる。住居址北側中央には炉縁石を有する土器埋設炉が確認された。土器埋設炉は周囲を長径60cm程度掘りさげ、底部を欠いた甕を埋設していた。甕の内部および埋設炉周辺には炭化物が多量に見られた。

出土遺物には埋設炉に使用された中島式最終末の甕・東海系の器台等が出土している。

⑤ＳＢ26（遺構－図版８　遺物－図版56　写真図版－33）

AF-49グリットを中心にⅢ層から弥生時代後期終末～古墳時代初頭の住居址を検出した。住居址南側半分がＳＤ01、北側隅がＳＢ29に切られている。ほぼ半分の調査であるため規模・形状は不明であるが、床面は軟弱で、北壁中央付近に焼土が見られる。

出土遺物には弥生時代後期の甕・壷・器台・高坏などが出土している。

⑥ＳＢ32（遺構－図版11　遺物－図版60　写真図版－33）

AF-48グリットを中心にⅢ層から弥生時代後期終末～古墳時代初頭の住居址を検出した。住居址の東側をＳＢ26・29に、南側をＳＤ01にそれぞれ切られているため、全体の2/3程度の調査に止まった。検出時には明確なプランを確認できなかったが、炭化物・炭化材の分布状況からプランを推定した。床面はやや堅く、炭化物が多量に広がっており、焼失家屋と推定される。西壁付近に焼土の集中する箇所が認められ、周囲から遺物が出土している。

出土遺物には弥生時代最終末から古墳時代にかけての有段口縁壷・甕などが出土している。

⑦ＳＢ38（遺構－図版11）

AI-00グリットを中心にⅢ層から弥生時代後期の住居址を検出した。南側をＳＢ29に切られているため、全体の2/3を調査した。5.1×3.2mの長方形を呈し、主軸はＮ－36°－Ｅを示す。検出面から床面まではおよそ10cm程度で、壁は緩やかに立ち上がる。床面は北西側が一部堅く叩き締められているのみで、炉址・柱穴は確認されなかった。

遺物は破片が多く、出土量も少ないが中島式の甕・壷が出土している。

⑧ＳＢ47（遺構－図版16　遺物－図版65）

AO-47グリットを中心にⅢ層から弥生時代後期終末～古墳時代初頭の住居址を検出した。南側1/3をＳＢ30に、北東隅をＳＢ45に切られているものの、プランは長方形を呈すると考えられる。検出面から床面までではおよそ40cmで、壁は緩やかに立ち上がり、床面は堅く叩き締められている。住居址内から炉址・柱穴など確認されなかった。

遺物は覆土中から床面まで全体に少なく、東海系の器台・高坏などが出土している。

⑨ＳＢ48（遺構－図版16　遺物－図版65）

AK-46グリットを中心にⅢ層から弥生時代後期終末～古墳時代初頭の住居址を検出した。西側1/3をＳＢ27・31に、北側をＳＢ30に切られているため、全体の形状などは不明である。検出面から床面まではおよそ20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は全体に軟弱で、炉址・柱穴などは確認できなかった。

遺物は覆土中から床面にかけて全体的に少なく、破片が多いが、弥生時代後期終末の東海系の器台が出土している。

第２節　古墳時代の遺構

１）住居址（ＳＢ）

①ＳＢ05（遺構－図版１）

AU-08グリットを中心にⅢ層から古墳時代と推定される住居址を検出した。プランは遺物及び炭化物の分布を基に判断した。住居址東半分が重機による掘削時に破壊されている。一辺が3.4mの隅丸方形になると推定され、壁は緩やかに立ち上がり、検出面から床面まではおよそ20cm程度である。床面は、住居址中央部付近で部分的に堅い箇所が見られるが、全体的には軟弱である。炉址・柱穴などは確認できなかった。出土遺物は覆土中から床面にかけて見られるが、小破片が多く図示できなかった。

②ＳＢ08（遺構－図版２　遺物－図版49　写真図版－５）

AJ-36グリットを中心にⅢ層から古墳時代中期の住居址を検出した。住居址は西側部分で2/3がＳＤ01に破壊されているため、全体の1/3の調査に止まった。一辺５ｍの方形を呈すると推定され、検出面からの深さは約20cmで、床面には梁・垂木等の建築部材と考えられる炭化物・焼土が多量に見られることから焼失家屋と考えられる。床面は堅く叩き締められているが、炉址・柱穴などは確認されていない。遺物は床面を中心に出土し、高坏・坏・甕などみられるが、破片が多く遺物量も少ない。

③ＳＢ09（遺構－図版３　遺物－図版49　写真図版－34）

AI-36グリットを中心にⅢ層から古墳時代の住居址を確認した。プランが不明瞭であるが7.2×6.6mの方形を呈し、検出面から床面までの深さは約20cmである。壁は緩やかに立ち上がり、床面はカマド周辺を除き不明瞭である。カマドは西壁中央に構築されているものの、大部分が破壊されており、火床と支脚・袖石の痕跡のみ確認された。また、住居址中央やや西寄りに地床炉も確認されており、或いは複数の住居址の可能性がある。

遺物は遺構全体から床面を中心に出土し、土師器高坏・坏・甕・長胴甕など出土しているが、破片が多く、多時期に亘るものが出土している。また、土製品として土製紡錘車が出土している。

④ＳＢ10（遺構－図版２　遺物－図版49）

AO-04グリット付近に中心があると推定される住居址を確認した。ＳＢ25と重複する。中世面の精査時に床面のみ確認されたものであるためプランなどは不明である。遺物はＳＢ25のものが混在する可能性がある。

⑤ＳＢ11（遺構－図版２　遺物－図版50　写真図版－34）

AM-06グリットを中心にⅢ層から古墳時代中期の住居址を検出した。住居址の北・東・南壁の一部が中世の柱穴などにより破壊されている。一辺4.6m程度の方形を呈し、検出面からの深さはおよそ30cm程度である。壁は緩やかに立ち上がり、床面上には多量の炭化部材・炭化物・焼土が見られ焼失家屋と推定される。床面は堅く叩き締められるが、炉址・柱穴など確認されなかった。

遺物は床面を中心にほぼ全面から出土し、土師器高坏・甕などが見られる。

⑥ＳＢ12（遺構－図版２）

AW-05グリットを中心にⅢ層から古墳時代と推定される住居址を確認した。住居址北側半分が天竜川の氾濫により破壊され、南側半分も近世の堤防址・暗渠により部分的に破壊されており、プランなど不明な点が多い。一辺６ｍ程度の方形を呈すると推定され、検出面から床面までの深さは20cm程度である。床は破壊されている部分が多いが、全面に炭化物が分布しており焼失家屋と推定される。

遺物は住居址中央部付近床面に土師器甕・カマドの支脚と考えられる円柱状の土製品などが出土しているが、破片が多く量も少ないため、図示していない。

⑦ＳＢ13（遺構－図版９　遺物－図版50　写真図版－34）

AM-43グリットを中心にⅢ層から古墳時代と推定される住居址を確認した。全体の大半をＳＢ27に切られているため、1/5程度のみ確認された。規模・形状は不明であるが、床面は堅く明瞭である。

遺物は床面上から出土しているものの遺物量が少なく、土師器鉢・甕・高坏など見られるが、ＳＢ27と混在する可能性がある。

⑧ＳＢ15（遺構－図版４　遺物－図版50）

AC-39グリットを中心にⅢ層から古墳時代と推定される住居址を確認した。住居址南西隅が調査区外に、北側を中世の溝により破壊されている。床面のみの検出のためプランは不明である。検出時には炭化物の分布する床面のみ検出されたが、精査の結果東側に一部周溝が確認された。

遺物は少なく床面から土師器高坏・坏が出土している。

⑨ＳＢ16（遺構－図版２）

AD-37グリットを中心にⅢ層から時期不明の住居址を確認した。住居址の西側2/3が調査区外に延びる。検出面から床面までの深さは10cmで、床面は全体的に軟弱である。炉址・柱穴などの諸施設は確認されなかった。

遺物は床面より土師器甕が出土しているほか破片が多く、時期を決定するものはない。

⑩ＳＢ17（遺構－図版４　遺物－図版51　写真図版－５・35）

AA-00グリットを中心にⅢ層から古墳時代中期の住居址を確認した。3.2×３ｍの隅丸方形を呈し、検出面から床面までおよそ10cm程度である。壁は緩やかに立ち上がり、床面はカマド付近が堅くたたきしめられていた。西壁やや南寄りにカマドが確認された。遺存度は良好で、規模は両袖外側間の幅50cm、長さ80cmを測り、焚き口部に石組みを有するカマドである。煙道は確認されなかった。

遺物は少なく、カマド内部より甑・周辺から土師器高坏・甕が出土している。

⑪ＳＢ18（遺構－図版５　遺物－図版52・53　写真図版－６・37～41）

AB-05グリットを中心にⅢ層から古墳時代中期の住居址を確認した。北壁をＳＤ01に切られ、北西隅でＳＢ24を切る。推定7.2×６ｍの方形を呈し、検出面から床面まではおよそ50cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は全体的に堅い。カマドは北壁中央に見られるが、一部ＳＤ01により破壊されて

いた。規模は両袖外側間の幅1.2m・長さ1.5mを測り、焚き口部に石組みを有する石組みカマドである。煙道は確認されなかった。

遺物はカマド西側を中心に多量に出土し、土師器高坏・坏・小形壷・甕・甑・須恵器蓋杯などが見られる。

⑫ＳＢ19（遺構－図版6　遺物－図版53　写真図版－７・41）

AN-42グリットを中心にⅢ層から古墳時代の住居址を確認した。５×4.4mの方形を呈し、南西隅でＳＢ27の上層を切り、西側がＳＢ13の床面を切っている。また、北西隅が調査区外に延びる。検出面から床面までの深さは30cm程度である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はカマド周辺を除き不明瞭である。覆土から床面にかけ多量の炭化材・炭化物が見られることから焼失家屋と推定される。

カマドは西壁中央部に構築されており、両袖間外側の幅0.9m・長さ１m、煙道の長さ0.5mで、両袖の先端に袖石を持つ石組みカマドである。

遺物は床面を中心に出土し、土師器甕などみられるが、ＳＢ13の遺物と混在している可能性がある。

⑬ＳＢ20（遺構－図版7　遺物－図版53　写真図版－８・41）

AS-01グリットを中心にⅢ層から古墳時代と推定される住居址を確認した。住居址北側でＳＢ37の上層を切っている。2.2×2.2mの隅丸方形を呈し、検出面から床面までの深さは約10cmと浅い。床面全面に炭化材・炭化物・焼土が堆積しており、焼失家屋と推定される。床面は軟弱で、炉址・カマドなどの施設は確認できなかった。

遺物は少なく、土師器小形壷の他は破片が多く、図示したものは少ない。

⑭ＳＢ21（遺構－図版6　遺物－図版51　写真図版－８・35）

AO-02グリットを中心にⅢ層から古墳時代の住居址を確認した。東側を攪乱により破壊され、住居址中央部が暗渠により分断されている。重複関係はＳＢ37の上層を切っている。方形を呈すると推定され、検出面から床面までの深さはおよそ20cmである。壁は緩やかに立ち上がり、床面はカマド周辺を除き不明瞭である。カマドは西壁中央部に構築されているが、近代の暗渠により大部分が破壊されている。袖石の片方と掘り方が確認され、周辺に天井石と推定される平石が確認された。こうした点から石組みカマドの可能性がある。

遺物はカマド北側のピット内から坏３点、カマド東側から高坏１点がみられ、その他土師器甕２点など出土しているが、これらは下層から確認されたＳＢ37の遺物の可能性がある。なお、東側に編み物石の集中が見られた。

⑮ＳＢ23（遺構－図版6　写真図版９）

AM-07グリットを中心にⅢ層から時期不明の住居址を確認した。上層のＳＢ11床下調査時に確認されたもので、3.2×３mの方形隅丸を呈し、検出面から床面までの深さはおよそ20cmである。壁は緩やかに立ち上がり、床面は軟弱な部分が多い。炉址・柱穴等は確認されていない。

遺物は覆土中から主に出土しているものの破片が多く時期は不明であるが、古墳時代と推定される。

⑱ＳＢ25（遺構－図版８　遺物－図版55　写真図版－９・43・44）

AO-04グリットを中心にⅢ層から古墳時代中期の住居址を検出した。南西隅をＳＢ46に切られている。5.2×５ｍの方形を呈し、主軸はＮ－30°－Ｅを示す。検出面から床面まではおよそ10cm程度と浅く、壁は緩やかに立ち上がる。床面は堅く、北西隅周辺に炭化物が多量に分布していた。炉址・柱穴などは確認されていない。

遺物は多く南西側を中心に床面から台付甕・高坏類が集中して出土しており、礫なども散見される。

⑰ＳＢ27（遺構－図版９　遺物－図版57　写真図版－10・45）

AL-44グリットを中心にⅢ層から古墳時代中期の住居址を確認した。北西隅上層でＳＢ19・13に切られ、南側はＳＢ48・31・39を切っている。7.2×6.2の方形を呈し、検出面から床面までの深さはおよそ40cmである。壁は緩やかに立ち上がり、床面はカマド周辺を中心に堅い。カマドは北壁中央に構築されているが袖部分が一部壊されていた。、規模は両袖外側間の幅1.3m、長さ1.6m、煙道部の長さ0.8mを測る粘土カマドである。カマド内部からは坏が２個体出土している。

遺物はカマド周辺に集中してみられ、土師器高坏・坏、須恵器瑞など出土しているが１点弥生後期の器台が混入している。また住居址南西隅には編み物石がみられた。

⑱ＳＢ29（遺構－図版８　遺物－図版58　写真図版－11・46・47）

AH-01グリットを中心にⅢ層から古墳時代中期の住居址を確認した。6.2×6.2mの方形を呈し、弥生時代のＳＢ26・32・38と重複関係にある。検出面から床面まではおよそ40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は全体的に堅いものの、炉址・柱穴などは確認できなかった。

遺物は東壁付近を中心に床面付近から出土し、土師器高坏・小形壷・坏・甕・壷、須恵器瑞・蓋杯など多量に見られるが、弥生後期の器台が混入している。

⑲ＳＢ30（遺構－図版10　遺物－図版59　写真図版－11・48）

AM-47グリットを中心にⅢ層から古墳時代中期の住居址を確認した。５×４ｍの方形を呈し、弥生時代のＳＢ47・48と重複関係にある。床面全体に炭化材などが分布しており、焼失家屋と判断される。検出面から床面まではおよそ20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は全面にわたり堅くたたきしめられており、北壁寄り中央に径30cm程度の円形の地床炉が確認された。地床炉は浅い堀込みがみられるほか炉辺石など見られない。また炉址北側にも焼土が見られた。柱穴などは確認されなかった。

遺物は炉址東側付近床面から集中して出土し、土師器高坏・甕などが見られるが、破片が多い。弥生後期の遺物も混在している。

⑳ＳＢ33（遺構－図版11　遺物－図版60・61　写真図版－12・49～52）

AK-03グリットを中心にⅢ層から古墳時代中期の住居址を検出した。南側隅をＳＢ22に切られている。5×５ｍの隅丸方形を呈し、主軸はＮ－４°－Ｅを示す。検出面から床面まではおよそ40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は堅く叩き締められており、全面に炭化材・焼土等が多量に見られることから焼失家屋と推定される。炉址・柱穴などは確認されていない。

遺物は北壁付近より甕類・南西隅より高坏類がまとまって出土している。

㉑ＳＢ34（遺構－図版11　遺物－図版62　写真図版－12・52）

AO-45グリットを中心にⅢ層から古墳時代中期の住居址を検出した。南西隅をＳＢ19に切られている。5.4×5.4mの方形を呈し、主軸はN-73°-Wを示す。検出面から床面までではおよそ20cmで、壁は緩やかに立ち上がる。床面は炉址周辺が堅く、その他は軟弱である。径40cm程度の円形の炉址が北西壁寄りに確認されたが、掘り込みなどは行われていない。また、炉址周辺は多量の炭化物が見られた。柱穴等は確認されなかった。

遺物は炉址周辺を中心に、高坏・小形壷等が出土している。また弥生後期の甕も混在する。

㉒ＳＢ39（遺構－図版13　遺物－図版63　写真図版－53）

AH-45グリットを中心にⅢ層から古墳時代中期の住居址を検出した。ＳＢ27・39と重複関係にあり、北西隅をＳＢ39により壊されている。6.7×6.4mの方形を呈し、主軸はN-12°-Eを示す。住居址はＳＢ31床下調査中に確認されたため、検出面から床面までは約10cmと浅い。壁は緩やかに立ち上がり、床面は軟弱である。炉址・柱穴などは確認されていない。

遺物は南西隅床面から甕・小形壷などが出土しているほか遺物は少ない。

㉓ＳＢ40（遺構－図版13　遺物－図版64　写真図版－13・54）

AM-00グリットを中心にⅢ層から古墳時代中期の住居址を検出した。東側約半分をＳＢ36に切られ、南西隅でＳＢ46を切る。5.4×4.4mの方形を呈し、住居址ほぼ中央部に炉址が確認された。検出面から床面までは約20cmで、壁は緩やかに立ち上がる。床面は炉址周辺が堅く叩き締められている。柱穴などは確認されなかった。

炉址は長径60cm程度の楕円形の地床炉で、僅かな掘り込みが確認された。
遺物は、炉址北西側に集中しており、高坏・小形壷・坏・甕などが出土している。

㉔ＳＢ41（遺構－図版14　遺物－図版63　写真図版－13）

AR-46グリットを中心にⅢ層から古墳時代中期の住居址を検出した。南東側1/3をＳＢ45に切られ、西側隅を中世の柱穴等により破壊されている。4.5×4.3mの方形隅丸を呈すると推定され、検出面からの深さは約10cm程度である。壁は緩やかに立ち上がり、床面は堅く叩き締められている。住居址北西寄りには地床炉が確認された。地床炉は長径１ｍ・短径70cm程度の楕円形を呈し、南東側に炉辺石が見られた。炉址北側を中心に炭化物の分布が見られた。柱穴など確認されていない。

出土遺物は少なく、床面から小形壷・甕などが出土している。

㉕ＳＢ42（遺構－図版14　遺構－図版64）

AS-42グリットを中心にⅢ層から古墳時代と推定される住居址を確認した。住居址の南隅のみ確認され大半は調査区外及び天竜川の氾濫により破壊されている。ＳＢ44を切り、検出面から床面までの深さはおよそ20cmである。床面は部分的に堅いところが見られるものの、全体的に軟弱である。柱穴などは

確認されなかった。

遺物は壁際床面を中心に出土しており、土師器坏・甕など見られるが、量も少なく破片が多い。

㉖ＳＢ44（遺構－図版14　遺物－図版64）

AS-43グリットを中心にⅢ層から古墳時代中期の住居址を検出した。北東側約半分を天竜川の氾濫・ＳＢ42により破壊されているものの、隅丸方形を呈すると推定される。検出面から床面までは約20㎝で、床面は全体的に軟弱である。住居址北壁寄り中央部から地床炉が確認された。地床炉は長径径40㎝程度の不整形で、掘り込みなどは確認できなかった。

遺物は南東隅付近を中心に床面から出土し、高坏・坏・小形壷・甕・須恵器高坏等が見られる。

㉗ＳＢ45（遺構－図版15　遺物－図版65　写真図版－14）

AQ-48グリットを中心にⅢ層から古墳時代の住居址を確認した。北側でＳＢ41、南隅でＳＢ47の上層を切る。3.4×3.1の隅丸方形を呈し、検出面から床面までの深さはおよそ30㎝である。壁は緩やかに立ち上がり、床面はカマド周辺を除き軟弱である。カマドは北壁やや西寄りに構築され、一部が破壊されているものの、規模は両袖外側間の幅0.6m、長さ0.9m、煙道部の長さ0.8mを測る粘土カマドである。カマド内部からは長胴甕が出土している。

遺物は全般に少なく、土師器高坏・甕などが見られるが、破片が多い。

㉘ＳＢ46（遺構－図版15　遺物－図版65　写真図版－14）

AP-02グリットを中心にⅢ層から古墳時代中期の住居址を検出した。南西隅をＳＢ40に切られている。4.7×4.6mの方形を呈し、主軸はN-177°-Wを示す。検出面から床面まではおよそ20㎝で、壁は緩やかに立ち上がる。床面は炉址周辺が堅く、その他は軟弱である。炉址は南壁寄りの中央に径40㎝程度の円形の地床炉が確認された。柱穴などは確認されていない。

遺物は炉址周辺から高坏などが出土しているが、全体的に少ない。

㉙ＳＢ49（遺構－図版16　遺構－図版65）

AH-02グリットを中心にⅢ層から古墳時代と推定される住居址を確認した。ＳＢ29・22・33などによって切られており南東壁の一部のみ検出された。床面は堅く叩き締められているが、柱穴などの諸施設は確認されなかった。

遺物は床面全面から出土しており、土師器高坏・台付甕・坏など出土している。

㉚ＳＢ50（遺構－図版15　遺物－図版65）

AJ-05グリットを中心にⅢ層から古墳時代の住居址を確認した。住居址南側2/3をＳＢ33・22によって切られているために全体の1/3を調査した。規模・形状共に不明であるが、床面全面に炭化材が分布しており、焼失家屋と推定される。

遺物は東側壁際を中心に出土しており、土師器高坏・小型の甕・台付壷・台付甕の台部分などが見られる。

2）建物址（ＳＴ）

①ＳＴ04（遺構－図版17）

AI-06グリットを中心にⅢ層から古墳時代と推定される建物址を検出した。長径0.8～1.2m、深さ0.4m程度の穴がおよそ2.5mの間隔で４つ直線的に配置されている。北西側付近に対応するピットは確認されておらず、南東側は重機による掘削時に破壊されている。形状から掘立柱建物址の一部であると推定されるが、規模など不明な点が多い。遺物は確認されていない。

第３節　奈良～平安時代の遺構

1）溝址

①ＳＤ02（遺構－図版29　遺物－図版70　写真図版－20）

BV-47グリットを中心に平安時代と推定される溝址を確認した。全長14m程度で南北に伸びており、北端部でＳＤ03に切られている。南端部分は水田址を切っており、一部調査区外に伸びている。幅は0.9～0.3mと一定ではなく、深さは最深部で30cm程度である。溝の底部には砂の堆積が見られ、流水があった可能性がある。遺物は底面付近の砂層中から主に出土しており、灰釉陶器碗・皿・段皿・須恵器坏・土師器坏などが見られる。

②ＳＤ03（遺構－図版30　遺物－図版71）

AB-02グリットを中心に平安時代と推定される溝址を確認した。全長24mで東西に伸びており、ＳＤ02とほぼ直交している。幅は１～0.3mと一定しておらず、深さは20cm程度である。重機により部分的に削平されており、全体の形状は不明な点がある。溝底面には部分的に砂層が見られ、流水があった可能性がある。遺物は主に底面付近から出土しており灰釉陶器碗・須恵器坏・土師器などが見られる。

2）水田址（遺構－図版34　遺物－図版71・72・89　写真図版－２）

調査区南側BO-48～BV-48グリットにかけて奈良～平安時代と推定される水田址を確認した。北側は重機による表土除去時に削平されており、南・東・西側は現道及びJR線のため調査は不能で部分的な調査に止まった。検出面は古墳時代中期の集落より上層であり、BS-45グリットで平安時代のＳＤ03に切られている。水田面の上面には砂層が約10cm程度堆積していたため、畦畔・水田面の検出は容易であった。検出された畦畔は、基底部の幅0.4～0.6m程度の極細い畦畔で、不規則な配置がみられ不整形な田面形状を示す部分もある。

確認された田面は16区画で、水田一枚の面積は14.9～39.1㎡とばらつきが見られる。水田面は調査区西端から南東に向け傾斜しており、水口は傾斜方向に10箇所、南北方向に１箇所見られる。水田面には楕円形の凸凹が随所に見られる。

遺物は水田面から打製石器・抉入打製石包丁・磨製石包丁、水田耕作土中から土師器高坏・須恵器蓋・及び時期不明の布目瓦片、水田面下層から弥生時代中期の土器片が出土している。これらの遺物は、下層の遺物を除き弥生時代から古墳時代までと時代幅があり、水田址の年代を示す資料とはなり得ないと考えられる。

第4節 中世の遺構

1）竪穴状遺構（ＳＢ）

①ＳＢ01（遺構－図版１　遺物－図版66　写真図版－３）

AM-04グリットを中心にⅡ層から中世の竪穴状遺構を検出した。3.1×1.4mの不整形を呈し、西側部分が若干張り出している。この張り出し部は他の遺構とも考えられるが明確に分離することができなかった。壁は緩やかに立ち上がり検出面から底面までの深さは約30cm程度である。検出面から床面にかけての覆土中には拳大から人頭大の礫・建築部材と推定される木製品等が見られた。

遺物は底面より天目茶碗・擂鉢が出土しており15世紀後半から16世紀に比定される。

②ＳＢ02（遺構－図版１　遺物－図版66　写真図版－３）

AL-07グリットを中心にⅡ層から中世の竪穴状遺構を検出した。3.6×1.5mの不整形を呈し、検出面から床面までの深さはおよそ20cmである。壁は緩やかに立ち上がり検出面から床面にかけて拳大から人頭大の礫が多量に混入していた。遺物は底面から刳物が出土している。

③ＳＢ03（遺構－図版１　遺物－図版66）

AP-43グリットを中心に中世の竪穴状遺構を検出した。４×1.6mの長方形を呈し、検出面から床面まではおよそ20cm程度である。壁は緩やかに立ち上がり、覆土中には礫が多数混入していた。

遺物は覆土中から古瀬戸平碗が出土しており、15世紀に比定される。

④ＳＢ04（遺構－図版１　遺物－図版66　写真図版－４）

AW-48グリットを中心にⅡ層から中世の竪穴状遺構を検出した。北側が天竜川の氾濫により破壊されているため詳細は不明であるが、長方形になると推定される。壁は緩やかに立ち上がり、床面上には礫が少数見られた。

2）建物址（ＳＴ）

井戸下遺跡では調査区北半分を中心にⅡ層上面から1,000以上のピットが確認されている。ピットの形態には円形・方形・楕円形があり、多数のピットが切り合っている物もみられた。これらの大半にはピット内部には栗石と考えられる礫がみられる例・平たい礫が据えられている例・柱根の残存する例などがみられ、いずれも建物址を構成する柱穴であると推定される。しかしその大半は調査時および整理作業時においても建物址として把握するのに至らなかった。こうしたピット群を除き、調査時・整理時に確認された建物址について以下に述べる。なお、多くの建物址は図上復元によって把握されたものであり、検討が不十分であるため、完全な復元ではない。今後の課題とし、御教示を願うものである。

①ＳＴ01（遺構－図版17）

AA-48グリットを中心に中世の建物址を検出した。建物址のほぼ中央部分でＳＤ02を切る。建物址の東西両端部は重機の表土剥ぎ時に削平されており、柱穴は全て検出されておらず、全体の形状は不明で

ある。確認された規模は桁行8間（約17.1m）×梁行（約1.2m）の極細長い長方形の建物址で棟方向はN－84°－Eを指向する。柱間寸法は桁行が1.6～2.5mで、梁行が1.1～1.2mを測る。柱穴は径20～40cmの円形あるいは楕円形を呈し、深さは10～20cmで内部に柱の固定用と思われる礫が見られるものもある。建物址内部には施設が確認されていない。遺物は出土していない。

②ＳＴ02（遺構－図版17）

AB-43グリットを中心に中世と推定される建物址を検出した。ＳＴ01に南側で隣接し、ＳＤ01に北側で隣接しており、ＳＤにより柱穴の一部が破壊されている可能性が高い。確認されたは1間×1間で棟方向は不明である。柱間寸法は南北方向で1.6～約3m、東西方向で1.8mを測り、特に南北方向の柱間が異なるため、北東隅の柱穴はこの建物址に関係しない可能性が高い。柱穴は20～40cmの円形を呈し、前述の柱穴の他は柱痕あるいは礫が底面に見られる。建物址内部には施設など確認されていない。遺物は出土していない。

③ＳＴ03（遺構－図版17）

AA-00グリットを中心に中世と推定される建物址を検出した。ＳＴ01と重複関係があるが新旧関係は不明である。柱穴は東側が1本確認できなかった。規模は桁行2間（約3.5m）×梁行1間（約1.7m）のやや台形を呈する長方形で、棟方向はN－96°－Eを指向する。柱間寸法は桁行で1.7～1.9m梁行が1.7～1.2mを測る。柱穴は20～30cmの円形で、柱痕の見られるものもある。

遺物は出土していない。

④ＳＴ05（遺構－図版18）

AP-47グリットを中心に中世の建物址を検出した。調査時点では建物址の存在が確認できていたが、最終的な判断は整理時に行った。ＳＴ06・ＳＴ09と重複関係があるが、新旧関係は不明である。しかし、ＳＴ06と主軸はほぼ同一である点からＳＴ06の建て替えの可能性がある。規模は桁行6間（約10.9m）×梁行1間（約4.6m）の長方形で、棟方向はN－12°－Eを指向する。柱間寸法は桁行で1.4～2mを測る。柱穴は径20cm～60cmで、楕円形・円形・方形と様々な形状になる。柱穴の中には柱痕を持つ物・柱を支える礫が見られるものもある。建物址付属施設としてはＳＫ21があげられる。ＳＫ21はごく浅い掘り込みがあり、木の囲いが見られ、四隅に径10cm程度の柱痕を持つ長方形の土坑である。

遺物はＳＴ06との切り合い箇所から古瀬戸天目茶碗が出土しており、15世紀後半に比定される。

⑤ＳＴ06（遺構－図版18）

AQ-47グリットを中心に中世の建物址を検出した。調査時点で建物址の存在が確認されていたが、最終的な判断は整理時に行った。ＳＴ05・09、ＳＤ11と重複関係にあるが新旧は不明である。ＳＴ05とほぼ同軸にあるためＳＴ05より古いと思われ、建物の建て替えが行われたと推定される。規模は桁行4間（約7.5m）×梁行1間（約3.7m）の長方形で、棟方向はN－12°－Eを指向する。柱間寸法は桁行で1.6～2mを測る。柱穴は径20～48cmで、円形あるいは楕円形である。柱穴の中には柱を支える礫が見られるものもある。

遺物は出土していない。

⑥ＳＴ07（遺構－図版18）

AV-00グリットを中心に中世の建物址を確認した。調査時点で建物址の存在は確認されていたが、最終的な判断は整理作業時に行った。ＳＴ08・10と重複関係にあり、ＳＴ08より新しい。ＳＴ08とほぼ同軸にあるため建て替えの可能性がある。規模は桁行４間（約7.4m）×梁行１間（約４m）の長方形で、棟方向はＮ－17°－Ｅを指向する。柱間寸法は桁行で1.5～1.9mを測る。柱穴は40～50cmで、円形あるいは方形である。柱穴の中には柱痕の残るもの、礫が見られるものなどがある。

建物址に付属する施設としてＳＫ42およびＳＤ12があげられる。ＳＫ42は長方形の浅い土坑で、内部に礫がみられ、径２cm程度の碁石状の平石が数個出土している。ＳＤ12は幅20cmで、建物内を仕切るように南側がL字に曲がっている。

出土遺物は古瀬戸の合子蓋が出土しており15世紀に比定される。

⑦ＳＴ08（遺構－図版18）

AV-00グリットを中心に中世の建物址を確認した。調査時点で建物址の存在は確認されていたが、最終的な判断は整理時に行った。ＳＴ07と重複関係にあり、古いと考えられる。規模は桁行４間（約5.3m）×梁行１間(3.9m)の長方形を呈し、棟方向はＮ－15°－Ｅを指向する。柱間寸法は桁行で1.6～1.9mを測る。柱穴は北西隅および南西隅の２本が近代の攪乱により破壊され不明であるが、径20～40cmで、円形を呈する。

遺物は出土していない。

⑧ＳＴ09（遺構－図版18）

AS-00グリットを中心に中世の建物址を確認した。調査時に建物址の存在は確認されていたが、最終的な判断は整理時に行った。ＳＴ05・10・23と重複関係にあり、ＳＴ05のピットが切り合っているものの新旧関係は不明である。規模は桁行４間（約４m）×梁行４間（約3.6m）の正方形に近い建物で、棟方向はＮ－74°－Ｗを指向する。柱間寸法は桁行で0.9～１m、梁行で0.8～１mを測る。柱穴は一部攪乱により破壊されているが径25～50cmで楕円形・方形を呈し、柱痕・礫が見られるものもある。
建物址に付属する可能性のある遺構としてＳＫ46がある。ＳＫ46は長径２m程度の長方形の浅い土坑で、内部に礫が見られる。遺物は出土していない。

⑨ＳＴ10（遺構－図版18）

AS-00グリットを中心に中世の建物址を確認した。整理時に検討し建物址と認定したものである。ＳＴ08・09・23と重複関係があるが重複関係は不明である。規模は桁行３間（約3.7m）×梁行１間（約２m）の長方形を呈し、棟方向はＮ－75°－Ｗを指向する。柱間寸法は桁行で1.6～1.8mを測る。柱穴は径30～40cmで、方形・楕円形を呈し、柱痕・礫がみられるものもある。また柱穴６本の内４本にピットの重複が見られることから建物址の建て替えあるいは拡張が考えられる。

遺物は出土していない。

⑩ＳＴ11（遺構－図版19）

AQ-01グリットを中心に中世の建物址を確認した。整理時に検討し建物址と認定した。規模は桁行２間（約３ｍ）×梁行２間（約1.7ｍ）の総柱建物址である。棟方向はＮ－95°－Ｗを指向する。柱間寸法は桁行で1.2～1.7ｍ、梁行で0.7～0.8ｍを測る。柱穴は20～50㎝で円形・方形を呈し、中に柱痕が見られるものもある。西側の梁方向の３本は柱穴の規模も小さく、桁行間も狭いことからあるいは庇の可能性もある。

遺物は陶器小片が出土している。

⑪ＳＴ12（遺構－図版19）

AW-03グリットを中心に中世の建物址を確認した。調査時に確認し最終的な判断は整理時に行った。規模は桁行２間（約2.1ｍ）×梁行１間（約1.6ｍ）で四隅に庇と考えられる柱穴を持つ長方形の建物址である。母屋の棟方向はＮ－75°－Ｗを指向する。柱間寸法は桁行で0.3～0.8ｍを測る。庇と考えられる部分の桁行は2.1ｍ、梁行は1.5ｍである。柱穴は母屋で30㎝程度の円形で、庇は20㎝の楕円形を呈する。

遺物は隣接するグリットから青磁碗片（中国・14～15世紀）が出土している。

⑫ＳＴ13（遺構－図版20）

AT-04グリットを中心に中世の建物址を確認した。整理時に検討し建物址と認定した。規模は桁行３間（約5.4ｍ）×梁行２間（約４ｍ）のやや台形になる建物址である。東側棟方向の柱が攪乱のため１本欠落する。棟方向は真北を指向する。柱間寸法は桁行で1.7～２ｍ、梁行で1.7～2.4ｍを測る。柱穴は30～50㎝で円形・方形を呈する。南側の梁行には栗石と考えられる礫の集中箇所がみられるが明確な掘り込みは見られない。

建物址に関係する掘り込みは不詳であるが、建物址北側一帯に炭化物・焼土の分布が面的に見られた。遺物は建物址中央付近から瀬戸擂鉢片が出土しており、15世紀に比定される。また北側炭化物・焼土分布域に不明鉄製品・古銭等が出土している。

⑬ＳＴ14（遺構－図版20）

AS-04グリットを中心に中世の建物址を確認した。調査時に確認し整理時に最終的な判断を行った。ＳＴ13・15・16と切り合い関係があるが、新旧関係は不明である。規模は桁行６間（約11ｍ）×梁行（約４ｍ）の長方形を呈する建物址である。建物址南側が暗渠により破壊されているため柱穴が１本欠落している。棟方向はＮ－20°－Ｅを指向し、柱間寸法は桁行で1.6～２ｍを測る。柱穴は40～60㎝で円形・楕円形を呈し、柱痕・礫が見られるものもある。また確認された柱穴13本の内３本は栗石のみ検出した。建物内部では北側に炭化物の分布が見られた。

建物址に関係する遺構としてＳＫ30が挙げられる。

そのほか本建物址に付属する可能性がある施設としてＳＫ31・35・36があるが、ＳＴ15・16との切り合い関係が判断できず詳細は不明である。

遺物には建物址中央部付近から鉄製鋤先１点が出土している。

⑭ＳＴ15（遺構－図版20）

AT-05グリットを中心に中世の建物址を確認した。調査時に確認し整理時に最終的な判断を行った。ＳＴ13・14・16と重複関係にあり、ＳＴ16のピットが本建物址のピットを切って堀込まれることからＳＴ16よりは古いと考えられる。規模は桁行５間（約９ｍ）×梁行１間（約４ｍ）の長方形を呈する建物址である。棟方向はＮ－12°－Ｅを指向し、柱間寸法は桁行で1.6～２ｍを測る。柱穴は径40～60㎝で円形・楕円形を呈し、一部栗石の部分も見られる。柱穴の大半はＳＴ16の柱穴と重複関係にあり、ＳＴ16が建て替えられたものと推定される。

建物に関係する施設としてＳＫ31・35・36があげられるが切り合いが関係あるため詳細は不明である。遺物は出土していない。

⑮ＳＴ16（遺構－図版20）

AT-05グリットを中心に中世の建物址を確認した。調査時に確認し整理時に最終的な判断を行った。ＳＴ13・14・15・18と重複関係にありＳＴ15より古いと推定される。規模は５間（約９ｍ）×梁行（3.5m）の長方形を呈する建物址である。棟方向はＮ－10°－Ｅを指向し、柱間寸法は桁行で1.5～２ｍを測る。柱穴は径30～60㎝で、円形・楕円形・方形を呈し、柱痕・礫が見られるものもある。遺物は出土していない。

⑯ＳＴ17（遺構－図版19）

AO-04グリットを中心に中世の建物址を確認した。整理時に検討し建物址と判断した。ＳＴ17と重複関係にあるが新旧関係は不明である。またＳＫ25・26・27とも重複関係にあるが、いずれのＳＫも本建物址のピットを壊してつくられており、新しいと考えられる。なお、柱穴の一部は近代の暗渠により破壊されている。規模は桁行３間（約3.3m）×梁行２間（約2.3m）の長方形を呈する建物址である。柱間寸法は桁行で１～1.2m、梁行で１～1.3mを測る。柱穴は径40～60㎝で楕円形・円形を呈し、柱穴内部に礫が見られるものもある。

遺物は出土していない。

⑰ＳＴ18（遺構－図版21）

AQ-07グリットを中心に中世と推定される建物址を確認した。整理時に検討し建物址と判断した。ＳＴ15・16・26と重複関係にあるが新旧関係は不明である。建物址の東側が調査区外に延びると推定されるため詳細は不明である。確認された規模は桁行４間（約6.8m）×梁行３間（約5.9m）の長方形を呈する建物址である。棟方向はＮ－62°－Ｗを指向し、柱間寸法は桁行で約1.7m、梁行で1.6～1.8mを測る。柱穴は径40～50㎝の円形・楕円形を呈し柱痕・礫が見られるものもある。

遺物は出土していない。

⑱ＳＴ19（遺構－図版19）

AO-42グリットを中心に中世と推定される建物址を確認した。整理時に検討し建物址として判断した物である。ＳＴ20・ＳＤ11・中世のＳＢであるＳＢ03と重複関係にあり、ＳＤ11より古いと推定される。

規模は桁行２間（約４ｍ）×梁行１間（約２ｍ）の長方形を呈する建物址である。棟方向はＮ－７°－Ｅを指向し、柱間寸法は桁行で1.8～2.1ｍを測る。柱穴は径30～50㎝の円形を呈し、柱穴内に礫が見られるものもある。

遺物は建物址南西隅から天目茶碗片が出土している。

⑲ＳＴ20（遺構－図版19）

AO-43グリットを中心に中世と推定される建物址を確認した。整理時に検討し建物址と認定した物である。ＳＴ19・ＳＢ03と重複関係にあるが新旧関係は不明である。規模は桁行１間（約2.8ｍ）×梁行１間（約２ｍ）の長方形を呈し、棟方向はＮ－85°－Ｗを指向する。柱穴は径20～40㎝の円形を呈し、柱穴内部に礫が見られるものもある。建物址が中世のＳＢ03と同軸であることからＳＢ03の柱穴である可能性も否定できない。遺物は出土していない。

⑳ＳＴ21（遺構－図版21）

AS-44グリットを中心に中世の建物址を確認した。整理時に検討し建物址と認定した。規模は桁行３間（約５ｍ）×梁行１間（約4.5ｍ）の長方形の建物址で、桁方向には庇と推定される柱穴が見られる。母屋の棟方向はＮ－50°－Ｅを指向し、柱穴は柱間寸法が桁行で1.3～２ｍを測り、径30～80㎝と大きさにばらつきが見られる。柱穴内部には柱痕が見られるものもある。庇部分は柱間寸法が1.2～２ｍで、柱穴は径20㎝程度の円形を呈する。

遺物は南西箇所から瀬戸産の天目茶碗片が出土しており、15世紀に比定される。

㉑ＳＴ22（遺構－図版20）

AW-48グリットを中心に中世の建物址を確認した。整理時に検討し建物址と認定した。北側が天竜川の氾濫により削平されており部分的な検出に止まった。規模は桁行２間（2.8ｍ）以上×梁行１間（１ｍ）以上で、棟方向などの詳細は不明である。柱穴の柱間寸法は１～1.5ｍを測り、径30～40㎝の円形もしくは方形を呈す。柱穴内部には礫の見られるものもある。

建物址の内部にはＳＢ04とした遺構があり、ＳＴ22の柱穴もこれに関係する可能性がある。

㉒ＳＴ23（遺構－図版18）

AS-10グリットを中心に中世の建物址を確認した。整理時に検討し建物址と認定した。ＳＴ09・10と重複関係にあるものの、新旧関係は不明である。規模は桁行３間（約2.5ｍ）×梁行２間（約2.1ｍ）の長方形を呈する総柱建物址である。棟方向はＮ－16°－Ｅを指向し、柱穴は柱間寸法が桁行で0.8～１ｍ、梁行で0.9～1.2ｍを測り、径15～40㎝の円形を呈する。柱穴内部には柱痕の見られるものもある。遺物は出土していない。

㉓ＳＴ24（遺構－図版20）

AT-02グリットを中心に中世の建物址を確認した。整理時に検討し建物址と認定した。ＳＴ10・25と重複関係にあり、ＳＴ25の柱穴が本建物址の柱穴を壊している。また建物址東側部分が近世の暗渠によ破壊されているため全体の規模は不明である。確認された規模は桁行２間以上（約1.9ｍ）×梁行２間（約1.9ｍ）の長方形を呈すると推定される建物址である。棟方向はＮ－48°－Ｗを指向し、柱穴は柱間寸法が桁行で約0.9ｍ、梁行は0.9ｍを測り、径30～50㎝の円形もしくは方形を呈する。柱穴内部には礫

が見られるものもある。

遺物は建物址内部のグリット中から瀬戸産の平碗が出土しており、15世紀に比定される。

㉔ＳＴ25（遺構－図版20）

AR-02グリットを中心に中世と推定される建物址を確認した。整理時に検討し建物址と認定した。ＳＴ10・24と重複関係にあり、ＳＴ24より新しい。確認された規模は桁行２間（1.8m）×梁行２間（約1.4m）の長方形を呈する建物址である。棟方向はＮ－35°－Ｅを指向し、柱穴は柱間寸法が桁行で0.8～１m、梁行は0.5～0.8mを測り、径30～50cmの円形もしくは方形を呈する。柱穴内部には柱痕・礫が見られるものもある。遺物は建物址内部のグリットから天目茶碗の小片が出土している。

㉕ＳＴ26（遺構－図版21）

AP-07グリットを中心に中世と推定される建物址を確認した。整理時に検討し建物址と判断した。規模は桁行２間（1.5m）×梁行２間（1.2m）の長方形を呈する総柱建物址である。付近に同様な柱穴が多数分布しているため、規模が拡大する可能性もある。棟方向はＮ－87°－Ｗを指向し、柱穴は柱間寸法が桁行で0.7～0.8m、梁行で0.5～0.6mを測り、長径30cmの長方形・楕円形を呈する。柱穴内部には柱痕が見られるものもある。

遺物は建物址内部のグリットから天目茶碗の小片が出土している。

㉖ＳＴ27（遺構－図版20）

AV-48グリットを中心に中世と推定される建物址を確認した。整理時に検討し建物址と判断した。規模は桁行２間（約1.6m）×梁行２間（約1.3m）の長方形を呈する建物址である。南側梁行の柱穴１本が欠けている。棟方向はＮ－17°－Ｗを指向し、柱穴は柱間寸法が桁行で0.7～0.9m、梁行で0.6mを測り、径40cm程度の長方形・円形を呈する。柱穴内部には礫が見られるものもある。

３）土坑（ＳＫ）

本調査区からは総計51基の土坑が確認されており、その全てが中世の検出面であるⅡ層から確認されている。ここではこれらの土坑の中でも特徴的な事例について各個に記載し、その他の土坑については一覧表でデータを示すこととした。

①ＳＫ09（遺構－図版23　遺物－図版67）

AI-49グリットを中心に確認した。ＳＤ06に近接し、一部切り合っている。長軸約3.7m、短軸約2.6mの長方形に近い不整形を呈し、検出面から土坑底面までの深さは約20cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。土坑の壁及び底面には大小のピットが見られるが、土坑との関連は不明である。遺物は覆土中から出土しており、中国製の白磁皿・青磁碗の破片が見られ、13世紀後半から14世紀に比定される。

土坑の規模が大きくピットも見られることから住居址の可能性も考えられる。

②ＳＫ17（遺物－図版23　遺構－図版67）

AL-05グリットを中心に確認した。ＳＤ07を切って構築されている。長軸約2.1m、短軸約1.9mの三角形に近い不整形を呈し、検出面から底面までの深さはおよそ0.5mである。壁は底面から中程まで緩やかに立ち上がり、その後は急になる。遺物は覆土中から出土しており、瀬戸産の燭台がみられ、14世紀後半に比定される。

③ＳＫ20（遺構－図版24　遺物－図版93　写真図版－15・56）

AF-00グリットを中心に確認した。調査所見ではＳＤ01に付属する施設として判断した。長辺約2.1×短辺約1.1mの長方形を呈し、西側部分でＳＤ01に結合する。遺構周辺にはピットなどの付属施設は確認されていない。検出面からの深さはおよそ40cmで、壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦になる。底面付近には長径30cm程度の礫が底面を取り巻くように配置されていた。底面付近は灰褐色土が堆積しており、その内部から幅１～３cm、長さ20cm程度の薄いヘラ状の木製品が多数確認された。また木製品周辺の土壌と、比較資料として他ＳＫの土壌の分析を行ったところ、ＳＫ20からは鞭虫卵・回虫卵が約10～25／ccとわずかながら検出され、他ＳＫからは検出されなかった。こうした点からトイレ状の遺構である可能性が高いと言える。時期を比定する遺物は出土していないが、検出面は中世の建物址と同一であるため中世と判断される。

④ＳＫ21（遺構－図版24　写真図版－17）

AN-47グリットを中心に確認した。中世の建物址であるＳＴ05内にあり、建物址に付属する施設と考えられる。長辺約1.8×短辺約1.2mのほぼ長方形を呈し、壁には棒状の部材が枠のように填め込まれていた。ＳＫの四隅には径20cm程度の杭が打ち込まれており、部材も確認された。検出面からは約10cmと浅く、底面は平坦で内部には礫が混入していた。ＳＫ20と同様にトイレ状遺構の可能性があるため土壌分析を行ったが、寄生虫卵は確認されていない。

時期を比定する遺物は出土していないがＳＴとの位置関係からＳＴ05に付属する施設と考えられる。

⑤ＳＫ31（遺構－図版25）

AS-05グリットを中心に確認した。中世の建物址のＳＴ14内にあり、建物址に付属する施設と推定される。長辺約3.5×短辺約1.4mのほぼ長方形を呈すると推定されるが、西側を近代の暗渠により破壊されている。検出面からの深さは約20cmと浅く、壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。覆土中から底面にかけて礫が集中しており炭化物・焼土が混入していた。

時期を比定する遺物は出土していない。

⑥ＳＫ36（遺構－図版25）

AU-05グリットを中心に確認した。建物址に付属すると考えられるが、ＳＴ14・15・16の切り合い箇所にあるため所属が不明である。直径約42cmの円形で、底面には薄い円形の板がはめ込まれていた。掘り込みはほとんどなく約５cm程度で底面は平坦である。こうした状況から桶あるいは同様な容器が据え置かれていた箇所と推定される。時期を比定する遺物は出土していない。

⑦ＳＫ42（遺構－図版26　遺物－図版91）

AV-01グリットを中心に確認した。ＳＴ07の北東隅にあり、建物址に付属する施設と推定される。長辺約1.6×短辺約１ｍのほぼ長方形を呈し、検出面からの深さはおよそ10cmである。底面は平坦となり壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面には20cm程度の平たい礫が数個配置されている。

覆土中から径２cm、厚さ５mm程度の薄い円礫が数個出土しており、碁石の可能性がある。

４）溝址

①ＳＤ01（遺構－図版28　遺物－図版68・69・70　写真図版－19・55）

調査区の北半分を取り巻くと推定される中世の溝である。溝は調査区中央部分で調査区を東西に横断し、調査区西側AG-37グリット付近で北に大きく曲がり、調査区北側AS-41付近につながり、AX-47で氾濫源により破壊されている。調査区内の規模は幅４～10ｍで検出面からの深さはおよそ40～50cm程度である。溝の断面形は溝中央部で段が認められ底面にいたる。底面は大部分が平坦であるが部分的に細長い落ち込み・小ピットが認められる。溝東側の底面からは砂・有機質を含む泥が確認されたが、西側部分では確認されていない。溝址南側壁上面には斜め方向に打ち込まれた杭列が長さ24ｍにわたり確認されている。杭列は壁面に対し南向きに打ち込まれており、杭の周囲には地山と異なる土が見られた。このため、壁面を補強する土手状遺構の骨組みである可能性が考えられる。

出土遺物は弥生中期～16世紀までの土器・陶磁器、中世の下駄・曲物底部などの木製品・古銭・骨など多種多様であるが、弥生中期から古墳時代の遺物については、下層に見られる住居址などからの混入と判断される。このため溝址の時期は平安時代～中世にかけて存続していたと推定できる。

②ＳＤ04（遺構－図版30）

AI-04グリットを中心に溝址を確認した。ＳＤ05に平行して隣接し、ＳＤ10に切られている。規模は長さ約５ｍ・幅60cm・深さ20cmで、断面形は北側部分で逆台形、中央部でＵ字状を呈する。底面には小ピットがみられるが、溝址との関係は不明である。遺物は出土していない。

③ＳＤ05（遺構－図版30　遺物－図版71）

AI-05グリットを中心に溝址を確認した。ＳＤ04に平行し、ＳＤ10に切られている。規模は長さ4.2ｍ・幅20～80cm・深さ20cmで、断面形は北側部分で逆台形を呈す。底面は北側部分に小ピットがみられる他はおおむね平坦である。

遺物は溝覆土中から灰釉陶器底部が出土している。

④ＳＤ06（遺構－図版31　遺物－図版71　写真図版－20）

AL-47～AF-02にかけて溝址を確認した。南側はＳＤ01に切られ、東側壁の中程をＳＸ02に壊されている。規模は長さ約16ｍ・幅1.6～2.4ｍ・深さ30cmで、断面形は北側部分で緩いＵ字状を呈する。底面には小ピットがみられ、南端部は一段深く溝状になり、礫が多数混入していた。

遺物は覆土中から弥生中期の甕・中世の内耳土器・16世紀に比定される擂鉢などが出土している。この

うち弥生中期の遺物は下層からの混入と考えられる。

⑤ＳＤ07（遺構－図版31　遺物－図版71）

AM-02グリットを中心に溝址を確認した。東西端部をＳＸ・ＳＫに切られ、溝中央部は近代の暗渠により破壊されている。規模は長さ約８ｍ・幅0.5～1.4ｍ・深さ約20㎝で、断面形は西側で逆台形を呈する。底面には部分的に礫がみられ、中央部分には礫と木製品が混在していた。

遺物は刳物および覆土中から古墳時代の高坏脚部が出土している。

⑥ＳＤ08（遺構－図版31　遺物－図版71・96）

AL-03グリットを中心に溝址を確認した。東端部をＳＫ16に切られ、中央部分を近代の暗渠が分断している。規模は長さ３ｍ・幅60㎝・深さ約20㎝で、断面形は中央部分で逆台形を呈す。底面には溝址の中央付近に礫が集中してみられる箇所がある。

遺物は溝の壁のピットから馬形の木製品、覆土中から古墳時代の土師器が出土している。

⑦ＳＤ10（遺構－図版29）

AG-04～AI-09グリットにかけて溝址を確認した。溝址の大半がＳＤ01により破壊されている。北側部分でＳＤ04・05を切っている。規模は長さ10ｍ・幅60㎝・深さ約40㎝で、断面形は西側で逆台形を呈す。遺物は出土していない。

⑧ＳＤ11（遺構－図版32　遺物－図版71・96）

AH-02～AP-42グリットにかけて溝址を確認した。西側部分が調査区外に延びると推定される。複数の建物址を切っており、建物址群より新しいと推定される。規模は長さ約22ｍ・幅0.6～２ｍ・深さ約20㎝で、断面形はほぼ全体で逆台形を呈する。西側の底面には細長い溝がみられる。底面には小ピットがみられ、東端では流木あるいは部材の集積箇所が確認された。

遺物は木の集積箇所から下駄、覆土中から18世紀代に比定される陶器片が出土している。

⑨ＳＤ12（遺構－図版32　写真図版－20）

AW-00グリットを中心に溝址を確認した。南端部がL字に曲がる。ＳＴ07の内部にあり建物址に付属する溝と考えられる。規模は長さ３ｍ・幅10～20㎝・深さ15㎝で、断面形は西側に傾くＶ字状になる。垂直に立ち上がる東壁には薄い板材が残っていることから板状の部材が立てられていたと推定される。西壁には数個の小ピットが並んで確認された。遺物は出土していない。

5）その他の遺構（ＳＸ）

①ＳＸ01（遺構－図版35　遺物－図版73・91　写真図版－21）

AL-01グリットを中心に検出した。南側でＳＸ02を切っている。長辺約3.6×短辺約２ｍの長方形を呈すると推定される。北・南壁には石組みが見られ、50～60cm程度の長方形の礫を横長に配置し、礫の間には30cm程度の礫を詰めて構成している。長方形の礫には加工が見られる。ＳＸの底面はやや中央部に向かってなだらかな傾斜をなすが、石敷きなどの施設は確認されなかった。覆土は下層に泥・砂が堆積しており、松笠などの植物遺体が見られた。また底面から鑿が出土している

遺構の周囲には、北側を中心に拳大～人頭大の礫が多数みられ、ＳＸに関連すると推定される。遺構内部からは鑿・曲物底部が出土している。内部に砂・泥などが堆積していることから貯水施設あるいは池状の遺構と推定されるが、水路などは確認されておらず性格は不明である。

②ＳＸ02（遺構－図版31　遺物－図版73）

AJ-01グリットを中心に検出した。ＳＤ06と重複関係にあるが新旧は不明である。長軸約７×短軸約４ｍの不整形を呈する。壁は北側が緩やかに立ち上がり、南側は急な立ち上がりをなす。底面はほぼ平坦であるが、壁から底面にかけて不規則に小ピットや打ち込みの杭が見られる。遺構内部から瀬戸産の擂鉢が出土しており、16世紀に比定される。

上層の土がブロック状に混入しており、遺構の形状も不整形であるため後世の攪乱の可能性もある。

③ＳＸ03（遺構－図版35）

AW-02グリットを中心に検出した。ＳＴ07・08の東側に隣接している。近代の暗渠により全体の1/3以上が破壊されているために全体の形状は不明であるが、長軸５×短軸1.5m以上の長方形を呈すると推定される。掘り込みは10cm程度とごく浅く、壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。底面には厚さ３mm程度の薄い板が敷かれていた。また板に接して礫が見られる部分もある。柱穴などは確認されなかった。遺構内部からは遺物が出土していないが、他も建物址と同一の検出面から確認されており、中世と判断される。全体の形状が不明のため詳細は不明であるが、住居址の可能性がある。

第５節　近世の遺構

1）土留め状遺構（遺構－図版33　写真図版－22）

調査区の北端、AW-09～AY-49にかけて検出した。調査区内では東西に約33mの長さで確認されたが東西方向へ更に伸びていると推定される。上面は近代の水田耕作により破壊されたと推定される。遺構から北側は氾濫源となっており、氾濫源と微高地との境に位置すると推定される。遺構は幅２～2.5mで、長さ３ｍ程度の丸太材、50cm程度の木杭及び石組みによって構成されている。構築法は氾濫源と微高地の境界線上に人頭大の礫を用いて石組みし、上面に木杭・丸太材による木組みを行っている。木組みの間からは地山と異なる土が詰められている点から、残存する遺構は堤防あるいは土手状遺構の骨組みである可能性が高い。

遺物は木組み内部から寛永通宝・陶器片などが出土しており18世紀代に比定される。

第V章　遺　物

第１節　弥生時代の遺物

今次調査では基本層序Ｖ層を中心にＳＢ（住居址）06・14・43、他時期のＳＢ・ＳＤの覆土中、各グリットから弥生時代中期の遺物が確認されている。また、ＳＢ（住居址）24・26・32などからは弥生時代後期終末の遺物が出土している。このうち弥生時代中期の遺物は類例の少ない資料のため、小破片を含め、極力図化することに努めた。

１）弥生時代中期の土器（図版45～48・73～76・81～83）

①壷形土器ａ

太く深い沈線文（以下、太沈線文）・沈線文・刺突文・連続爪形文・縄文・条線文などが施文される細頸壷および類似するものを一括した。朱彩される土器とされない土器がある。破片が多く全体の器形を窺い知る資料はない。このため各部位は完形資料のみられる阿島遺跡の例を参考にしている。口縁部は緩やかに外側に開くものが多いが、口唇部形態は様々で、口唇部が外側に面取りされ、端部に刻みがみられるもの（図版45-３）、口唇部を丸く作り内側に刻みを入れるもの（図版47-３）・内面に太沈線と縄文を施した後、口唇部には指頭による圧痕文が施されるもの・外側に刻みを入れるもの（図版47-14）・無文のもの（図版48-33）、口唇直下に隆帯を添付するもの（図版73-13）などがみられる。口縁部から頸部の上半は無文のものが多いが、全面にD字形の刺突文が施されるも（図版74-47）のもみられる。

頸部から胴部にかけては、指頭による円形刺突文・半載竹管状工具外側或いはヘラ状工具を用いた押し引きの連続爪形文・押し引きでない連続爪形文・棒状工具あるいは半載竹管状工具による幅広で太沈線文・地文としての縄文などが組み合わされ文様を構成しているが、破片資料が多いため全体の文様構成がわかるものは少ない。

文様構成が確認されるものとして、口縁部は無文で、頸部に指頭による円形刺突文を一条巡らし、横位の連続爪形文一条と無文帯を交互に配置するもの（図版45-１）、太沈線文を頸部に３条横位に巡らし、胴部上半まで横長の楕円区画を千鳥に配置するもの（図版45-８）、口縁部から頸部下半にかけて単節縄文を施文した後、横位沈線により文様帯を多段に区画し、交互に磨消すもの（図版45-２）がある。この場合、口縁部の縄文帯には縦の幅広で浅い沈線を入れ区画し、頸部の縄文帯には沈線で同心円を数単位入れるようである。また、同様に交互の磨消を行い、縄文帯部分に沈線の格子目を施すもの（図版45-３）もみられる。また、断片的ではあるが、沈線を用いて鋸歯状文・平行沈線文を交互に配置する例（図版81-29）などがみられる。全体の文様構成は不明なものの、部分的な文様構成として、太沈線・連続刺突・櫛状工具による条線が組み合わされるもの（図版82-22）、太沈線・半載竹管状工具あるいは櫛による条線・櫛状工具先端による刺突が組み合わされるもの（図版73-20）、地文縄文で横位の押し引き連続爪形文・太沈線が組み合わされるもの（図版75-８）などがある。

胴部上半の文様帯も破片資料のため単位文様は不明な点が多いが、文様構成の要素として半載竹管状

工具・ヘラ状工具による連続爪形文・押し引きの連続爪形文、櫛状工具による条線文、棒状工具あるいは半載竹管状工具外側による太沈線文、沈線文、地文としての縄文などが組み合わされている。全体の文様構成は不明であるが、その組み合わせとして、横位の連続爪形文帯間に櫛状工具による条線文を充填する例（図版45-18・19）、太い沈線文と半載竹管状工具を用いた細い沈線文を使い連弧状にする例（図版75-29）、櫛状工具により連弧文・横位の羽状条痕文を施した後、連弧文の上下に連続爪形文を重ねる例（図版73-９）、地文を縄文とし沈線文や連続爪形文を加える例（図版75-23・32、83-16・17）、櫛状工具の条線文と沈線文・連続爪形文を組み合わす例（図版74-20）、櫛状工具による条線で楕円区画を連続するもの（図版75-21）などがある。

胴下半部および底部は不明な点が多いが、櫛状工具による横位の条痕文が施される例（図版73-９）があり、阿島遺跡の資料と同様な文様構成になると推定される。

②壷形土器ｂ

櫛状工具・ヘラ状工具を多用する一群で、胎土・焼成・色調などの点で壷形土器ａと異なっている。その特徴から三河地方の瓜郷式に類似する土器である。当該期の住居址をはじめグリットからも出土している。図版45-４は口縁部・胴下半部を欠くものの、５本で１単位程度の櫛状工具による横線文帯を施し、櫛状工具を用い縦方向に器面を６つに分割し、上下を沈線で区画している。区画の間は無文となり丁寧なミガキが確認される部分もある。図版47-２は口縁部から頸部にかけて櫛状工具による沈線が縦位に施され、頸部には３本の沈線を巡らし、胴部上半まで櫛状工具による横線をヘラ状工具で斜方向に細かく刻んだ文様帯と無文帯が交互にみられる。無文帯部分ヘラによる丁寧なミガキが行われている。内面にはハケによる調整が行われている。色調は赤褐色で、胎土・焼成は壷形土器ａに近似している。図版73-７は口縁部が大きく外反し、口唇部は丸く作られる。口縁部は櫛状工具の横線が施され、その他は図版45-４と同様になるが、円弧状の沈線文が施されている。図版73-８は同一個体と推定される頸部片と胴部上半の破片を復元実測したものである。頸部下が一段膨らみ胴部に至る器形を呈し、沈線により区画された文様帯に先端が鋭いヘラ状の工具を用いた格子目文が施され、その後更に２本の横位沈線を追加している。文様帯間は無文となり丁寧なミガキが行われている。胴部上半には櫛状工具で横位の条痕が施され、その上にヘラ状工具でハの字に沈線を施している。色調は黒色で焼成は堅緻である。この他に図版45-27～31、47-30～32、83-43～48・81-13・15・44・49、82-10、75-34～48などに類例がみられる。

③壷形土器ｃ

口縁部を内側に折り返し受け口状になる太頸壷と推定される土器（図版81-45）。１点のみがＳＢ34の覆土中から出土している。内傾する口縁の外側に櫛状工具による短線と楕円形刺突が鋸歯状に交互施文され、刻み・円形刺突が施された低い短隆帯が縦位に貼付されている。口唇部には刻みもみられる。頸部は櫛状工具による条痕がみられ、その上にヘラ或いは棒状工具によるハネ上げ文が施されている。色調は赤褐色を呈し、胎土には細かな白色粒子・雲母片が含まれ、がさつな感じがする土器である。

阿島遺跡・寺所遺跡共に類例が無く、当該期の遺構からの出土ではないため、不明な点が多いが、東海地方の条痕文系の壷と考えられる。

④甕形土器

壷形土器に比べ出土量が多く、口縁部形態・文様・条痕調整などの点でバラエティーに富んでいる。当該期の住居址・グリットなどから出土しているが破片が多い。図版45-5は口縁部が大きく外反する土器で、外面は櫛状工具の条痕文が全面にみられ、口唇部上面は細い粘土帯を貼付する事により肥厚した外側口唇端部には押捺状の刻みを施し、口唇部上面に一周4～6単位と推定される2個1単位の圧痕文を施し、口唇部内側には櫛状工具先端による列点文を巡らし、口縁部内面には櫛状工具条線による円形文が施されている。図版45-6は口縁部が緩やかに外反する土器で、口唇部は面取りされ外傾する。口唇上には櫛状工具による連続刺突文が施され、胴部には櫛状工具による浅い条痕が横方向に施されている。図版47-1は頸部がややくびれ口縁部が緩やかに外反する器形で、口唇部は丸く作られ、外側端部に押捺状の刻みが施されている。また器面全体に櫛状工具による浅い擦痕状の条痕が横方向に施されている。図版68-2は鉢状に大きく外反する器形で、口唇部直下に隆帯を貼付し、隆帯上には指頭圧痕文が施されている。外面には4本1単位の櫛状工具で横位の条痕が施され、内面はハケによる調整がみられる。図版75-49は直立気味に外反し小波状のみられる口縁部で、口唇は外側に面取りされ、端部に刻みが施される。胴部には波頂部から櫛状工具による条線文が縦位に施され、両側は同一工具による短条線文が施されている。

この他に小破片のため全体の様相は不明であるが、口唇部が丸く作られ、刻みが施されるもの（図版47-39)、口唇部が四角く作られ内外端部に刻みが施されるもの（図版47-36)、口唇部に粘土帯を貼付し、外傾するT字状の口唇部を作り肥厚させ、肥厚部には押捺状の刻み、口唇部内側には刻みを入れるもの（図版47-34・38)、口唇部直下に隆帯を貼付し、隆帯上には押捺を加えるもの（図版47-33・43）など口縁部形態が様々である。

⑤その他

出土量はわずかであるが、壷・甕以外の機種も出土している。図版47-5は内弯する口縁部片で太沈線・櫛状工具による条線を用いて文様を構成する小型の鉢と考えられる。図版75-30・31は内弯する胴部片で、30には円形の貼付文がみられる。阿島遺跡出土の瓢形壷に近似する。図版75-1は櫛状工具で髭面を表現した人面付き土器で、耳に相当する部分には穴があけられている。

2）弥生時代中期の石器（図版84・85）

弥生時代中期の住居址であるＳＢ06（図版84）・14（図版84・85）からまとまって出土している。ＳＢ06の石器の器種組成は打製石斧（１・２）・有肩扇状形石器（３）・横刃型石包丁（４・５）・打製石鏃（６）であり、ＳＢ14では打製石斧（７～13）・有肩扇状形石斧（１）・横刃型石包丁（２～５）・横刃型石器（６～10）・磨製石器（11・17）・磨石（11・13）・敲打器（12・14・15）などがみられる。このうち打製石斧は完形品が無く、いずれも刃部あるいは基部のみの出土であるが、形態は短冊形或いは撥型で、長さ20cm程度・厚さ4cm程度の大型の石器が多いと推定される。横刃型石包丁は抉入打製石包丁と異なり、紐掛け部と考えられる抉部を持たず、刃部を細かい剥離で作り出し、背部は丁寧な刃潰しがなされている。また磨製石器とした16は細長い礫の先端部分のみ研磨し刃部を作り出し、小型のノミ形石器としている。11は刃部付近にわずかな研磨が認められる。

3） 弥生時代後期の土器・石器（図版54・56・60）

弥生時代後期の住居址であるＳＢ24・ＳＢ26・ＳＢ32などで主体となり、重複関係にある他時期のＳＢ、ＳＤからも出土している。いずれの住居址も中島式最終段階の無文の甕・壷が主体になり東海系の器台・高坏が共伴している。

石器は当該期の住居址及び重複関係にある遺構・グリットなどから出土している。しかし、当地方では古墳時代にも打製石器が用いられており、掲載した石器のすべてが弥生時代後期の資料とは断定できない。住居址出土の石器としては、ＳＢ32から抉入打製石包丁・有孔磨製石包丁が出土している。

第２節　古墳時代の遺物

古墳時代の住居址であるＳＢ08～11・13・15・17～22・25・27・29・30・33～35・38～42・44～50の31軒から主体となり出土している。種別には土師器と須恵器があり、器種では土師器に壷・小型壷・甕・台付甕・甑・高坏・坏・鉢、須恵器に高坏・瑕・杯・器台が見られる。土器以外では石製紡垂車等の石製品・鉄製品が出土している

1） 土師器の器種分類（挿図５～７）

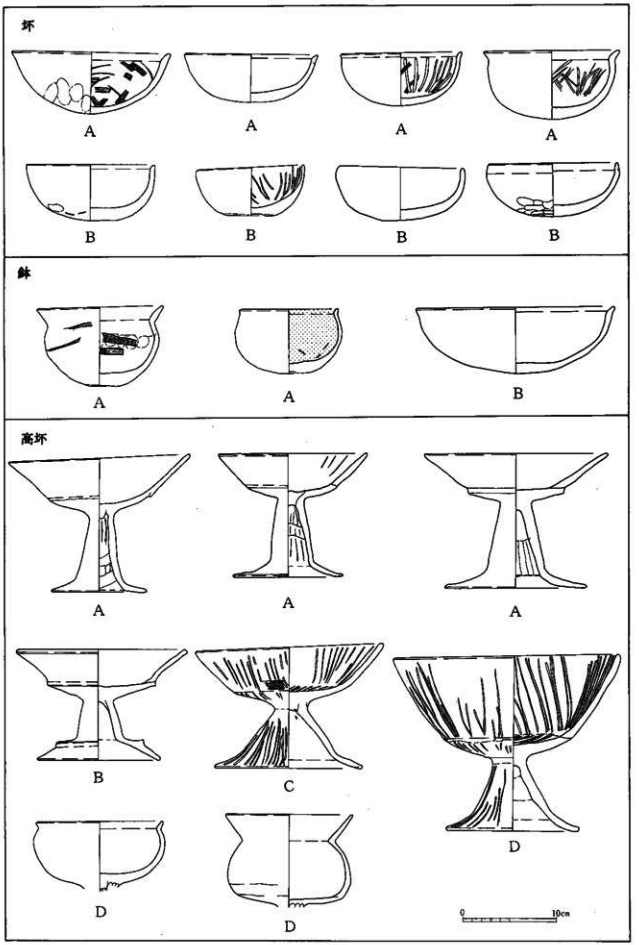
井戸下遺跡における古墳時代の集落変遷を考える上で各住居址の時期区分が大きな前提となる。このため、主たる出土遺物の土師器について、時期毎の器種組成の変化を把握するために器種分類を行い、その消長について考察したい。

①坏　口径10～16cm程度で、器高が口径の1/2を下回るものを坏とした。半球形を呈し口縁端部が内斜もしくはやや外反するＡ類と、半球形を呈し口縁部が丸く作られ上方に延びるＢ類がある。

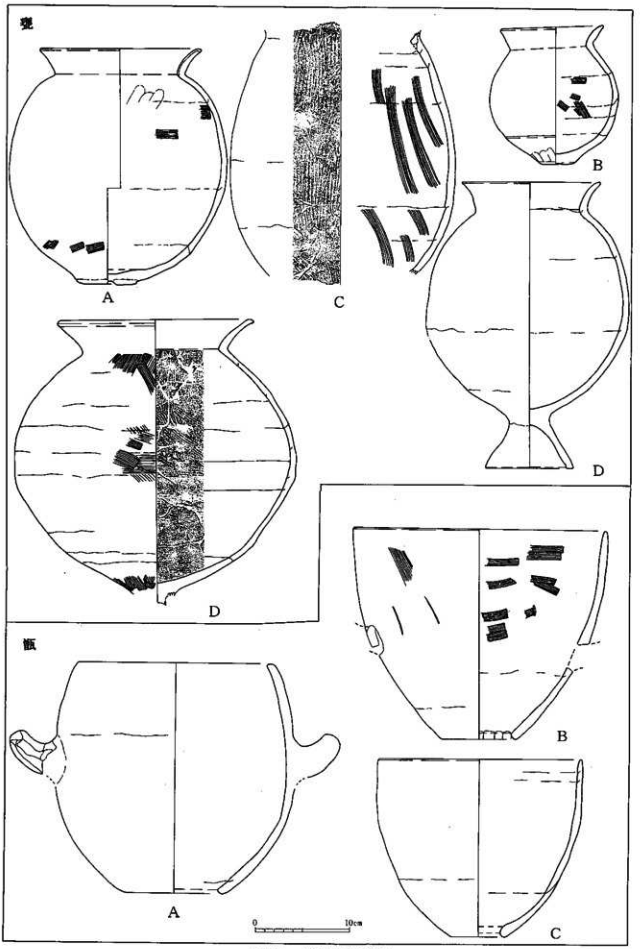
②鉢　口径が坏より大きく16cm以上あるいは器高が口径の1/2以上になるものを鉢とした。鉢には口縁部を外反させるＡ類と坏Ａと同様な器形で法量が大きいＢ類がある。Ａ類は坏と区別がつきにくいものが多い。

③高坏　坏部下半に段を有し、脚部は胴張り気味に膨らむ或いは円錐形になり、脚裾部が屈折するＡ類、坏部下半および脚裾部に明瞭な段をもつＢ類、脚部がスカート状に広がるＣ類、坏部のみの出土だが坏部が坏ＡのＤ類、坏部が他の高坏に比べ破格に大きく、脚部はスカート状に広がるＥ類がある。

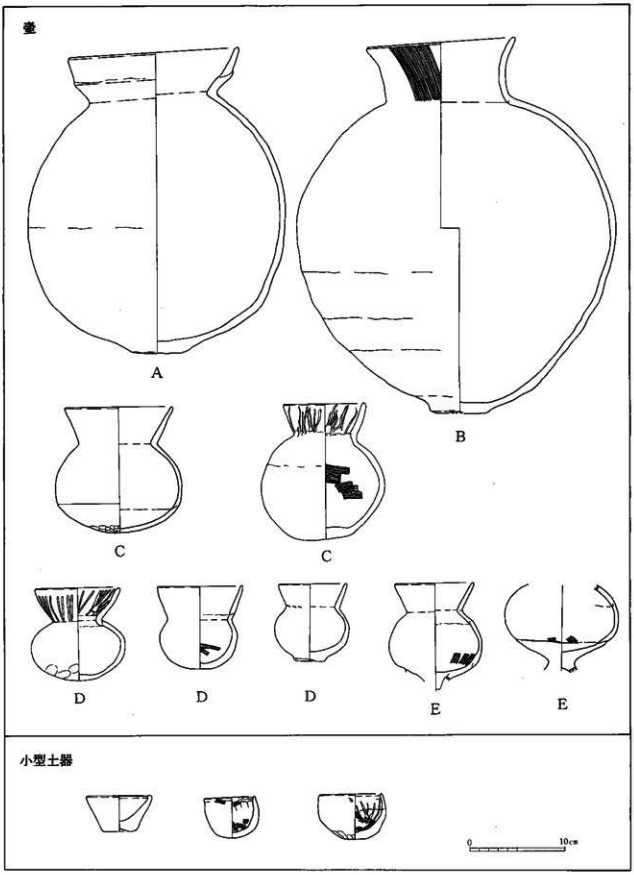
④甕　Ａ類は胴部中央付近に最大径を持ち、器高がおよそ20～29cm前後の球胴甕、Ｂ類はＡ類に比べ小型の甕で、器高が15cm前後のもの。Ｃ類はラクビーボール状の形態を持つと推定されるもの。Ｄ類は甕Ａ類に台が付いた台付甕。甕部分は甕Ａ類に近似する甕を用いるものと、甕Ｃ類に近似する甕を用いるもの及び口縁が内窄する甕が用いられるものがある。甕は全体的に破損度が高いため、分類には若干漏れがあると思われる。



挿図6　土師器分類表(1)



挿図7　土師器分類表(2)



挿図8　土師器分類表(3)

⑤甕　A類は口縁部が内弯気味で器形は球形を呈し、牛角状の把手を持つもの。B類はバケツ状の器形で牛角状の把手を持つもの。C類は把手を持たずバケツ状の形態になるもの。

⑥壷　A類は有段口縁を有する壷。B類は単純口縁の壷。C類は小型で球胴の壷。口縁部は単純に外斜し、胴部は扁平気味の球形を呈するものもみられる。D類は器高10cm未満の小型壷。口縁形態・胴部形態は様々であるが底部が上げ底気味になるものも見られる。E類は壷Cに台が付いた台付壷。出土量は少ない。

⑦小型土器　口径5cm程度の小型の坏形土器。出土量は少ない。

2）各住居址の様相

ここでは上記の分類に従って住居址毎の器種組成を概観したい。しかしながら各住居址は切り合い関係の有無・遺存状況の差違から各期の器種組成をすべて示しているとは言い難い面もある。従って一括性が強いと推定される資料を使用する事にした。

ＳＢ33　器種組成は鉢Ａ類、高坏Ａ類・Ｂ類・Ｃ類、甕は台付甕である甕Ｄ類と甕Ａ類、壷Ｃ類・Ｄ類小型土器が見られ、坏類は存在しない（図版60・61）。

ＳＢ25　器種組成は鉢Ａ類、高坏Ａ類・Ｄ類、甕Ａ類・Ｂ類・Ｄ類、壷Ａ類・Ｃ類・Ｄ類があり坏類は存在しない（図版55）。

ＳＢ29　器種組成は坏Ｂ類、高坏Ａ類・甕Ａ類・壷Ａ類・Ｄ類・Ｅ類及び小型土器がみられ、また須恵器蓋・椀が見られる（図版58）。

ＳＢ40　器種組成には坏Ａ類、高坏Ａ類、甕Ａ類、壷Ｄ類が見られる（図版64）。

ＳＢ18　器種組成には坏Ａ類・Ｂ類、鉢Ａ類、高坏Ａ類・Ｂ類・Ｃ類・Ｄ類、甕Ａ類、甑Ａ類・Ｄ類、壷Ｃ類・Ｄ類、小型土器があり、須恵器坏が見られる（図版52・53）。

ＳＢ27　器種組成には坏Ａ類、鉢Ｂ類、高坏Ａ類・Ｄ類、甕Ａ類・Ｂ類があり、須恵器椀が見られる（図版57）。

3）住居址の時期区分

下伊那における当該期の土器編年については西山克己氏（西山　1999）・山下誠一氏（山下　1986・1999）など先学の研究があり、坏や高坏および器種組成の変化の方向性が示されている。こうした研究の成果を基に、住居址の時期区分を行いたい。

1期　ＳＢ33（図版60・61）に代表される。坏類は見られず口縁部径と胴部径がほぼ等しい小型壷（壷Ｄ類）や台付甕（甕Ｄ類）が見られ、高坏が組成の中心を成す。高坏にはＡ類・Ｂ類・Ｃ類があり、高坏Ａ類の形態は坏部が深く、脚部が細長いものや、やや胴張り気味のものなどがみられる。ＳＢ25も同様に坏が存在せず台付甕が組成に加わっているものの、高坏Ａ類の形態が若干3期に近似するものがみられる。ＳＢ20・30・41も同時期の可能性がある。当該期の住居址はカマドが無く、焼失家屋のみで

ある。

2期　ＳＢ29（図版58）に代表される。坏類が出現するが小型壷（壷Ｄ類）も組成に入る。台付甕はみられない。高坏Ａ種の形態は１期に比し坏部が浅くなる傾向にある。壷は有段口縁のＡ類と台付壷（Ｅ類）も組成に含まれる。また須恵器蓋・碗もみられる。ＳＢ08・11・31・40も同時期と推定される。１期との差違は坏類・台付甕の有無に基づくが、時期差を示すには不十分である可能性がある。住居址にはカマドがみられず、焼失家屋が多い。

3期　ＳＢ36（図版62）に代表される。坏類はＡ類が主体で、高坏Ａ類は坏部の下部に明瞭な段を有するのが特徴である。壷は有段口縁のＡ類・Ｃ類がみられる。ＳＢ21も３期的な高坏Ａ類を有するが、若干坏部が浅い点で形態が異なり、やや新しいと思われる。ＳＢ36は炉址がみられるが、ＳＢ21にはカマドが設置される。

4期　ＳＢ18（図版52・53）に代表される。坏はＡ類・Ｂ類共にあり、数量も増加する。高坏は坏部が破格に大きいＤ類が出現し、スカート状に広がる脚部をもつＣ類もみられる。高坏Ａ類の脚部は太く短いものとなる。小型壷（壷Ｄ類）もみられるが量的に少なくなる。また新たに甑も組成に入る。甕の形態は不明瞭であるがおそらく球胴甕と推定される。須恵器坏もみられ、住居址にはカマドが設置される。ＳＢ27も同時期と推定される。

5期　ＳＢ45（図版65）に代表される。遺物量が少なく全体の器種組成は不明であるが、甕は甕Ｃ類と推定されるものが出土している。住居址にはカマドがみられる。

以上のように１期～５期の時期区分を行ったが、住居址の切り合いなど遺構遺存度の点ですべての様相は明らかにされていないと推定される。このうち１期では台付甕を持つことが特徴的であり、飯伊地区における古墳時代中期の様相の中では特異な器種組成である。一方、３期なると住居址が最も増加し、カマドが出現する住居址がみられることは飯伊地区の様相に合致している（山下　1999)。しかし須恵器の年代など検討すべき点も多いと考えられる。

4）須恵器（図版53・57・58・62・63・64）

古墳時代の住居址、ＳＢ18・27・29・36・37・44から出土している。いずれの住居址も須恵器の出土量は少なく、１～２点程度である。器種には蓋杯（身）・高坏・碗・器台がみられる。

①蓋杯　ＳＢ18（図版53-12）・37（図版63-14）から身がそれぞれ１点ずつ、ＳＢ29から蓋が１点（図版58-29）出土している。12は底部が扁平気味で、口縁部の立ち上がりがやや内傾する。口縁端部は丸く作られている。14は口縁形態が不明だが底部が扁平になる。12については形態的特徴からＴＫ208～ＴＫ23型式に併行すると思われる。

②高坏　ＳＢ44（図版64）から高坏坏部が出土している。口縁部は緩やかに外反し外に延びる。稜はやや甘く、波状文は振幅があまりみられない粗雑なものである。色調は灰色で、内面に茶褐色の部分がみられる。形態的特徴から産地は猿投で５世紀後半と推定される。

③瑞　ＳＢ27から２点（図版57-30・31）、ＳＢ29から１点（図版58-30）出土している。図版58-30は体部が扁平気味の楕円で、口縁部が「くの字」に外反する。頸部の波状文は振幅の細かい粗雑なものである。口縁部形態などは類例のないものであるが、口縁部内面に重ね焼きの痕跡がみられることから、焼成時に変形した可能性がある。図版57-30は頸部から欠損する体部のみで、胴下半に鋸歯文風のヘラ記号がみられる。31は小片のため詳細は不明である。図版58-30はＴＫ216～ＴＫ208型式に併行する可能性がある。

④器台　ＳＢ36から小片が１点（図版62-20）出土している。小片のため詳細は不明である。

５）石製品・鉄製品（図版91）

ＳＢ09から砥石（１）、ＳＢ24から石製紡錘車（２）が出土している。玉類（３～７）及び鏡形石製模造品（８）はいずれも滑石製である。ＳＢ27からは鉄片が出土しているが、錆化が進んでおり種別は不明である。

第３節　平安・中近世の遺物

１）平安時代の遺物（図版61・70）

ＳＤ01（61）・ＳＤ02（70）から出土している。灰釉陶器を主とし、器種では碗・皿・段皿・壷がみられる。いずれも光が丘・虎渓山窯址群の製品であり、９世紀後半から10世紀後半に位置する。このうち図版61-36は内外面共に転用硯として利用されている。

２）中世・近世の遺物

中近世面のⅡ層の遺構あるいはグリットから陶磁器類・内耳土器・木製品・金属器・銭貨が出土している。遺構出土の遺物は建物址内部からは少なく、溝址・土抗からのものが主体となる。

①陶磁器類

陶磁器類は建物址などに付属するものが少なく、多くは小破片で溝や遺構外から出土している。このため図示したものは少ない。産地としては瀬戸系あるいは瀬戸美濃系のものが多く中国産もみられる。また常滑の大甕片も多数出土しているが小片が多く図示するものは少ない。陶磁器類の年代は国内産のもので常滑産の大甕片が12世紀と最も古く、土留め状遺構から出土した瀬戸本業焼が18世紀末と新しいが、主体となる時期は14世紀後半から15世紀後半である。中国産と考えられるものには白磁皿・碗、青磁碗・輪花碗、青花皿がみられ、12世紀後半から15世紀後半と考えられる。個々の遺物に関する情報は陶磁器観察表に示している。

②内耳土器・かわらけ（図版70・71・73）

内耳土器は出土量が少なく、全体の器形がわかるものも少ない。ＳＤ01（図版70-１）、ＳＤ06（図版71-５）・ＳＸ01（図版73-１）からのみ出土しており、建物址などに関係するものはない。かわらけはＳＤ01（図版70-14）から小片が１点のみ出土している。

③木器（図版93～98　写真図版－57・58・59　木器観察表１・２）

中世の住居址・土抗・溝址から出土している。個々の遺物に関する情報は木器観察表に示している。種別としては鋤・曲物底・挽物・桶底・下駄・馬形木製品・人形木製品・杓子状木製品・籌木・斎串・不明木製品がみられる。このうち下駄は台及び歯を一木で作り出す連歯下駄で、前壺を歯の前方中央部に穿孔する共通点を持つ。また馬形木製品は一木作りで鼻・後肢などを欠損するものの鬣などを立体的に表現している。人形木製品は棒状の材に頭部・腰部の切り込みを入れ人形を表現している。頭部には細かい切り込みにより口を表し墨により頭髪を表現している。

④金属器（図版91）

中世の建物址・土抗・その他の遺構から出土している。種別には鑿（21）・角釘（23・24）・鋤先（25）・不明鉄製品がある。このうちＳＴ14出土の鋤先は最大長38cm・刃部の幅15cmを測るＵ字型の鋤先である。差込部は断面が二股に造られている。

⑤銭貨（図版92　銭貨観察表１・２）

中世の住居址・土抗・溝址・各グリット・近世の土留め遺構から総計33枚出土している。各銭貨の情報は銭貨観察表に示している。宋銭が大半を占め、熙寧元宝５枚・永楽通宝３枚・開元通宝３枚・皇宋通宝３枚・景德元宝２枚・洪武通宝２枚・招聖元宝２枚・嘉定通宝１枚・元符通宝１枚・元豊通宝１枚・元祐通宝１枚・治平元宝１枚・祥符元宝１枚・至和元宝１枚・天聖元宝１枚・寛永通宝３枚である。

⑥動物遺体（写真図版－59）

中世の溝址、ＳＤ01より出土している。出土位置は溝ほぼ中央部AI-48で、溝の肩部に接して底面より出土した。出土遺体の内１点は成獣のニホンジカの左寛骨で、寛骨臼の下に大腿部を切断する際に付いた傷がみられる。

＊動物遺体の同定については、奈良国立文化財研究所　松井　章氏に御教示賜った。

表1　土坑（SK）観察表

土坑No.	遺構図版No.	検出位置	長×短×深（cm）	形態	備考
SK01	22	AH41	206×70×28	不整形	14世紀
SK02	22	AF44	120×80×10	楕円形	
SK03	22	AF46	186×114×12	不整形	
SK04	22	AF47	186×110×20	不整形	
SK05	22	AF48	164×138×21	不整形	
SK07	22	AH00	120×60×13	不整形	
SK08	22	AG48	(154)×110×23	不整形	
SK09	23	A149	366×264×18	不整形	13～14世紀
SK10	22	A146	318×160×40	楕円形	
SK11	22	AB05	90×60×19	楕円形	
SK12	23	AM43	100×90×19	円形	
SK13	23	AM44	136×120×23	楕円形	
SK14	23	AL45	204×110×14	不整形	
SK15	23	AM46	74×70×37	円形	
SK16	23	AL04	130×70×15	不整形	
SK17	23	AL05	210×194×52	不整形	14世紀後半
SK18	24	AM07	176×106×26	不整形	
SK20	24	AP00	?×112×42	不整形	便所遺構
SK21	24	AN47	(180)×124×9	不整形	ＳＴ05付属施設
SK22	24	AN08	120×110×16	円形	
SK23	24	AO08	146×80×22	楕円形	14世紀
SK24	24	AO05	112×108×15	円形	
SK25	24	AO04	132×112×44	楕円形	
SK26	24	AO04	(282)×176×29	不整形	
SK27	25	AO04	120×？×21	円形	
SK28	25	AP06	148×122×43	楕円形	
SK29	25	AO07	190×100×45	不整形	
SK30	25	AQ04	156×90×20	不整形	15世紀後半
SK31	25	AS05	350×(140)×20	不整形	
SK32	25	AP06	132×70×18	不整形	
SK33	25	AR06	96×68×10	楕円形	
SK34	25	AU07	132×132×23	不整形	
SK35	25	AU05	72×60×32	不整形	
SK36	25	AU05	42×36×4	円形	桶底あり
SK38	26	AQ03	(220)×202×14	不整形	
SK39	26	AO02	176×82×18	楕円形	15世紀後半
SK40	26	AL06	186×184×60	不整形	
SK41	26	A102	66×62×25	不整形	
SK42	26	AV01	164×96×12	不整形	
SK43	26	AV49	112×98×30	不整形	
SK45	26	AO06	86×78×40	円形	
SK46	26	AR49	(186)×110×40	不整形	
SK47	26	AQ48	70×62×27	円形	
SK48	26	AP48	122×112×23	円形	
SK49	27	AJ47	42×40×18	円形	
SK50	27	AH03	214×160×36	不整形	
SK51	27	AN44	140×118×33	円形	
SK52	27	AQ07	72×66×44	円形	
SK53	27	AR46	(204)×144×26	不整形	
SK54	27	AL49	140×114×21	不整形	
SK55	27	AV47	216×46×19	不整形	

表2　陶磁器観察表（1）

No.	遺物図版No.	遺構名	器種	生産地	時代	口径(cm)	備考
1	66－1	SB01	擂鉢	不明	16世紀	－	
2	66－2	SB01	天目茶碗	瀬戸	15世紀後半	13.6	同一個体破片有
3	66－7	SB03	平碗	瀬戸	15世紀	－	
4	66－11	SB04	天目茶碗	不明	不明	－	
5	67－1	SK01	花瓶	瀬戸	14世紀	－	
6	67－3	SK09	白磁皿	中国	13世紀後半～14世紀	－	
7	67－4	SK09	不明	瀬戸本業焼	不明	－	
8	67－6	SK09	青磁碗	中国	不明	－	
9	67－7	SK10	青磁碗	中国	15世紀	－	金玉満堂の刻印
10	67－8	SK16	白磁皿	中国	15世紀～16世紀	－	
11	67－10	SK17	燭台	瀬戸	14世紀後半	－	
12	67－19	SK30	天目茶碗	瀬戸	15世紀後半	12.0	
13	67－24	SK37	天目茶碗	瀬戸	15世紀後半	10.6	
14	67－25	SK39	擂鉢	瀬戸	15世紀後半	28.4	
15	67－26	SK39	鉢	瀬戸	15世紀後半	30.6	
16	67－27	SK39	擂鉢	瀬戸	15世紀後半	－	
17	70－2	SD01	擂鉢	瀬戸	16世紀	28.0	
18	70－4	SD01	不明	瀬戸・美濃	不明	－	
19	70－5	SD01	擂鉢	瀬戸	16世紀	－	
20	70－6	SD01	鉢	瀬戸	15世紀後半	－	
21	70－8	SD01	瓶	瀬戸	14世紀～15世紀	20.8	
22	70－9	SD01	平碗	瀬戸	15世紀	14.0	
23	70－10	SD01	平碗	瀬戸	15世紀	11.6	
24	70－11	SD01	天目茶碗	瀬戸	不明	－	
25	70－12	SD01	仏飯器	瀬戸	18世紀	8.3	
26	70－13	SD01	天目茶碗	瀬戸・美濃	16世紀中	11.2	
27	71－6	SD06	擂鉢	瀬戸	16世紀	－	
28	71－10	SD11	不明	瀬戸	18世紀後半	－	
29	73－6	SX02	擂鉢	瀬戸	16世紀前	30.0	
30	79－6	AV46	擂鉢	瀬戸	15世紀	－	
31	79－7	AM43	擂鉢	瀬戸	16世紀	－	
32	79－8	AS04	擂鉢	瀬戸	15世紀	－	
33	79－9	AM03	天目茶碗	瀬戸・美濃	不明	11.2	
34	79－10	AM43	擂鉢	瀬戸	15世紀後半	30.0	
35	79－11	AR43	天目茶碗	瀬戸	15世紀	－	
36	79－12	AR47	天目茶碗	瀬戸	15世紀後半	－	
37	79－13	AQ00	茶碗	瀬戸	不明	－	
38	79－14	AP47	茶碗	瀬戸	18世紀後半	－	
39	79－15	AW02 P1	平碗	瀬戸	15世紀	－	
40	79－16	AT02 P2	平碗	瀬戸	15世紀	－	
41	79－17	AM45	天目茶碗	瀬戸	15世紀末～16世紀初	－	
42	79－18	AA44	丸皿	瀬戸	16世紀	－	
43	79－19	AV46	緑釉皿	瀬戸	15世紀後半	－	
44	79－20	AS45	青花皿	中国	15世紀末～16世紀初	－	玉取獅子
45	79－21	AT06 P1	花瓶	瀬戸	15世紀	－	
46	79－22	AS09	不明	不明	不明	(10.2)	
47	79－23	AW04 P1	青磁碗	中国	14世紀後半～15世紀	－	
48	79－24	AV00 P1	合子蓋	瀬戸	15世紀	4.4	
49	80－2	ZZZ	茶壷	瀬戸・美濃	15世紀～16世紀	12.0	
50	80－3	ZZZ	四耳壷	瀬戸	15世紀	－	
51	80－4	ZZZ	甕	常滑	12世紀	38.0	
52	80－5	ZZZ	甕	常滑	不明	－	
53	80－6	ZZZ	茶壷	瀬戸	15世紀	－	
54	80－7	ZZZ	鉢	瀬戸	15世紀後半	29.4	
55	80－8	ZZZ	鉢	瀬戸	15世紀後半	25.6	
56	80－9	ZZZ	おろし皿	瀬戸	15世紀前半	29.2	
57	80－10	ZZZ	擂鉢	瀬戸	16世紀	－	
58	80－11	ZZZ	天目茶碗	瀬戸	15世紀後半	12.0	
59	80－12	ZZZ	平碗	瀬戸	15世紀	12.0	
60	80－13	ZZZ	平碗	瀬戸	15世紀	14.8	

表3　陶磁器観察表（2）

No.	遺物図版No.	遺構名	器種	生産地	時代	口径(cm)	備考
61	80－14	ZZZ	天目茶碗	瀬戸	15世紀	10.6	
62	80－15	ZZZ	丸皿	不明	不明	－	
63	80－16	ZZZ	平碗	瀬戸	15世紀	－	
64	80－17	ZZZ	丸腕	瀬戸	18世紀末	－	
65	80－18	ZZZ	腕	瀬戸本業焼	18世紀末	－	
66	80－19	ZZZ	筒形腕	伊万里	18世紀	－	
67	80－20	ZZZ	青磁輪花碗	中国	15世紀	12.6	
68	80－21	ZZZ	皿	瀬戸	17世紀	－	
69	80－22	ZZZ	腰折皿	瀬戸	15世紀	11.2	
70	80－23	ZZZ	緑釉小皿	瀬戸	15世紀	10.4	
71	80－24	ZZZ	志野丸皿	瀬戸	17世紀後半	11.4	
72	80－25	ZZZ	白磁碗	中国	11世紀後～12世紀	10.8	
73	80－26	ZZZ	丸皿	瀬戸	16世紀前半	10.6	
74	80－27	ZZZ	不明	不明	不明	－	
75	80－28	ZZZ	青磁碗	中国	12世紀後半	－	
76	80－29	5トレンチ	花瓶	瀬戸	15世紀	－	
77	80－30	土留め	天目茶碗	瀬戸	15世紀中	11.6	
78	80－31	土留め	筒形茶碗	伊万里	18世紀	7.0	

表4　木器観察表（1）

No.	遺物図版No.	器種	時期	出土遺構・出土地点	法量 (cm)	備考
1	93－1	刳物底	中世	SB02	85×(67)×16	
2	93－2	底板	中世	SK10	(154)×(47)×15	
3	93－3	箸	中世	SK10	(116)×6	
4	93－4	籌木	中世	SK20	(93)×18×3	
5	93－5	籌木	中世	SK20	(85)×10× 2	
6	93－6	籌木	中世	SK20	(131)×8×6	
7	93－7	籌木	中世	SK20	(181)×16×7	
8	93－8	籌木	中世	SK20	(177)×18×10	
9	93－9	籌木	中世	SK20	(145)×17×3	
10	93－10	籌木	中世	SK20	(145)×15×4	
11	93－11	籌木	中世	SK20	150×11×4	
12	93－12	籌木	中世	SK20	(160)×12×8	
13	93－13	籌木	中世	SK20	(143)×20×3	
14	93－14	籌木	中世	SK20	(181)×9×6	
15	93－15	籌木	中世	SK20	(158)×5×4	
16	93－16	籌木	中世	SK20	(149)× 8 ×7	
17	93－17	籌木	中世	SK20	(131)×8×6	
18	93－18	籌木	中世	SK20	(124)×22×8	
19	93－19	籌木	中世	SK20	(125)×11×4	
20	93－20	籌木	中世	SK20	(135)×5×4	
21	93－21	籌木	中世	SK20	(137)×16×2	
22	93－22	籌木	中世	SK20	(118)×11×2	
23	93－23	籌木	中世	SK20	(104)×10×2	
24	93－24	籌木	中世	SK20	(99)×15× 5	
25	93－25	籌木	中世	SK20	(110)×9×4	
26	93－26	籌木	中世	SK20	113×14×3	
27	93－27	籌木	中世	SK20	(106)×15×6	
28	93－28	籌木	中世	SK20	(85)×15×3	
29	93－29	籌木	中世	SK20	(83)×6×2	
30	93－30	籌木	中世	SK20	(78)×10×2	
31	93－31	籌木	中世	SK20	(72)×11×3	
32	93－32	籌木	中世	SK20	(78)×15×5	
33	93－33	籌木	中世	SK20	(89)×20×2	
34	93－34	籌木	中世	SK20	(88)×11×4	
35	93－35	籌木	中世	SK20	(52)×21×1	
36	93－36	籌木	中世	SK20	(60)×21×2	
37	93－37	籌木	中世	SK20	(64)×9×4	
38	93－38	籌木	中世	SK20	(48)×10×1	

表5　木器観察表（2）

No.	遺物図版No.	器　種	時期	出土遺構・出土地点	法量（cm）	備　考
39	93－39	臼木	中世	SK20	(45)×8×1	
40	93－40	臼木	中世	SK20	(55)×20×1	
41	93－41	臼木	中世	SK20	(66)×11×1	
42	94－1	下駄	中世	SD01	184×98×65	
43	94－2	刳物	中世	SD01	62×161	
44	94－3	不明	中世	SD01	122×47×7	
45	94－4	底板	中世	SD01	(148)×(23)×4	
46	94－5	下駄	中世	SD01	(227)×107×36	
47	94－6	下駄の歯	中世	SD01	90×128×18	
48	94－7	不明	中世	SD01	437×84×56	
49	95－1	下駄	中世	SD01	173×91×57	
50	95－2	鞘	中世	SD01	277×113×26	
51	95－3	下駄	中世	SD01	(174)×110×37	
52	95－4	底板	中世	SD01	221×(83)×13	
53	95－5	曲物底	中世	SD01	119×(79)×9	
54	95－6	底板	中世	SD01	(130)×(36)×10	
55	95－7	曲物底	中世	SD01	99×(54)×8	
56	96－1	下駄	中世	SD11	236×118×40	
57	96－2	刳物底	中世	SD07	(73)×72×18	
58	96－3	不明	中世	SD09	(119)×26×4	
59	96－4	馬形	中世	SD08	(88)×95×25	
60	96－5	椀	中世	SX01	－	
61	96－6	曲物底	中世	SX02	(67)×(43)×4	
62	96－7	不明	中世	水田14	40×66×27	
63	96－8	不明	中世	水田14	179×44×50	
64	96－9	桶底板	中世	水田11	(506)×132×31	
65	97－1	桶底板	中世	SD01	(355)×(111)×20	
66	97－2	桶底板	中世	遺構外	(399)×(115)×32	
67	97－3	底板	中世	ZZZ	(325)×(95)×11	
68	97－4	底板	中世	ZZZ	210×(88)×7	
69	97－5	底板	中世	遺構外	(177)×(72)×8	
70	97－6	底板	中世	遺構外	(157)×(52)×9	
71	98－1	底板	中世	遺構外	(386)×(76)×12	
72	98－2	下駄	中世	遺構外	161×101×(46)	
73	98－3	不明	中世	遺構外	319×19×12	
74	98－4	不明	中世	遺構外	227×26×9	
75	98－5	不明	中世	遺構外	(141)×35×6	
76	98－6	不明	中世	遺構外	109×116×16	
77	98－7	不明	中世	AT42付近	73×53×14	
78	98－8	杓子	中世	遺構外	(128)×52×7	
79	98－9	人形	中世	遺構外	95×15×14	
80	98－10	刳物底	中世	遺構外	75×(54)×13	
81	98－11	椀	中世	遺構外	－	

表6　銭貨観察表（1）

No.	遺物図版No.	出土遺構・出土地点	銭貨名	種　類	素材	初年期	備　考
1	92－6	SD01	紹聖元宝		銅	1094～1097	
2	92－7	SD01	景德元宝		銅	1004～1007	
3	92－8	SD01	熙寧元宝		銅	1068	
4	92－9	SD01	寛永通宝	鉄銭	鉄	1668～明治初期	
5	92－10	SD13	皇宋通宝		銅	1039	
6	92－4	SK03	開元通宝		銅	621	
7	92－5	SK09	祥符元宝		銅	1008	
8	92－1	SB02	天聖元宝		銅	1023	
9	92－2	SB04	元符通宝		銅	1098～1100	
10	92－22	AS42	開元通宝		銅	621	
11	92－17	AP05　P2	元豊通宝		銅	1078	墓穴
12	92－29	AV03	不明		銅		
13	92－28	AV02　P1	治平元宝		銅	1064～1067	

表7　銭貨観察表（2）

No.	遺物図版No.	出土遺構・出土地点	銭貨名	種　類	素材	初年期	備考
14	92－18	AR04　P2	不明		銅		
15	92－16	AN45	皇宋通宝		銅	1039	
16	92－20	AS42	洪武通宝		銅	1368	
17	92－19	AS42	洪武通宝		銅	1368	背一銭
18	92－21	AS42	永楽通宝		銅	1411	
19	92－3	AS42	開元通宝		銅	621	
20	92－23	AS42	元祐通宝		銅	1093	
21	92－27	AT03	永楽通宝		銅	1411	
22	92－14	AG35	熙寧元宝		銅	1068	
23	92－15	SX01	永楽通宝		銅	1411	
24	92－13	北側土留め	寛永通宝	一文銭新寛永	銅	1668～明治初期	
25	92－30	トレンチ	紹聖元宝		銅	1094～1097	
26	92－31	トレンチ	熙寧元宝		銅	1068	
27	92－32	重機荒れ土	熙寧元宝		銅	1068	
28	92－11	土留め	皇宋通宝		銅	1039	
29	92－12	土留め	寛永通宝	一文銭新寛永	銅	1668～明治初期	
30	92－24・25	AS43	嘉定通宝		銅	1208	背十二
31	92－26	AS43	熙寧元宝		銅	1068	
32	92－33	ZZZ	景德元宝		銅	1004～1007	
33	92－34	ZZZ	至和元宝		銅	1054	

第Ⅵ章　総　括

今回の調査は、天竜川治水対策事業（川治地区）の盛土工事に先立つ発掘調査であり、試掘調査により遺跡の範囲を確定し、ほぼ全面にわたる調査を行ったといえる。その調査結果は、本文中に記したとおりであり、予想外の成果は本遺跡の実体に深く迫るものとなった。特に中世の屋敷跡の確認は川路地区における中世を解明する上で重要な発見であり、中世史上でも地方における集落形態を考える上で大きな成果と言える。また、古墳時代の集落は周辺の低位段丘に存在する古墳群との関係で興味深い存在であり、対岸の龍江地区で確認された細新遺跡と共に、天竜川に面する低位段丘面上の集落として注目される。また弥生時代中期の遺構・遺物の存在は、これまで不明瞭であった当該期の集落が、天竜川氾濫源に近接して営まれたことを示唆しており、飯伊地方への弥生文化の普及・稲作の開始を考察する上で大きな成果と言えよう。こうした多大な成果をあげた調査であるが、現時点での調査成果の到達点と課題について若干の考察を行い、今次調査の成果としたい。

第１節　出土遺物について

遺物についての概略は第Ⅴ章ですでに述べてきた。ここでは当地域において不明瞭な位置にある弥生時代中期の遺物について、今次調査から得られた成果を基に考察したい。

１）弥生時代中期土器群の様相

飯伊地方における弥生時代中期前葉の土器群は寺所（てらどこ）式（佐藤　1982）・阿島式の２型式が提唱されていたものの、遺跡数の少なさからその実体は不明な点が多いものであった。いうまでもなく阿島式土器は喬木村阿島遺跡出土の資料を標識資料とするが、阿島遺跡出土の遺物を最初に報告した大沢和夫氏は昭和13年刊の『考古学』中に「瓢箪形」をした土器について「阿島式土器」と命名し、昭和25年には喬木史談会叢書No４の中で、先に阿島式土器として発表した瓢箪形土器の他に新資料として瓢箪形土器を２個追加し、それぞれ阿島Ａ・Ｂ・Ｃ式と命名した。その後、佐藤甦信・宮沢恒之両氏は昭和35年阿島遺跡の発掘調査を行い、その成果を『長野県考古学会誌』第４号に報告している。この報告中で両氏は阿島式として「大型壷形土器・小型壷形土器・双口土器・鉢形土器」をあげ、阿島式の器種組成を初めて提示している。また阿島式の編年的位置づけを確認する中で、壷形土器にみられる連続押引爪形文・沈線による連弧文は、共伴した瓜郷式土器の存在からその関連性を指摘し、縄文・沈線については中部地方独自の文化的要素の強いものとした。

一方、寺所式は大沢和夫氏により昭和33年に設定されたという型式（出典不明）で、遺跡は昭和43年・46年に発掘調査が行われ、『中部高地の考古学』Ⅱに佐藤甦信氏が報告している。これによると器種は壷形と鉢形で、壷形土器は長頸で口縁部はラッパ状に強く外反する例と頸部が直線的になる例もあるとし、頸部文様は縄文・太い沈線・刺突文（壷形Ⅰ類土器）であり、凸帯を持つもの（壷形Ⅱ類土器）もあるとしている。胴部の文様は阿島的なバナナ状区画文がなく眉状の波線が巡らされるものがあるとしている。一方、鉢形土器は条痕文系の伝統が強い一群と、口縁部に押圧凸帯が貼付される一群が存在するとされている。

こうした寺所式と阿島式の関係については、「寺所式の壷形Ⅰ類土器を受け継いで生まれたのが阿島式土器（佐藤　1982）」、「従来の阿島式土器より古い様相を持っている土器群（愛知考古学談話会1985）」などと考えられているものの、寺所式は寺所遺跡以外確認されておらず、阿島式もまた遺跡数が少なく詳細が不明な点が多いため、両者の関係や後続する北原式との関係など未だ釈然としない点が多い。

今次調査で出土した土器群は、壷形土器について言えば、太沈線文・連続刺突文・縄文・櫛状工具による条線文が施文される一群（壷形土器ａ）と櫛状工具による条線文・ヘラ状工具による沈線文が施文される一群（壷形土器ｂ）に大きく分けられる。このうち壷形土器ｂはその施文の特徴および胎土・調整の点で三河地方の瓜郷式に近似する。一方、壷形土器ａは様々な要素をもつ土器群と考えられるが、破片資料が多いため、全体の文様構成・器形が不明瞭である。しかしながら文様原体・施文技法・組み合わせなどの文様要素のある程度は抽出が可能である。壷形土器ａの口縁部から頸部にかけての文様要素を大雑把に分類すると、縄文・沈線文主体で、直接寺所式からの流れを汲むと考えられる土器群、太沈線・連続爪形文あるいは連続押し引き爪形文・縄文を併用する阿島遺跡の阿島式に類似する土器群、櫛状工具による条線文を文様構成の一部に取り込み、連続爪形文・連続押し引き爪形文と併用する土器群の４つに分けられる。一方、壷形土器ａの胴部上半に関しては、要素の組み合わせに関わらず連弧状のモチーフ（いわゆるバナナ文も含む）が施される傾向が強いと考えられる。胴部上半の連弧状モチーフの作出は、太沈線・沈線の施文（図版75-29）、連続爪形文の施文（図版81-32など）、地文を縄文とし連続爪形文の施文（図版75-32など）の阿島遺跡の阿島式に見られる例の他、櫛状工具による条線文・連続爪形文の併用（図版45-19・20など）、太沈線・連続爪形文・条線文の併用（図版74-20など）・の５つがみられる。

胴部上半に見られる連弧状モチーフの作出について、櫛状工具による条線文と連続爪形文の併用は、阿島遺跡の阿島式に見られない要素であり、後続する北原式の櫛描直線文とその上下に施文される刺突文につながる要素と推定される。また、出土した壷形土器ａには櫛状工具による条線文の使用が多く認められる。こうした観点から井戸下遺跡の壷形土器ａについて言えば、阿島式の範疇に入る土器ではあるものの、櫛状工具による条線文の多用という点で阿島式でも新しい段階の土器群と考えられる。言い換えれば施文具としての櫛状工具が確立した段階の土器群であるといえよう。

一方、甕形土器について言えば、口縁部形態の点で口唇部が外側に面取りされるもの（図版45-６など）・丸く作られるもの（図版47-１など）が大多数を占める中で、口唇部直下に隆帯の貼付されるもの（図版47-33・43など）・口唇部がＴ字状に肥厚し、内外端部に刻みが施されるもの（図版47-38）など口縁部形態が若干異なる例も少量見られる。甕形土器に見られる後者の特徴は、寺所遺跡に見られる鉢形土器Ⅱ類に対応する可能性がある。

破片資料が多いため全体の様相を明らかにすることができなかったものの、櫛状工具による条線文の本格使用という点で、本遺跡出土遺物が阿島式の新しい段階に位置し、後続する北原式に結びつく資料と考えられることが推定された。しかしながら、阿島式全体の問題として寺所式に見られない連続爪形文・連続押し引き爪形文の出自、極めて近い関係にあるとされる静岡県の嶺田式との関係など今後検討すべき問題の多い土器であると言える。

2）石器群の様相

第Ⅴ章で述べてきたように弥生中期の住居址であるＳＢ06・14からは阿島式期の良好な石器セットが出土している。ここでは個々の器種について観察を行い、後続する北原式の石器組成との比較・同時期と推定される遺跡との比較などを行いたい。なお石器の名称・石器の用途等については『恒川遺跡群遺物編』（飯田市教委　1986）を参考にしている。

①ＳＢ06・14出土石器の概観（図版84・85）

ａ　打製石斧　総計７点（ＳＢ06-２点、ＳＢ14-５点）出土している。完形品はなく、刃部あるいは刃部を欠損した基部のみである。形態は短冊形もしくは撥型を呈すると推定される。長さは刃部欠損のもので16cm以上あり、完形の場合、20cm近くになると推定される。基部の厚さは３cm以上で、重量は刃部を欠損する最大のもので600ｇあり、完形品の場合更に重量が増加すると推定される。器面に自然面を残し、縦断面形がやや湾曲するものが多く、基部側辺に入念な刃潰しがみられる。刃部には使用痕と推定される小剥離あるいは刃潰し状の痕跡がみられる。石材はすべて硬砂岩である。

ｂ　横刃型石包丁　総計７点（ＳＢ06-２点、ＳＢ14-５点）出土している。３種類の形態がみられる。すべて完形品で長方形のもの（図版84-４など）、舟形のもの（図版85-２）、幅広の長方形のもの（図版84-５）がみられ、長さは８～13cm程度である。片面に自然面を大きく残し、横断面の内弯するものが多い。長方形を呈するものは背部・側辺を細かい剥離によって長方形に整形し刃潰しを加え、刃部は両面とも細かい剥離により調整を行っている。使用痕と考えられる細かい剥離はみられるが、ロウ状光沢は顕著に認められない。舟形を呈するものは素材となる横長剥片の縁辺2/3程度そのまま刃部として利用し、縁辺部1/3および横長剥片の打点側を細かい剥離により刃潰しとしている。一見するとナイフ型石器に近い形態となる。刃部先端（横長剥片の側辺の片側部分）にのみ刃こぼれ状の剥離およびロウ状光沢が確認される。幅広の長方形となるものも素材の打点側に刃潰し調整を行い、刃部にも細かい剥離がみられる。石材はすべて硬砂岩である。

ｃ　有肩扇状形石器　伊那谷の弥生時代における特徴的な石器であり、使用痕の分析などから収穫具としての用途が推定されている（桜井　1986）。形態は素材となる剥片の両側辺に抉りを入れ柄状の基部を作り出したもので、総計２点（ＳＢ06-１点、ＳＢ14-１点）出土している。片面に自然面を残し、抉り部は丁寧な刃潰し調整が行われている。完形品はなく、いずれも一部欠損している。ＳＢ06出土のものは未製品の可能性もある。明確な使用痕は認められない。石材はすべて硬砂岩である。

ｄ　横刃型石器　ＳＢ14から５点出土している。形態は様々であるが、片側に自然面を残し裏面には主要剥離面を残す。調整は行われていないものが多く、素材の縁辺部付近に使用痕と考えられる小剥離がみられる。石包丁的な機能を持つ可能性がある。石材はすべて硬砂岩である。

ｅ　磨製石器　ＳＢ14から２点出土している。棒状の原石の先端と側面のみ研磨したノミ形に近い形態を持つ石器（図版85-17）と、先端をわずかに研磨したもの（図版84-12）がみられる。17は先端部・側面のみを研磨しており自然面が大きく残る。後端部には敲打痕が残り刃部は両刃である。12はその形態から扁平片刃に近いものと推定されるが、未製品である可能性もある。いずれも石材は緑色岩である。

ｆ　磨石　ＳＢ14から２点出土している。拳大程度の円礫に研磨したような使用痕が認められる。（図版85-14）は敲打器としても利用されている。石材は硬砂岩のみである。

g　敲打器　ＳＢ14から３点出土している。磨石と同様に円礫を用い、一部に敲打痕が認められるもの。硬砂岩・緑色岩がみられる。

h　打製石鏃　ＳＢ06から１点出土している。有茎石鏃で石材は安山岩である。

ａ～ｄの石器について製作技法の特徴としては石器素材の形態である。いずれの石器も硬砂岩を石材とし、片面に自然面を残すことが特徴で、ｂ～ｄの石器についていえば、大半の石器で主要剥離面の打点の相対する側に刃部がみられ、断面形が内弯する傾向にある。こうした素材は扁平な礫の側辺を打撃し割取したものと思われ、恒川遺跡群報文中の「扁平円礫打割技法」（桜井　1986）に相当する。また石器の石材に関しては、天竜川に一般的にみられる硬砂岩（赤石山脈の秩父帯・四万十帯が原産）の扁平礫を利用するもので、縄文時代からみられるものである。一方、ｅの磨製石器は石材が緑色岩で、硬砂岩と同様に天竜川氾濫源から採取でき、当地方では縄文時代から磨製石器の石材として利用されている。打製石鏃に使用されている安山岩も縄文時代では黒曜石と併用して用いられているが、天竜川周辺では採取されない石材である。

②他遺跡の様相

井戸下遺跡に先行する寺所遺跡、ほぼ同時期の阿島遺跡、後続する北原式がみられる恒川遺跡について石器の組成を概観する。

ａ　寺所遺跡（佐藤　1982）　石器類は多いが所属遺構などの詳細は不明である。示されたものには打製石器・横刃型石包丁・有肩扇状形石器・磨製石斧・有茎石鏃・石錘がみられる。打製石器・横刃型石包丁の形態は本遺跡と近似する。横刃型石包丁には舟形を呈するものがみられ、側辺片側部分に使用痕が示される。

ｂ　阿島遺跡（宮沢・佐藤　1967）　住居址および周辺から石器が出土している。打製石器・横刃型石包丁・有肩扇状形石器・磨製石器（斧・ノミ）がある。磨製石斧を持つこと以外本遺跡と同様である。

ｃ　恒川遺跡群（飯田市教委　1986）　北原式（恒川Ⅰ期）に相当する住居址が７軒みられ、石器群については詳細な分析が行われている。恒川Ⅰ期の石器組成は打製石斧・横刃型石包丁・有肩扇状形石器・横刃型石器・磨製石器（斧・扁平片刃・ノミ）・磨製石錘・打製石錘・砥石・敲打器・台石・磨製石鏃・打製石鏃がみられる。

上記の遺跡に本遺跡を加えた４遺跡の石器組成は、北原式期に磨製石鏃が出現すること以外ほぼ同一であると考えられ、北原式期にみられる石器組成のほとんどが少なくとも阿島式期以前にすでに完成していたと考えられる。特に横刃型石包丁に関しては恒川遺跡群にみられる使用痕の部位（刃部の片側）と同様な傾向が本遺跡および寺所遺跡でも認められ、当該石器の使用法について興味深い傾向と言える。また、収穫具としての石器を考えた場合、形態からは横刃型石包丁のみで３類あり、これに加え横刃型石器・有肩扇状形石器の５つが当該期に存在することは、個々の機能・用途がある程度分離していた可能性を窺わせよう。また、打製石器の石材および製作技法も硬砂岩を用いた扁平円礫打割技法が一貫して用いられることは縄文から弥生時代にかけての伊那谷的な特徴であり、石材の獲得も含め他の石器群（磨製石器）との技術の消長を縄文時代から考察していく必要があろう。

第２節　各時代の集落について

井戸下遺跡からは弥生時代中期前半から近代に至る各時期の遺構が確認されている。各遺構の概観については第Ⅳ章で触れている。ここでは各時期の集落景観を含め、特徴的な遺構などについて触れていきたい。

１）弥生時代中期（挿図８）

住居址３軒が確認されている。いずれの住居址も調査区の縁辺部にまばらな分布をしており、全体的な集落景観を示す資料ではない。未調査箇所に集落の中心が存在すると考えられ、かなり密に住居址が存在すると推定される。住居址の形態はいずれも小型の隅丸方形を呈し、床面は貼り床が行われていないものの堅い箇所もみられる。住居内施設としても柱穴・炉址は確認されていないが、炭化物が床面上に分布する。

阿島式のタイプサイトである阿島遺跡の立地も井戸下遺跡に類似し、天竜川氾濫源に近接する微高地に存在すると考えられ、石器組成などからも氾濫源付近の低湿地での稲作が推定される。

２）弥生時代後期（挿図８）

住居址６軒が確認されている。阿島式以降の住居址は確認されず、弥生時代後期中島式最終末の遺物が主体となる。住居址は調査区の中央部分に集中し近接する。住居址の形態は隅丸方形が多く、床面は全面堅く叩き締められている。炉址は甕の埋設炉・地床炉共にみられる。柱穴などの施設は確認されなかった。

当該期の一般的な集落は、遺跡の立地（中位段丘面・低位段丘Ⅰと低位段丘Ⅱ）により形態が大きく異なっている。中位段丘上の集落は住居址の軒数も少なく住居間が離れており、多時期に亘ることが少ない。一方、低位段丘Ⅱ上の集落は軒数も多く遺物も多量にみられ連続した集落が営まれることが多い。こうした観点から井戸下遺跡の弥生時代後期の集落を概観すると、集落の連続性からみれば阿島式以降の集落が断絶している。これは中期と後期の検出面が異なり、両者の間に自然営力による断絶に起因すると推定される。

３）古墳時代中期（挿図８）

住居址30軒が確認されている。第Ⅴ章で述べたとおり、１～５期に時期区分される。１期の住居址は５軒あり、ＳＢ33が該当しＳＢ20・25・30・41も同時期と考えられる。住居の形態は方形で、すべて炉址が設置される。集落は調査区北東側に集中し、すべて焼失家屋である。２期の住居址は６軒あり、ＳＢ29に代表され、ＳＢ08・11・34・39・40も同時期と考えられる。住居址の形態は方形で、すべて炉址が設置される。集落は調査区中央部分にみられ、焼失家屋が多い。３期の住居址２軒ありＳＢ36に代表されＳＢ21も近似する時期と思われる。住居数は減り、集落の断絶に近い状況になる。住居址は方形で炉址をもつものとカマドがみられるものがある。４期の住居址はＳＢ18・27の２軒のみとなる。住居址の形態は方形で規模は１～５期に比し大きくなる。住居址のカマドは粘土を主たる構築材とし、袖部先

端に細長い礫が埋められたものもみられ、規模も長辺２ｍ程度の大型の形態となる。５期の住居址はＳＢ45の１軒のみである。集落はほぼ断絶したと推定される。住居址の形態は１辺３ｍ程度の方形を呈し、カマドは住居址隅に寄っており、小型の粘土カマドになる。

以上述べてきたとおり井戸下遺跡の集落は１・２期に最大となり、３期以降は２軒程度のごく小規模な集落へと変遷したことが窺えられる。

井戸下遺跡の天竜川対岸に位置する細新遺跡（吉川　1998）は、古墳時代中期から後期にかけての集落がほぼ全域に亘って発掘調査が行われており、当該期の住居址69軒が確認されている。このうち古墳中期の住居址は27軒確認されており、時期的には井戸下遺跡の１・２期に集落が最大になると考えられ、井戸下遺跡３・４期に対応する住居址は確認されていない。こうした点から天竜川の両岸において集落がほぼ同時期に衰退する傾向が窺われる。

一方、井戸下遺跡４期に併行すると思われる住居址は殿原遺跡（飯田市教委　1987）・前の原遺跡（飯田市教委　1990）にみられ、住居址・カマドの形態・遺物なども近似するが、本遺跡周辺では確認されていない。このような細新・井戸下遺跡でみられる集落の断絶を考えるには周辺遺跡での様相が不可欠である。川路地区では同事業に伴う発掘調査が行われ、本遺跡北側の殿村遺跡・留々女遺跡・辻前遺跡から古墳時代の集落が確認されており、調査成果が判明した段階で更なる検討を加える必要があろう。

４）平安時代（挿図９）

溝址が確認されているのみで、集落の様相は判明しない。出土遺物は９世紀後半から10世紀後半にかけてのものが多い。天竜川対岸の細新遺跡では住居址が９軒確認されており、周辺に集落が存在したと推定される。水田址については古墳時代中期以降～９世紀後半以前に使用されたと思われるが、当該期に水田が営まれていたとした場合、遺跡周辺は生産地としての土地利用が行われていたと推定される。

５）中世（挿図10）

出土遺物から14世紀～15世紀後半が主体となる。建物址27棟・住居址４軒・土抗27基・溝９条・ピット多数などが確認されている。主体となる建物址は調査区北東側に集中する。建物址同士の切り合いも随所にみられ、数時期に亘る建物址群が存在したと推定される。遺物がみられないものが多いため、時期別の変遷を提示することはできないものの、建物址群は以下の４つのグループに分けられる。

①ＳＴ05・06　主軸は同じで規模が異なる。ＳＴ05には内部施設としてＳＫ21がみられる。切り合い関係は不明であるが06→05へ建て替えが行われたと推定される。
②ＳＴ07・08　主軸はほぼ同一で規模が異なる。ＳＴ07には内部施設としてＳＫ42・ＳＤ12がある。切り合い関係は不明瞭であるがＳＴ08→ＳＴ07へ建て替えが行われたと推定される。
③ＳＴ09・10・23　主軸はＳＴ10のみ90度異なる。切り合い関係が不明瞭で新旧関係はつかめない。
④ＳＴ13～16　主軸はＳＴ14がやや西に、ＳＴ13が東に振り気味に建てられている。ＳＴ14の内部施設としてＳＫ31・36がある。新旧関係はＳＴ16→ＳＴ15の他不明瞭であるが、内部施設への切り合い等を考慮するとＳＴ16→15→14→13の可能性がある。

以上の建物址群は、それぞれ１つの建物址の建て替えが数次にわたって行われた結果を示すと判断される。また、それぞれのグループの主軸はほぼ同一である点、各々の規模も他の建物址に比べ大型である点は注目される。こうしたことから一時期に大型の建物が３～４棟存在し、周辺に小建物が配置されていたと推定される。また四面庇建物址であるＳＴ12は大型建物址群の中間にあり、堂宇的な性格を持つ遺構であると考えられる。一方、建物址以外の遺構は建物址南側に、池あるいは貯水施設と推定されるＳＸ01、建物址群を取り巻くＳＤ01、ＳＤ01に接して確認された便所遺構と推定されるＳＫ20などが確認されており、建物址群と共に本遺跡の性格を示すものと考えられる。こうした諸施設を持つ本遺跡の中世面は、溝（濠）をもつ屋敷地の可能性が高いといえる。屋敷地とした場合、溝に囲まれた東西約50m・南北約30mの区画内がこれに該当すると思われ、区画内北側に大型建物址を中心とする居住域が営まれ、南側には池・便所などの諸施設が存在したと推定される。出土遺物は少数の輸入陶器類・瀬戸産を中心とする陶磁器類・鉄製農具・木製品が主体で、武器類は確認されておらず、15世紀にその中心があると思われる。

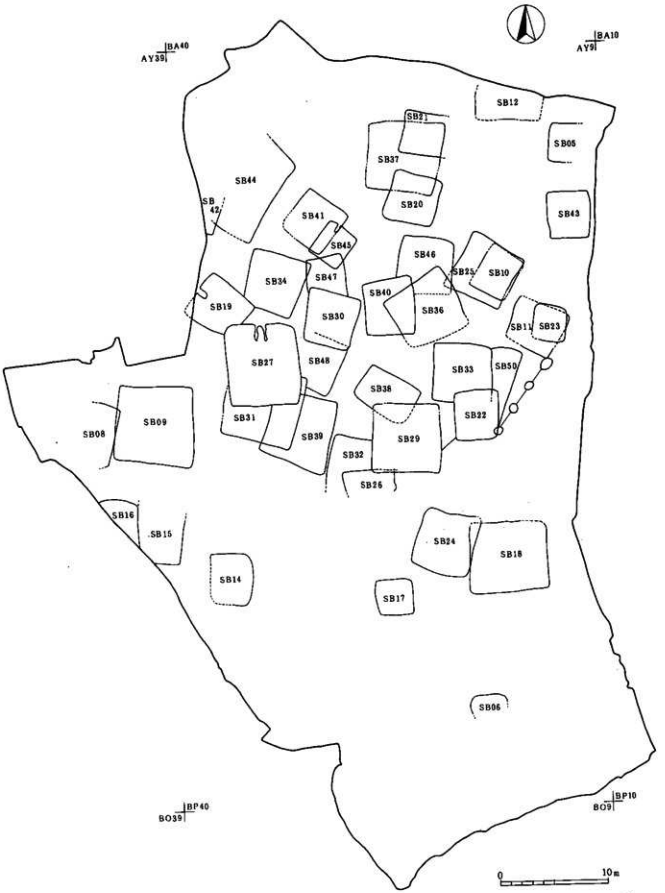
一方、文献史学的な側面では、この屋敷地に関する記述は確認されないものの、慶安２年の検地帳によると遺跡付近に「いくしま」・「おもてきど」・「うらきど」・「じょうばた」・「ほり」等の記載があり、これを根拠として『川路村史』では調査区南側の月の木台地を城址（幾島城）に比定しているものの、発掘調査では城址の存在は確認されていない。また『川路村史』の調査によると、調査区外北側付近が「おもてきど」に該当すると推定しており、慶安検地帳に現れるこれらの地名は、城址の存在を示すのではなく、今次調査で確認された屋敷跡の地名が残されていた可能性が強い。

以上から遺構・遺物を総合して遺跡の性格を推定すると、15世紀代に主体を持つ有力者の屋敷跡と思われるが、有力者イコール武士ではなく、豪農的な性格の強い有力者の居住地であり、16世紀には屋敷跡が廃絶すると考えられる。

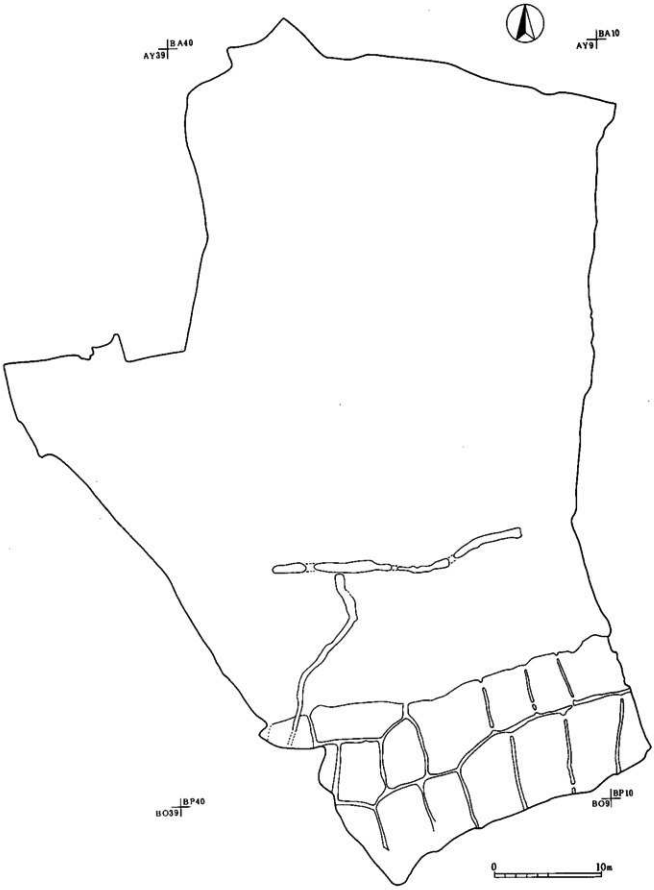
６）近世（挿図11）

堤防址と推定される土留め状遺構が確認されている。出土遺物からは18世紀代と考えられるが、天正年間から記載された川路地区の水防の年譜である『川路村水防史』にその存在は記載されておらず、私的に行われた川除普請の可能性がある。この堤防によって南側部分については水田として利用されていたと思われる。

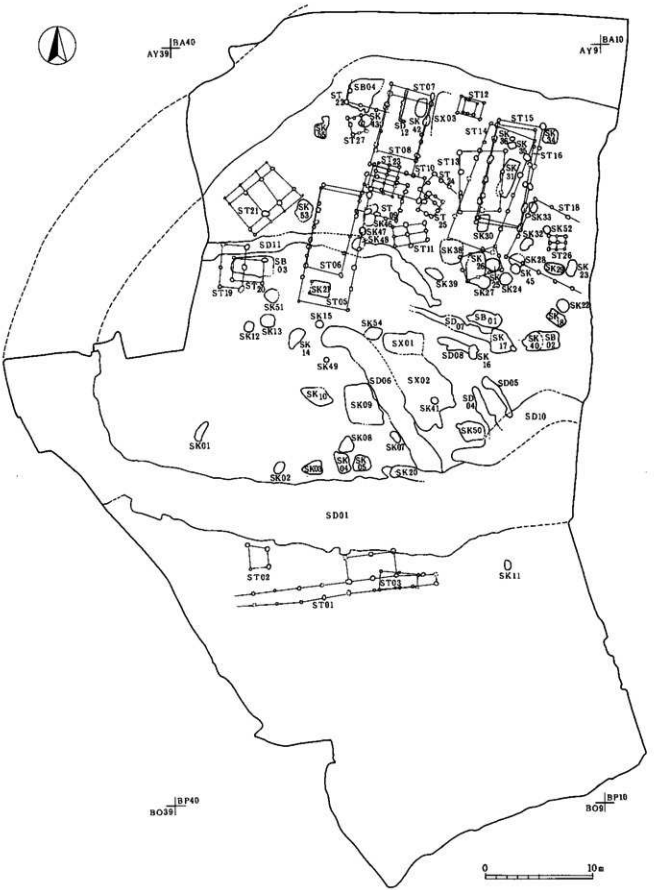
以上各期における様相を概観すると、当該遺跡内の土地利用を推定することができる。すなわち、弥生時代中期・居住域→弥生時代後期終末・居住域→古墳時代中期・居住域→古墳時代後期～平安時代・水田→14～15世紀代・居住域→江戸時代・水田の変遷があげられる。むろんこれが遺跡の土地利用をすべて示すとは思われないが、少なくとも弥生中期～後期の間と平安時代～中世の間には検出面の相違があり、それぞれの間には大規模な洪水による断絶期が存在したと推定される。この状況を示すものとして水田址の検出状況があげられる。水田址は厚さ10cm程度の泥に覆われており、一旦洪水が起これば河道でこそないものの、湖状の様相を呈したと推定される。井戸下遺跡の集落は、その立地の性格故に、絶え間ない天竜川の氾濫に翻弄されつつも、水田耕作に適したこの地に執着し、形成され続けたと考えられる。



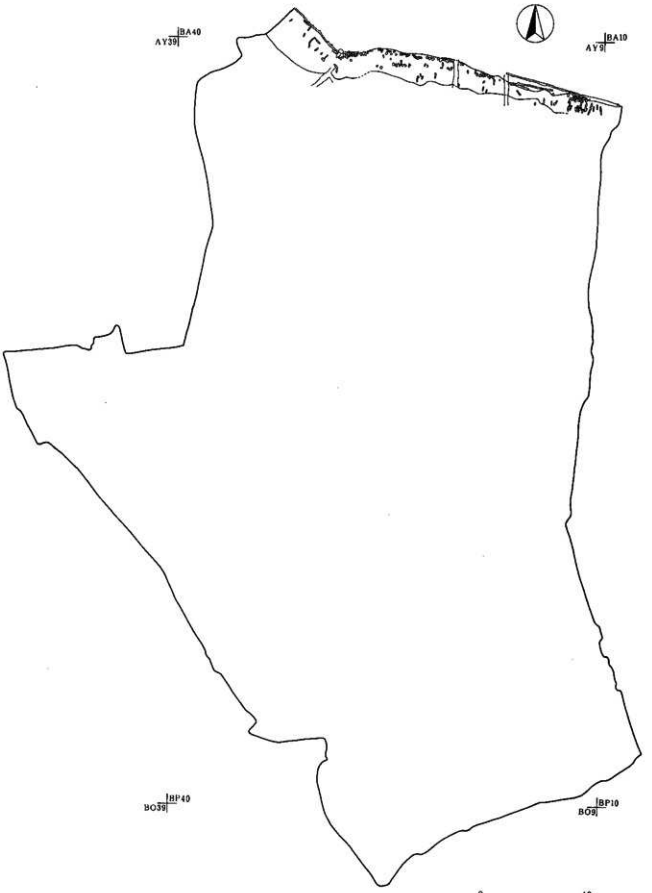
挿図 9　弥生～古墳時代遺構分布図



挿図10　奈良～平安時代道構分布図



挿図11　中世遺構分布図



挿図12　近世遺構分布図

第3節　結語

挿図4の周辺遺跡図に示したとおり、現在の河川流路や微地形から、段丘下の水田址の存在が予想され、図示した程度を生産遺跡の範囲としてきたが、遺跡の実態は調査を行うまでは全く不明であった。

試掘調査により当初予想された水田址は確認出来なかったが、何カ所かの地点で遺物が出土したことから、集落址等の存在が判断された。挿図9他に示した範囲を本調査したわけであるが、調査範囲外にも集落址等の範囲が広がる可能性が高いことを考えなければならなかった。

具体的には、遺構分布状況は調査範囲外の南を除く三方に延びており、また試掘調査の初期の段階において調査範囲東側天竜川より部分で工事前の水田面から約6mを越す深度で土師器・縄文土器などが確認されたことによる。

本来、試掘調査において遺跡の広がりの予想されたすべてについて詳細な試掘調査を実施し、本調査範囲の確定を行うべきであったが、本調査実施個所以外は36災後の造成土の下に天竜川による砂礫の厚い堆積があり、それより下位には遺跡立地しないとの判断をした。しかし、その時点での当市教育委員会が天竜川流路近辺における遺跡立地の認識に欠落したものがあり、かなりの深度に本来存在した可能性が高い遺構遺物等の把握を成し得なかったことは、今回調査実施した限られた範囲からの発見された内容が、当地方の古代史上極めて重要であると認識されることから、痛恨の限りである。

さらに、弥生時代中期（それより以前からの可能性もあるが）以来、天竜川氾濫による災害を幾度と無く被りながらも、執拗にその地を居住かつ生産のエリアとして活用し続けた先人の労苦があったことを思うとき、この井戸下集落（生産地）の一部しか解明できなかったことへの自戒とせざるを得ない。

本文中でも触れたが、本調査範囲を決定した試掘調査の判断に不備・認識不足があったこと・本体工事との期間的な兼ね合いでの調査範囲を拡張しての対応が困難であったこと・当該地が脆弱な砂礫層の厚い堆積であったことなど、その時点での飯田市教委区委員会の資質・自然条件などの相関により起きてしまった調査の不備といえる。今後、飯田市内で同様な遺跡の調査が実施される可能性はほとんどないが、万一、そうしたことが必要となった場合は、本例の轍を踏まぬことを肝に銘じなければならない。

なお、現地は既に天竜川治水対策事業が施行され、かつての水田面からでも6mの盛り土がなされ、先人の営みを成していた頃の地表面は8～10数mもの地下に埋設されたことになる。工事後の土地利用の様から、後世改めてこの地の発掘調査を成すことは限りなく不可能に近いが、現にこの地下には未調査のまま先人の生き様を包蔵していることを、敢えて明記するものである。

主要参考文献

大沢和夫　1950　「阿島式土器」『喬木史談会業書』ＮＯ４

神村　透　1967　「飯田市寺所遺跡とその他の遺跡」『長野県考古学会誌』第４号

佐藤甚信・宮沢恒之　1967　「喬木村阿島遺跡」同上

神村　透　1967　「弥生文化の発展と地域性－中部高地」『日本の考古学』Ⅲ　河出書房

久永春男　1967　「弥生文化の発展と地域性　三　東海」『同上』

神村　透　1969　「中部山岳地帯」『新版考古学講座』４原始文化（上）弥生文化　雄山閣

久永春男　1969　「東海地方」同上

高森町教委　1972　「北原遺跡」

紅村　弘　1981　『東海先史文化の諸段階』本文編・補足改訂版

佐藤甚信　1982　「寺所遺跡と寺所式土器」『中部高地の考古学』Ⅱ　長野県考古学会

杉原荘介　1984　「阿島式土器の形成」『長野県考古学会誌』48

愛知考古学談話会　1985　『条痕文系土器文化をめぐる諸問題』愛知考古学談話会

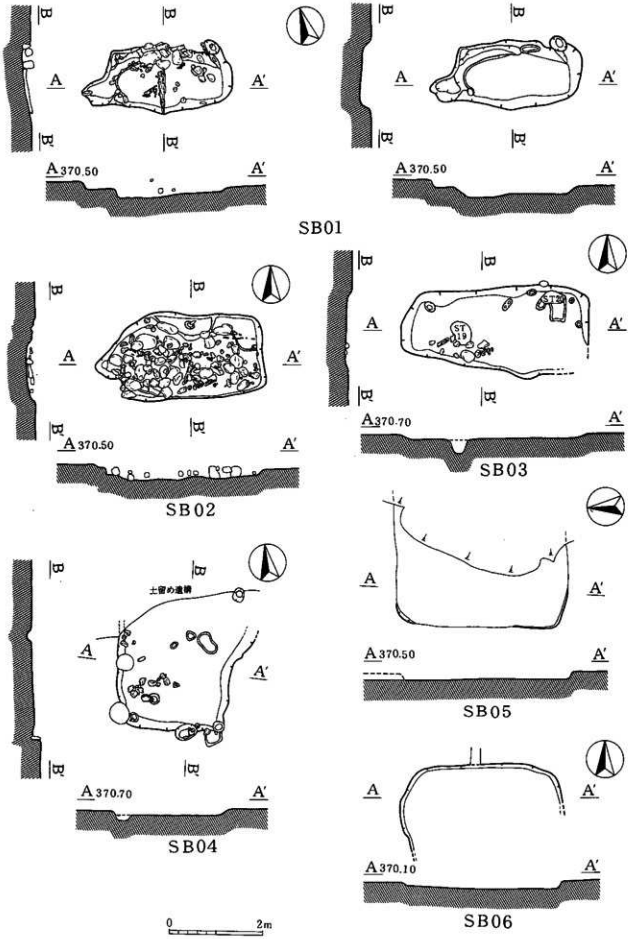
飯田市教委　1986　『恒川遺跡群』

贄　元洋　1988　「瓜郷式土器の再検討」『転機』２号

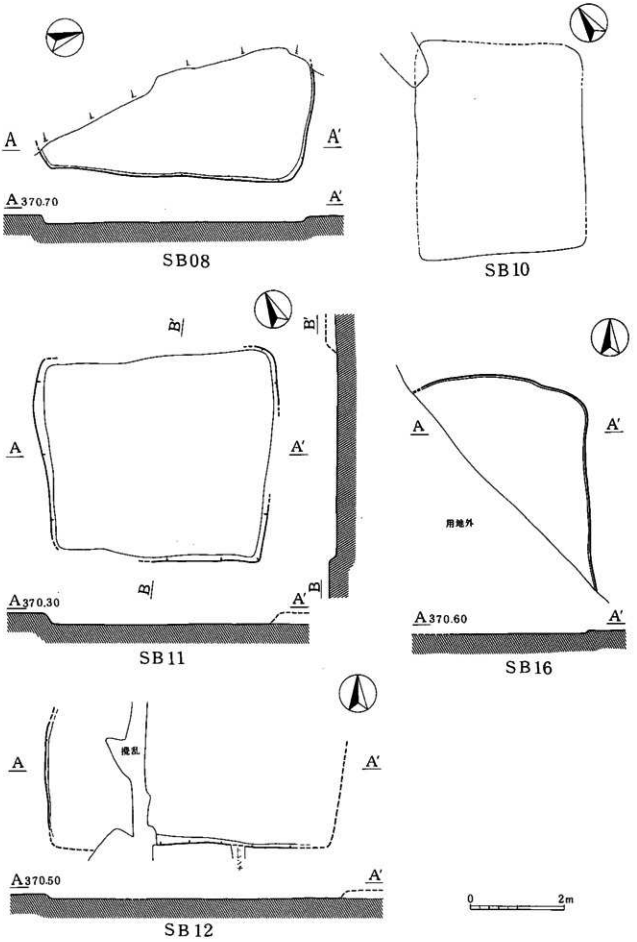
山下誠一他　1999　「長野県における古墳時代中期の土器様相」『東国土器研究』５号

西山克己　1999　「下伊那の古墳時代における新来文化の受容」『伊那』第47-４号

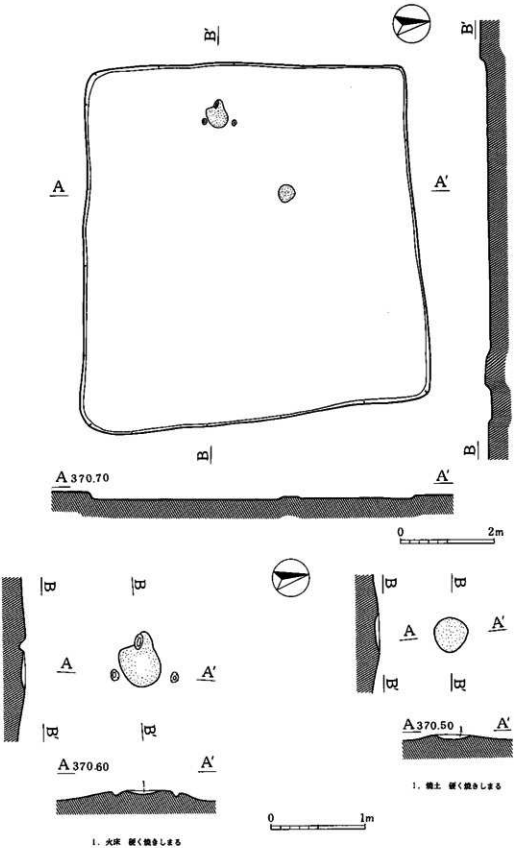
広田和穂　1999　「第１節　土器」『榎田遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書37


B
B'
A
A'
A 370.50
SB01
A 370.50
SB02
A 370.70
SB03
土留め遺構
A 370.70
SB04
A 370.50
SB05
A 370.10
SB06
0
2m

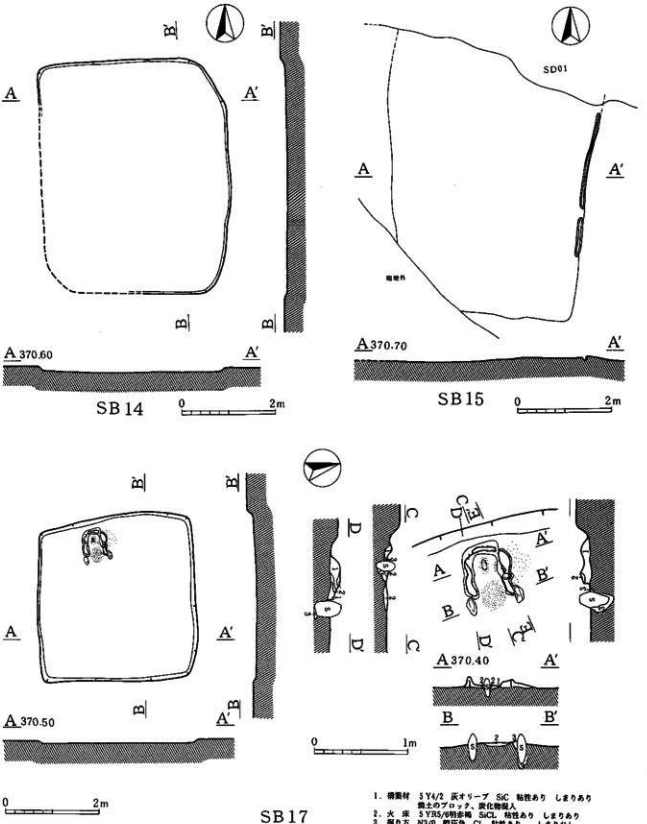
図版1　SB01～06



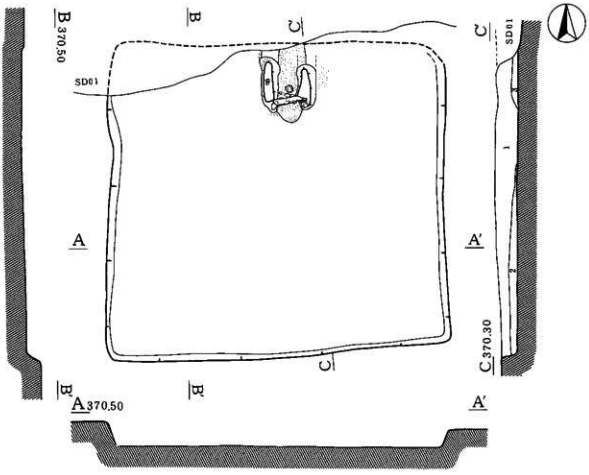
図版2　SB08・10～12・16

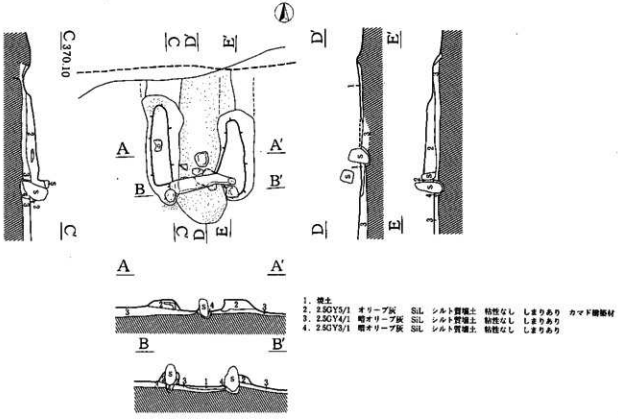


図版3　SB09

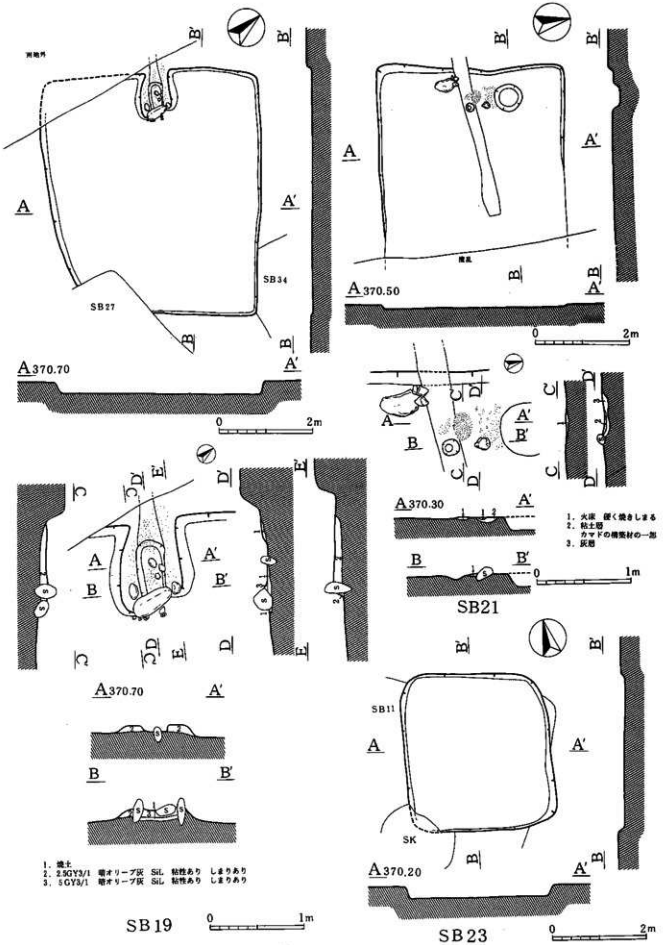


図版4 SB14・15・17

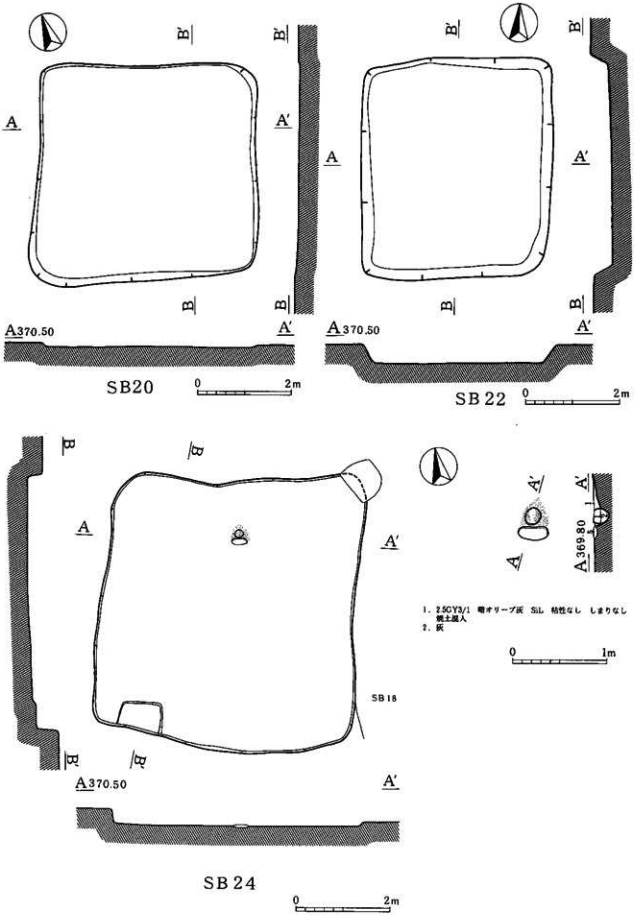

B 370.50
SD01
A
A 370.50
C 370.30
A'
1. 5GY4/1 暗オリーブ灰 SiCL シルト質埴壌土 粘性なし しまりあり
2. 7.5GY4/1 暗緑 SiCL 〃 〃 〃
3. カマド構築材
4. 5GY3/1 オリーブ灰 SiC シルト質埴土 粘性あり しまりあり


C 370.10
A
A'
B
B'
1. 焼土
2. 2.5GY3/1 オリーブ灰 SiL シルト質埴土 粘性なし しまりあり カマド構築材
3. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰 SiL シルト質埴土 粘性なし しまりあり
4. 2.5GY3/1 暗オリーブ灰 SiL シルト質埴土 粘性なし しまりあり

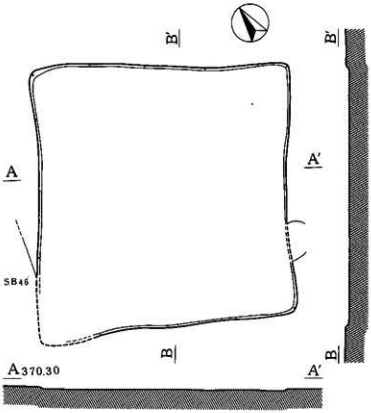
図版5 SB18



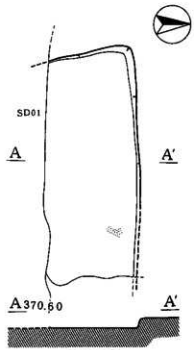
図版6 SB19・21・23



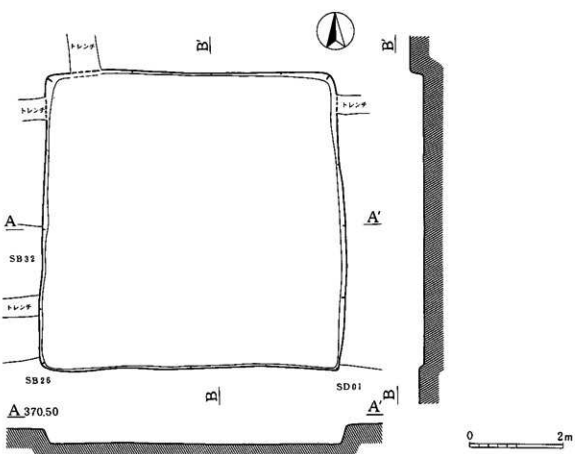
図版7 SB20・22・24



SB25

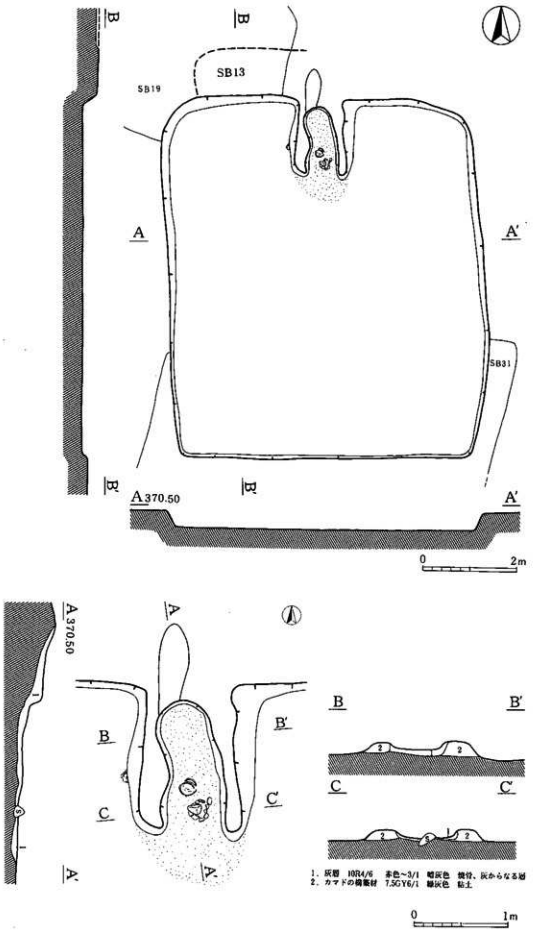


SB26

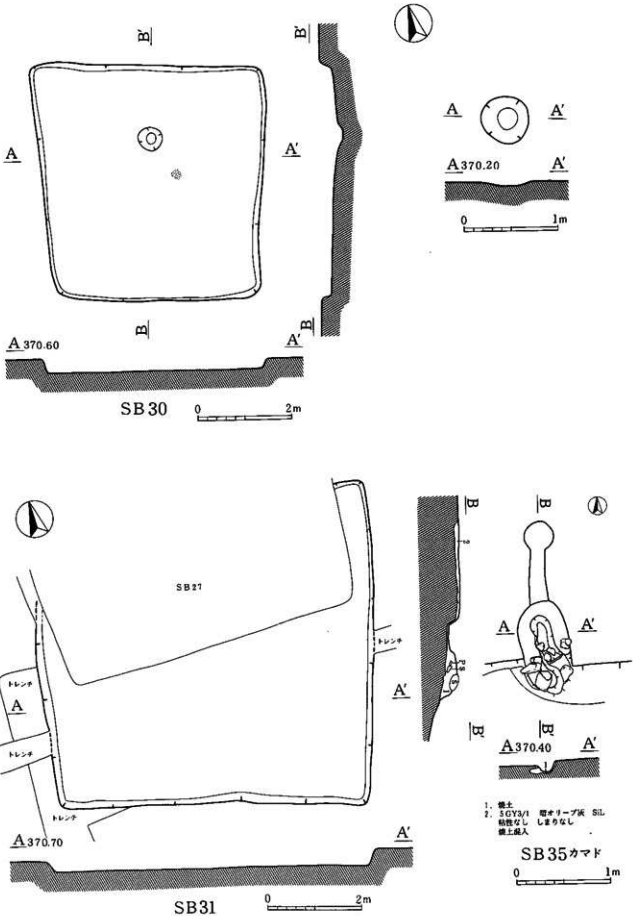


SB29

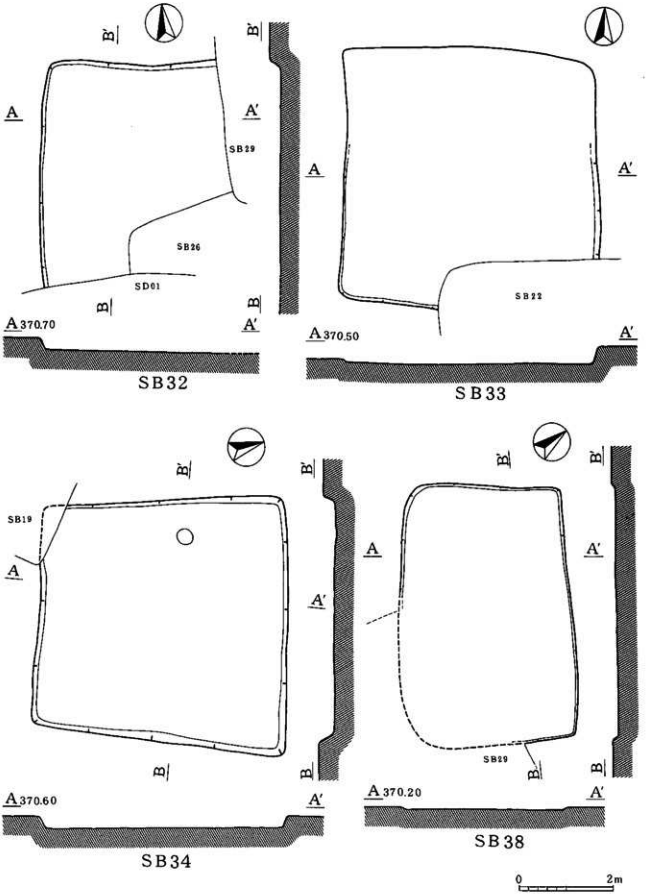
図版 8　SB25・26・29


SB13
SB19
SB31
A
A'
B
B'
A.370.50
0
2m
C
C'
1. 灰褐 10R4/6 赤色～3/1 暗灰色 焼骨、灰からなる層
2. カマドの構築材 7.5GY6/1 緑灰色 粘土
0
1m

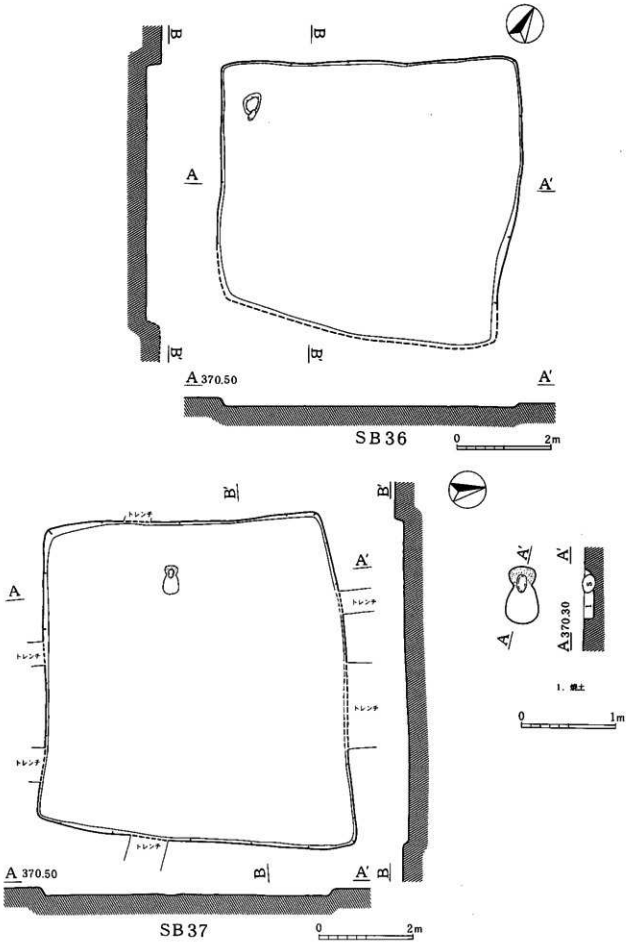
図版 9　SB27・13



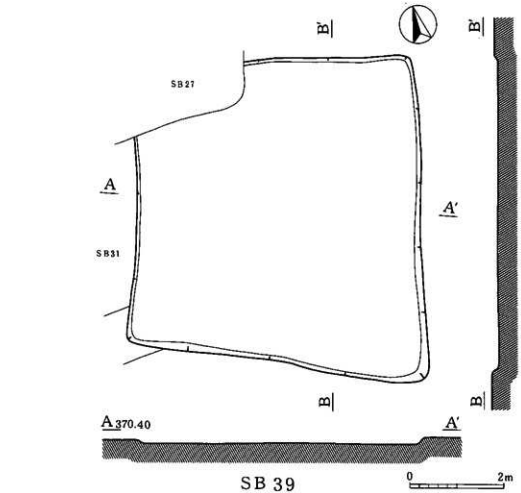
図版10 SB30・31・35



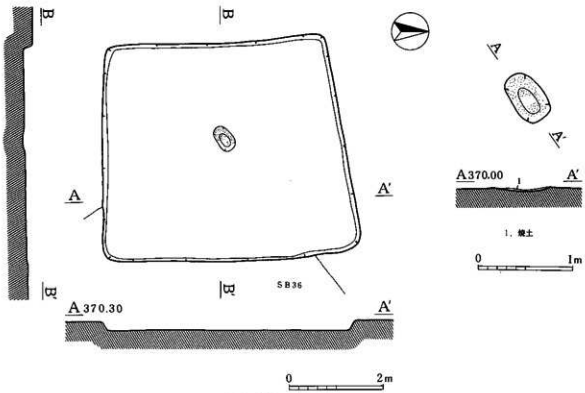
図版11　SB32・33・34・38


B
B
A
A'
A 370.50
A'
SB36
0
2m
B'
B
A
A'
トレンチ
トレンチ
トレンチ
トレンチ
トレンチ
トレンチ
A 370.50
B'
A'
B
SB37
0
2m
A'
A
A'
A 370.30
1. 焼土
0
1m

図版12　SB36・37

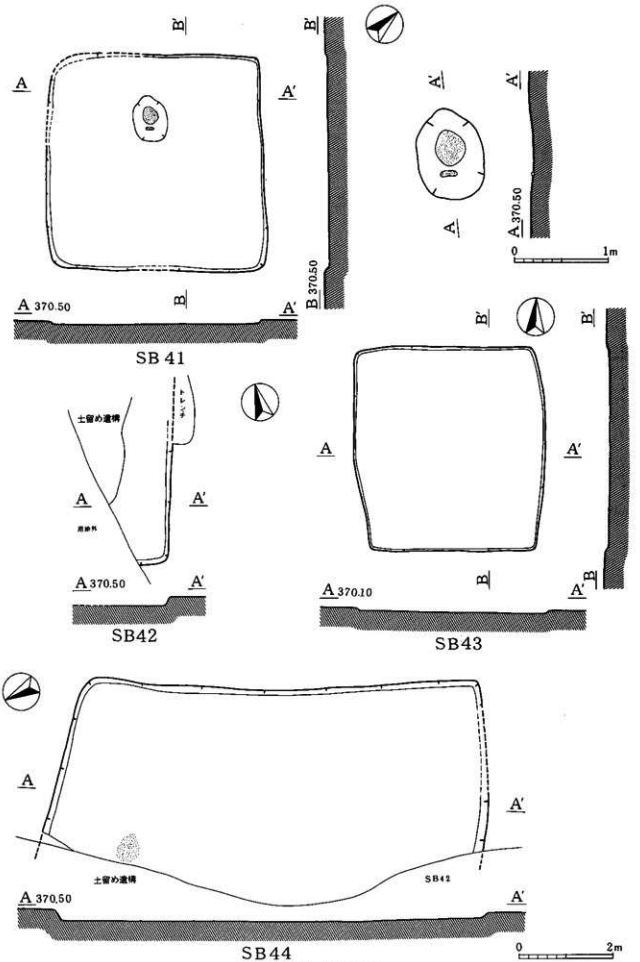


SB 39

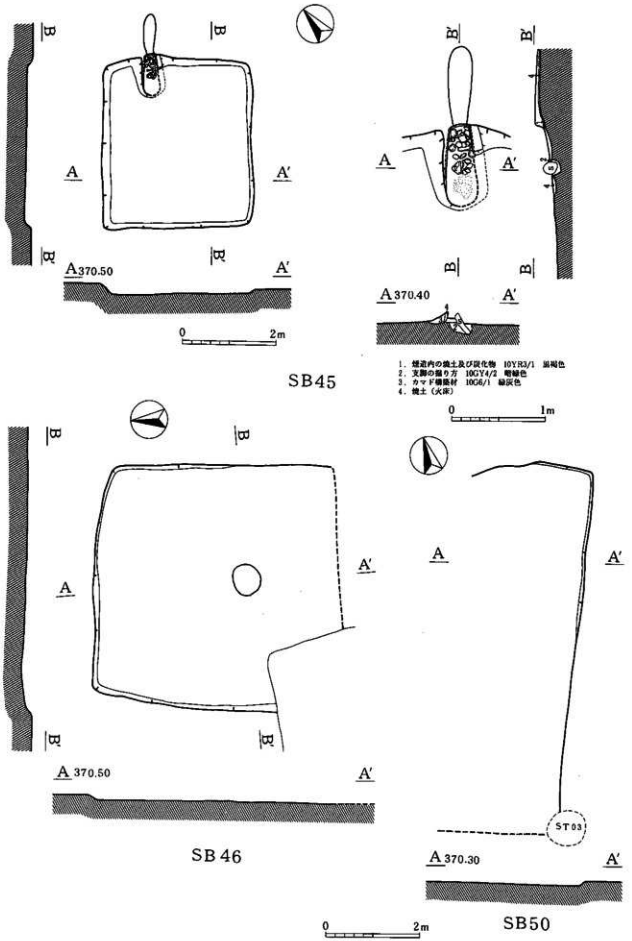


SB40

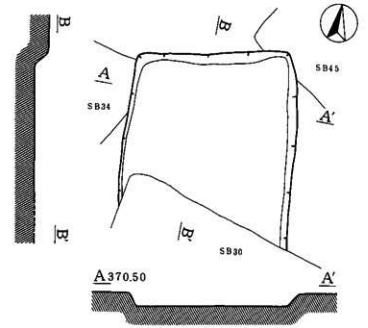
図版13　SB39・40


A
A'
B
B'
A 370.50
B 370.50
SB 41
土留め遺構
トレンチ
現地形
SB42
A 370.10
SB43
SB44
SB42
0
1m
2m

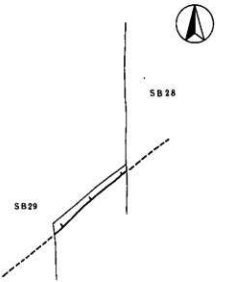
図版14　SB41～44



図版15　SB45・46・50

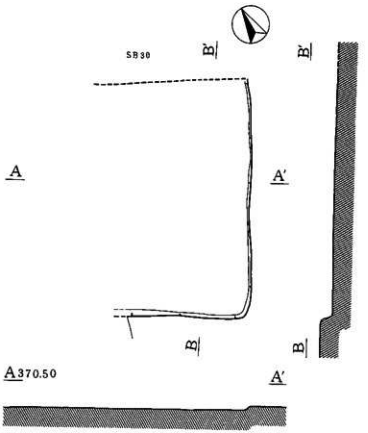


SB47



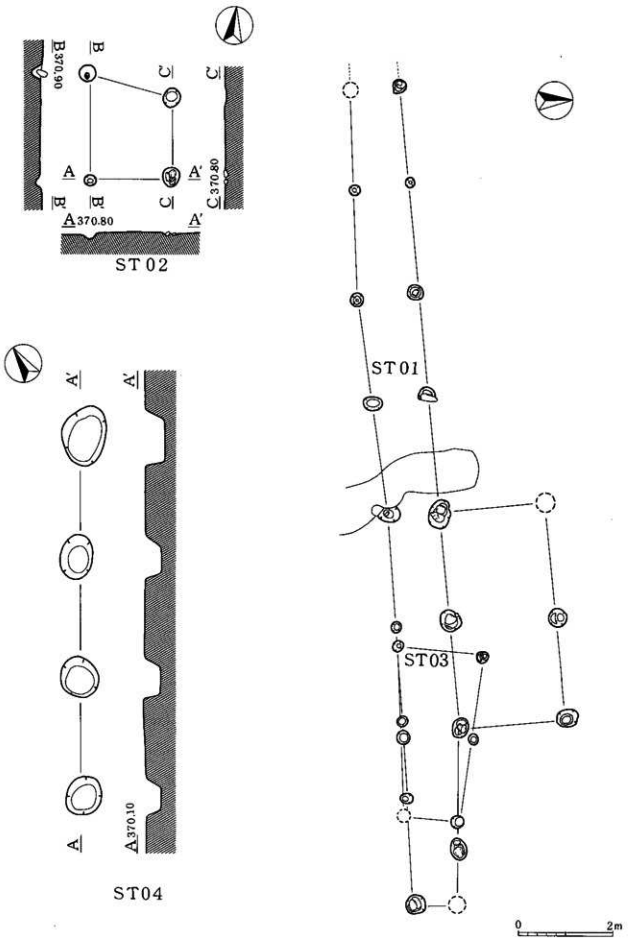
SB49

0 2m

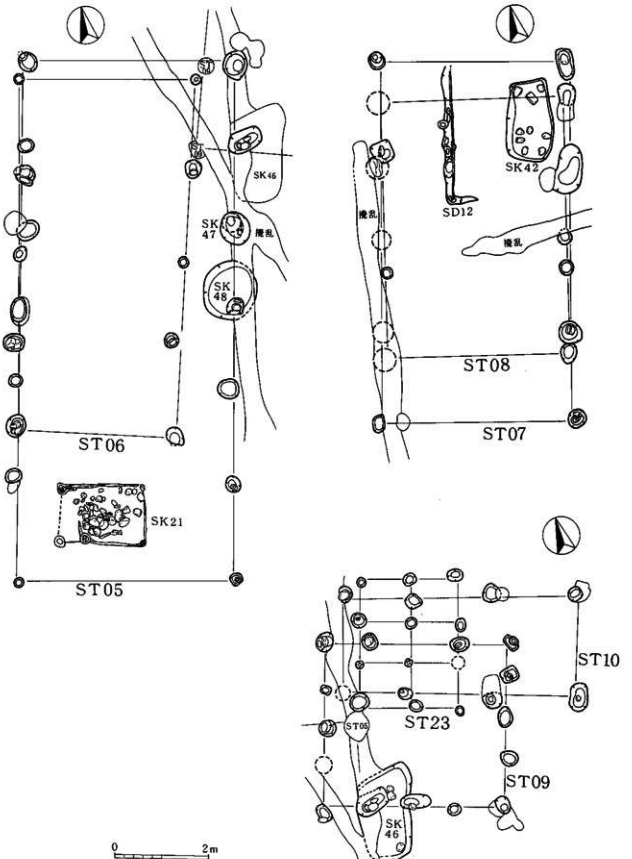


SB48

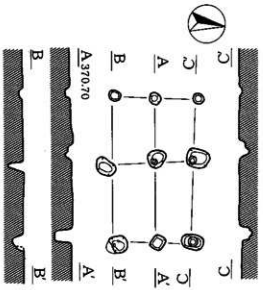
図版16 SB47～49



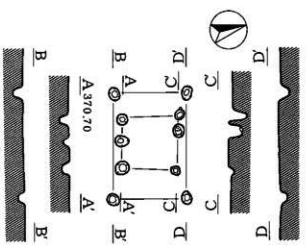
図版17 ST01～04



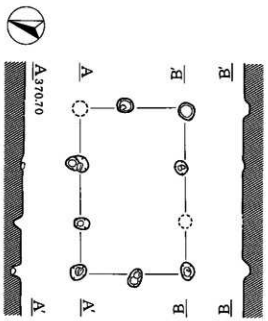
図版18　ST05～10・23



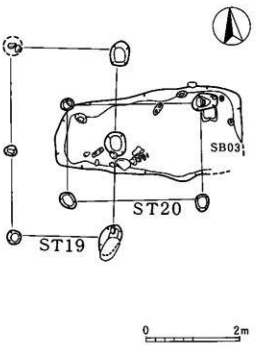
ST11



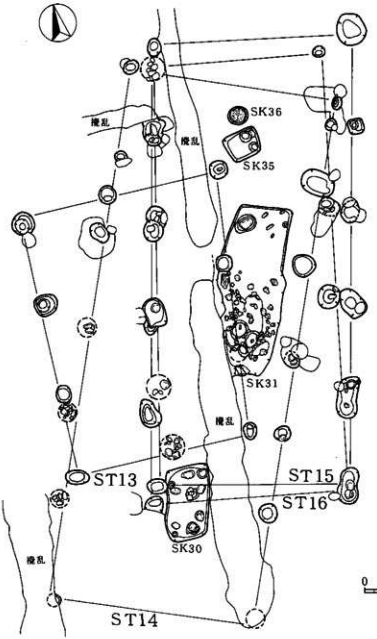
ST12

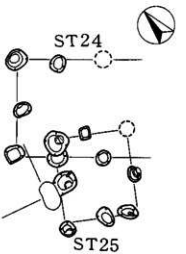


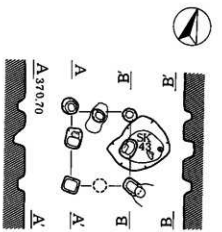
ST17

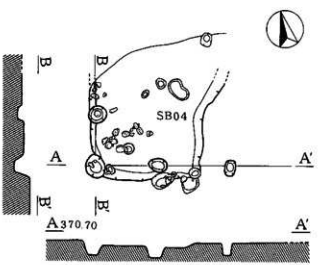


図版19 ST11・12・17・19・20

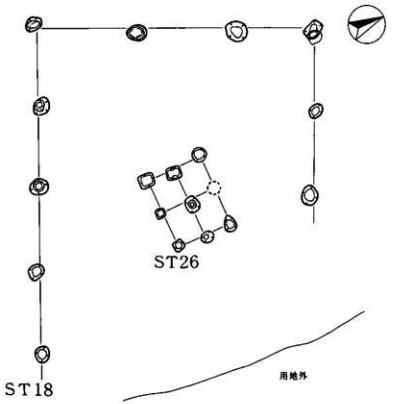


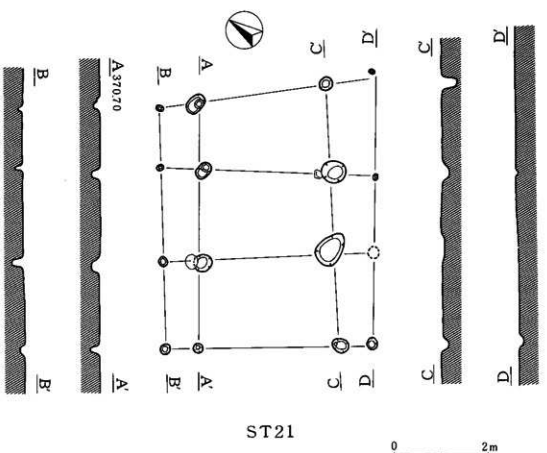




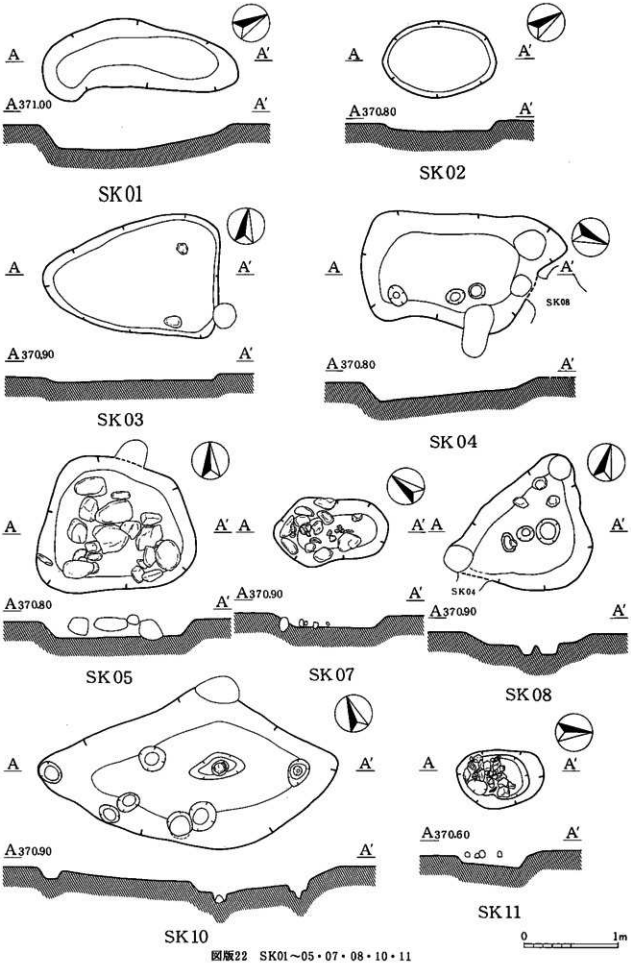


図版20　ST13～16・22・24・25・27

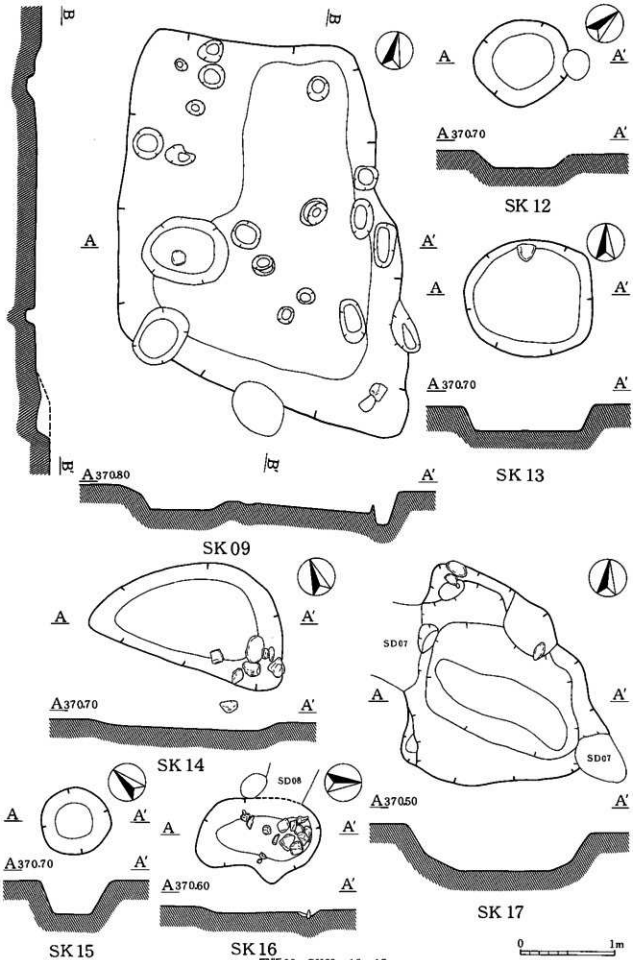




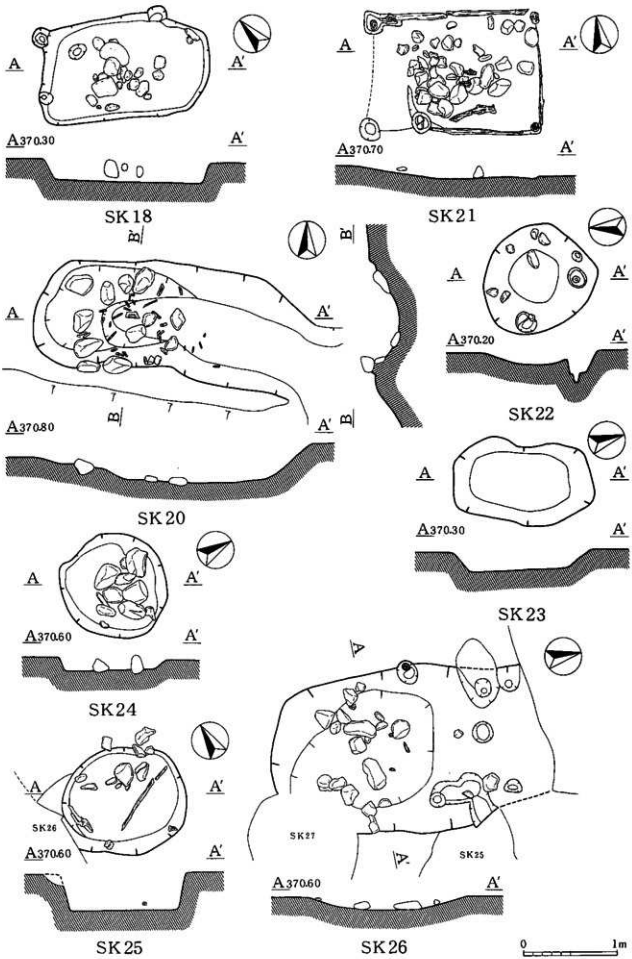
図版21　ST18・21・26



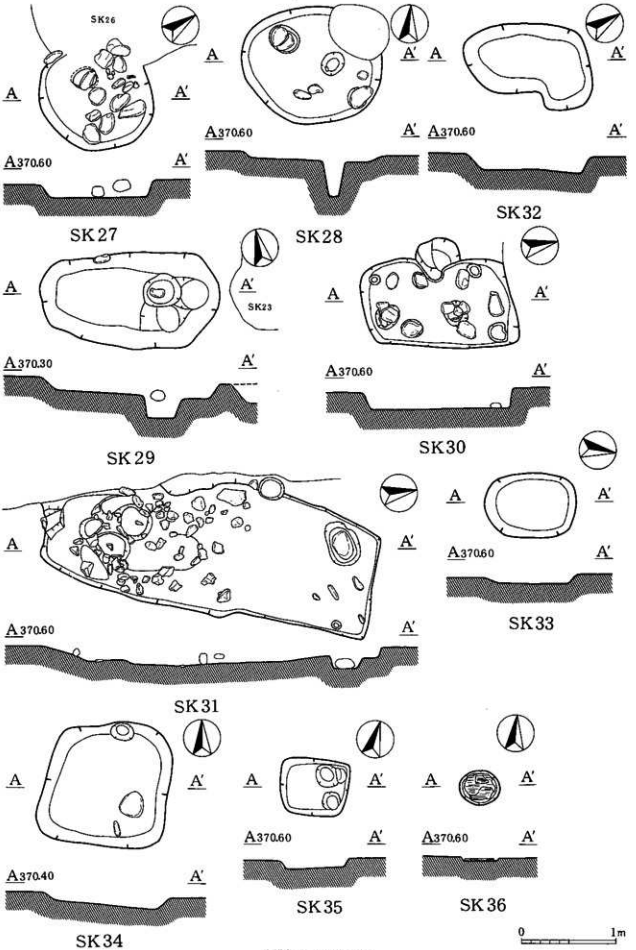
図版22　SK01～05・07・08・10・11



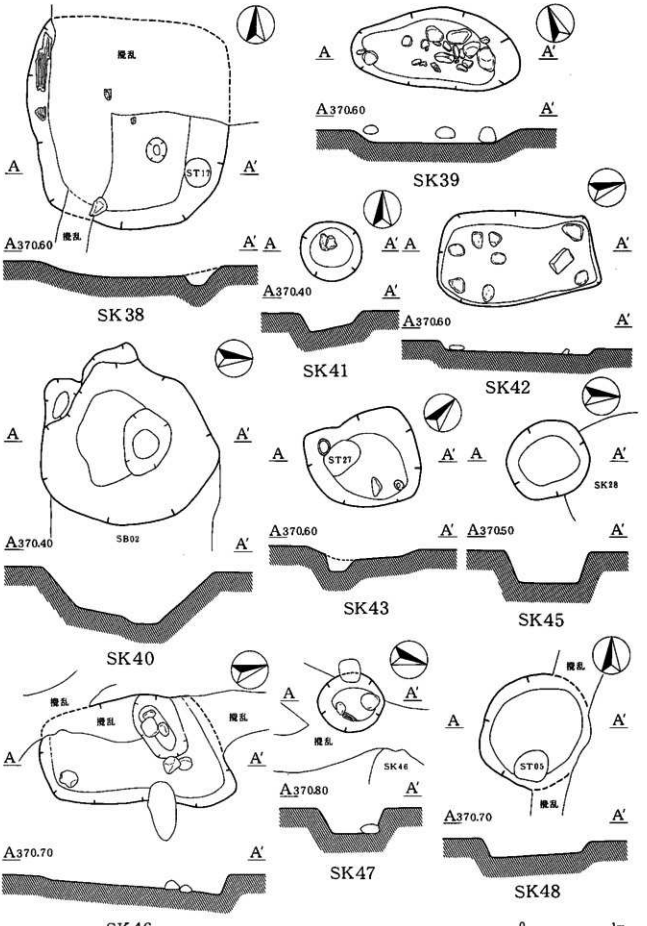
図版23 SK09・12～17



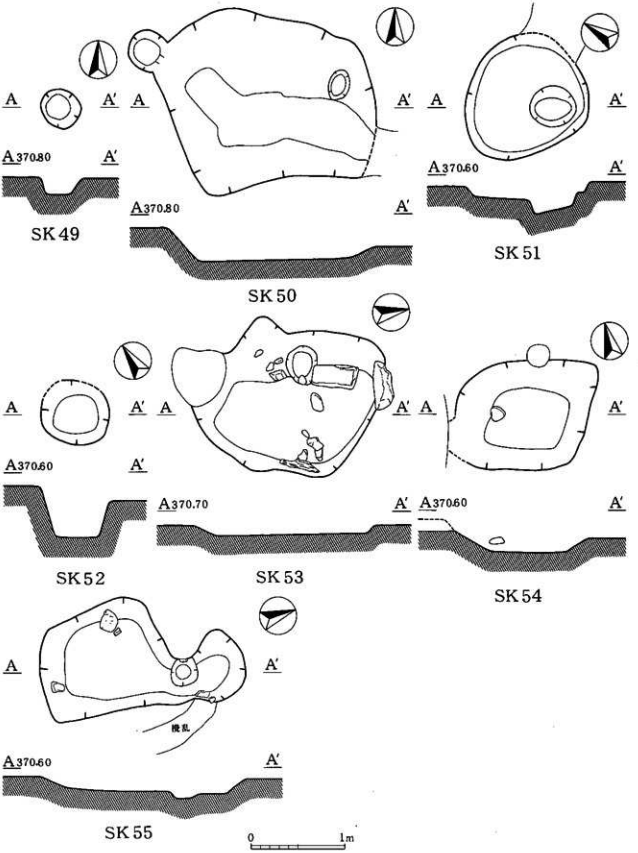
図版24　SK18・20～26


SK26
A
A'
A370.60
SK27
SK28
SK32
SK23
A370.30
SK29
SK30
SK31
SK33
A370.40
SK34
SK35
SK36
0
1m

図版25　SK27～36



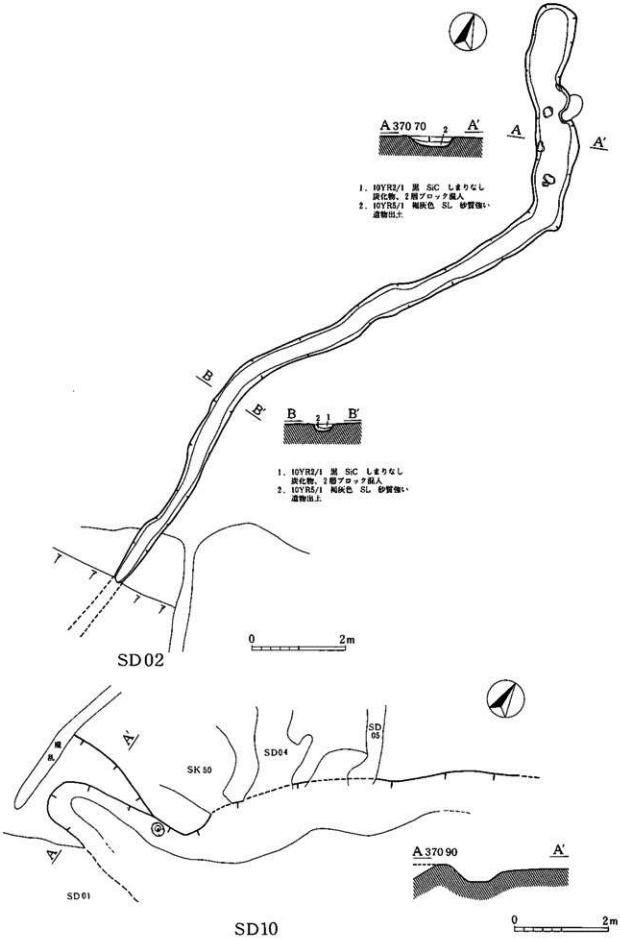
図版26　SK38～43・45～48


A
A′
A370.80
SK49
A370.80
SK50
A370.60
SK51
A370.60
SK52
A370.70
SK53
A370.60
SK54
A370.60
撹乱
SK55
0
1m

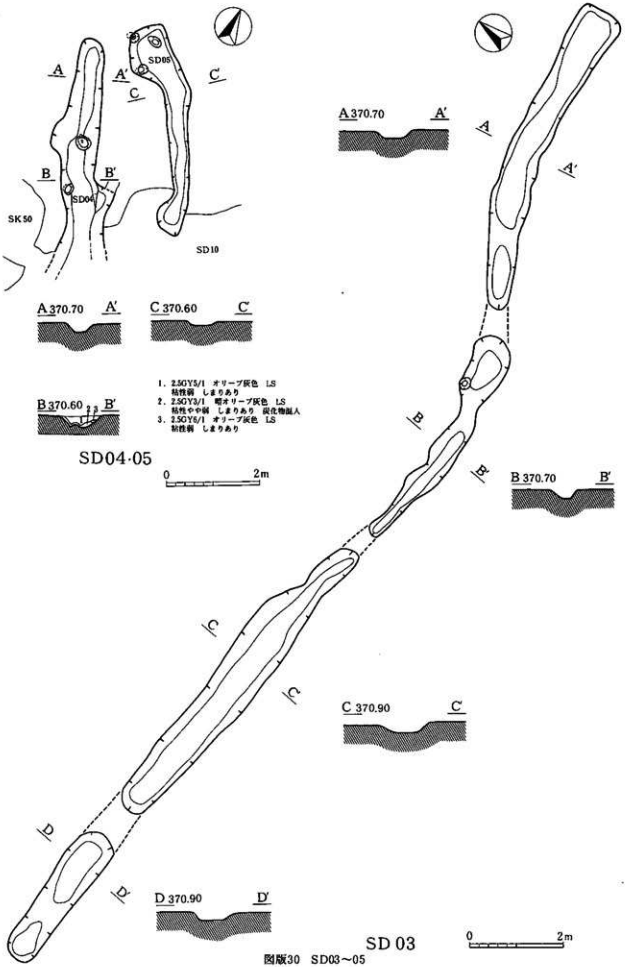
図版27　SK49～55

A
A'
A 370.80
B 371.00
B'
C 370.70
C
SD06
SD10
SK20
撹乱
撹乱
0
4m
1. N5 灰色 SiL シルト質埴土 円礫混入砂っぽくしまりなし
2. 5G5/1 暗緑色 LS 埴土砂土
3. N3 暗灰色 L 埴土 小礫混入
4. 5G3/1 暗緑灰色 L 埴土 小礫混入
5. N3 暗灰色 L 埴土
6. N8 灰白色 S 砂土

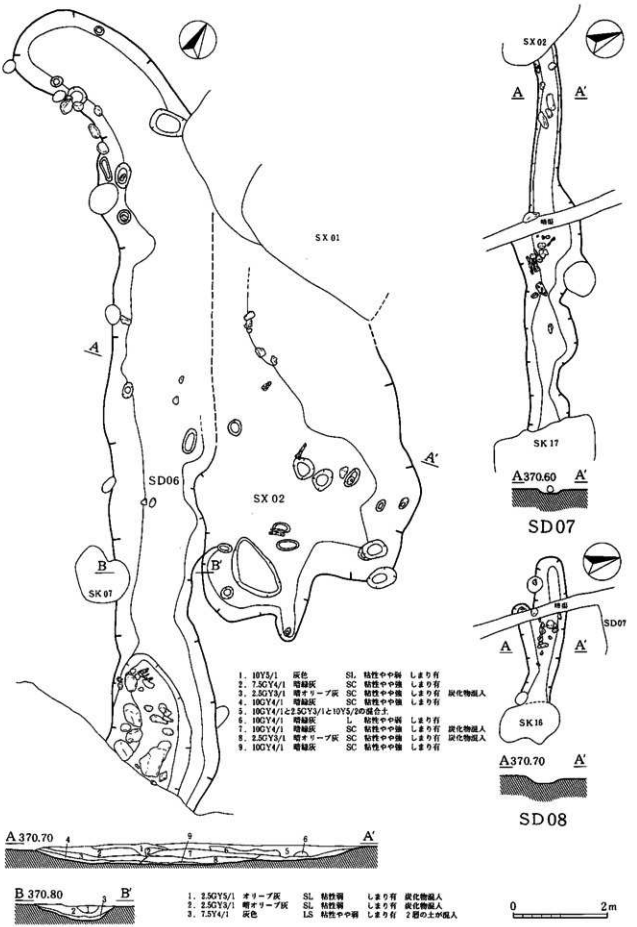
図版28 SD01


A 370 70
A'
A
A'
1. 10YR2/1 黒 SiC しまりなし
炭化物、2層ブロック混入
2. 10YR5/1 褐灰色 SL 砂質強い
遺物出土
B
B'
B
B'
1. 10YR2/1 黒 SiC しまりなし
炭化物、2層ブロック混入
2. 10YR5/1 褐灰色 SL 砂質強い
遺物出土
0
2m
SD02
A'
SK50
SD04
SD05
A'
SD01
A 370 90
A'
0
2m
SD10

図版29 SD02・10

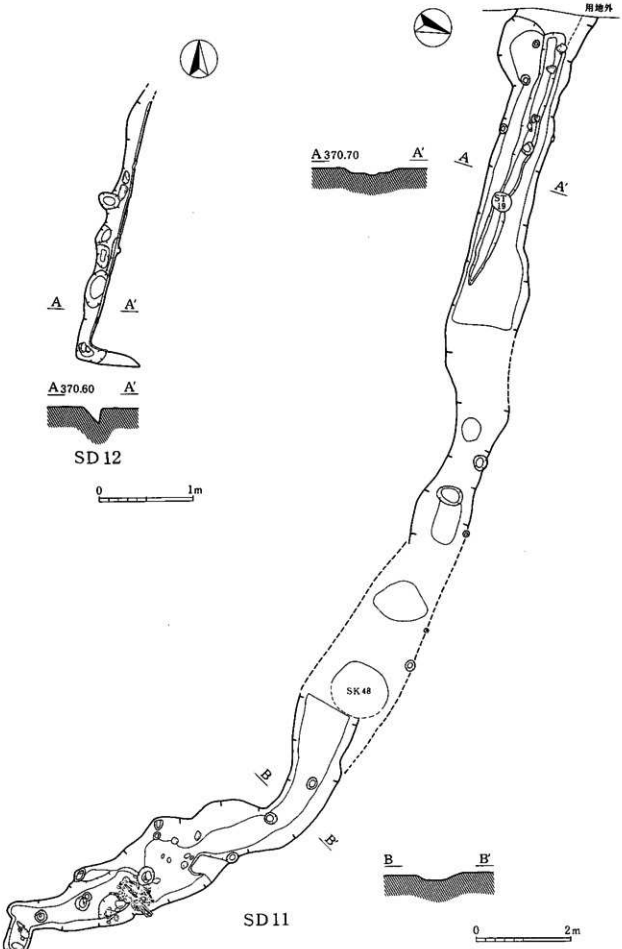

A
A'
B
B'
C
C'
SD05
SD04
SK50
SD10
A 370.70 A'
C 370.60 C'
B 370.60 B'
1. 2.5GY5/1 オリーブ灰色 LS
粘性弱 しまりあり
2. 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色 LS
粘性やや弱 しまりあり 炭化物混入
3. 2.5GY6/1 オリーブ灰色 LS
粘性弱 しまりあり
SD04·05
0 2m
A 370.70 A'
B 370.70 B'
C 370.90 C'
D 370.90 D'
D
D'
SD 03
0 2m

図版30 SD03～05

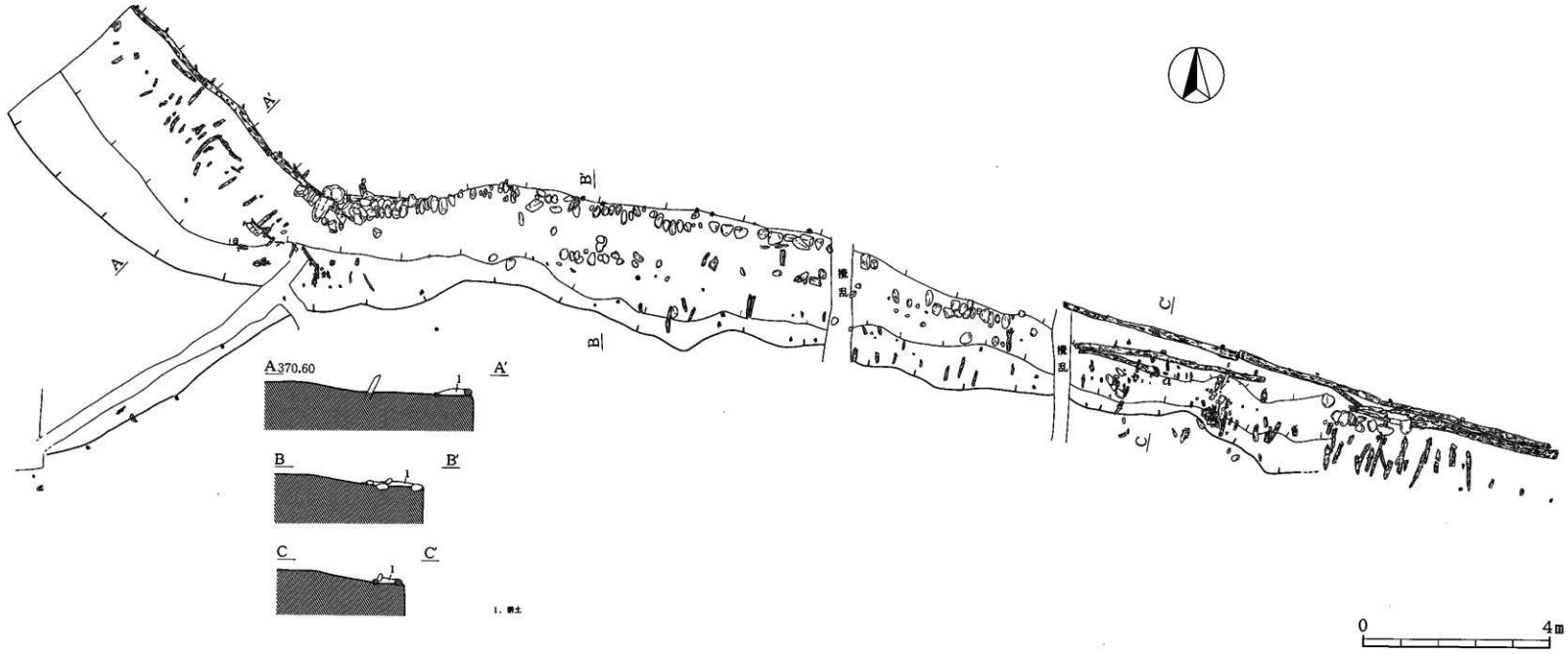


SD06・SX02

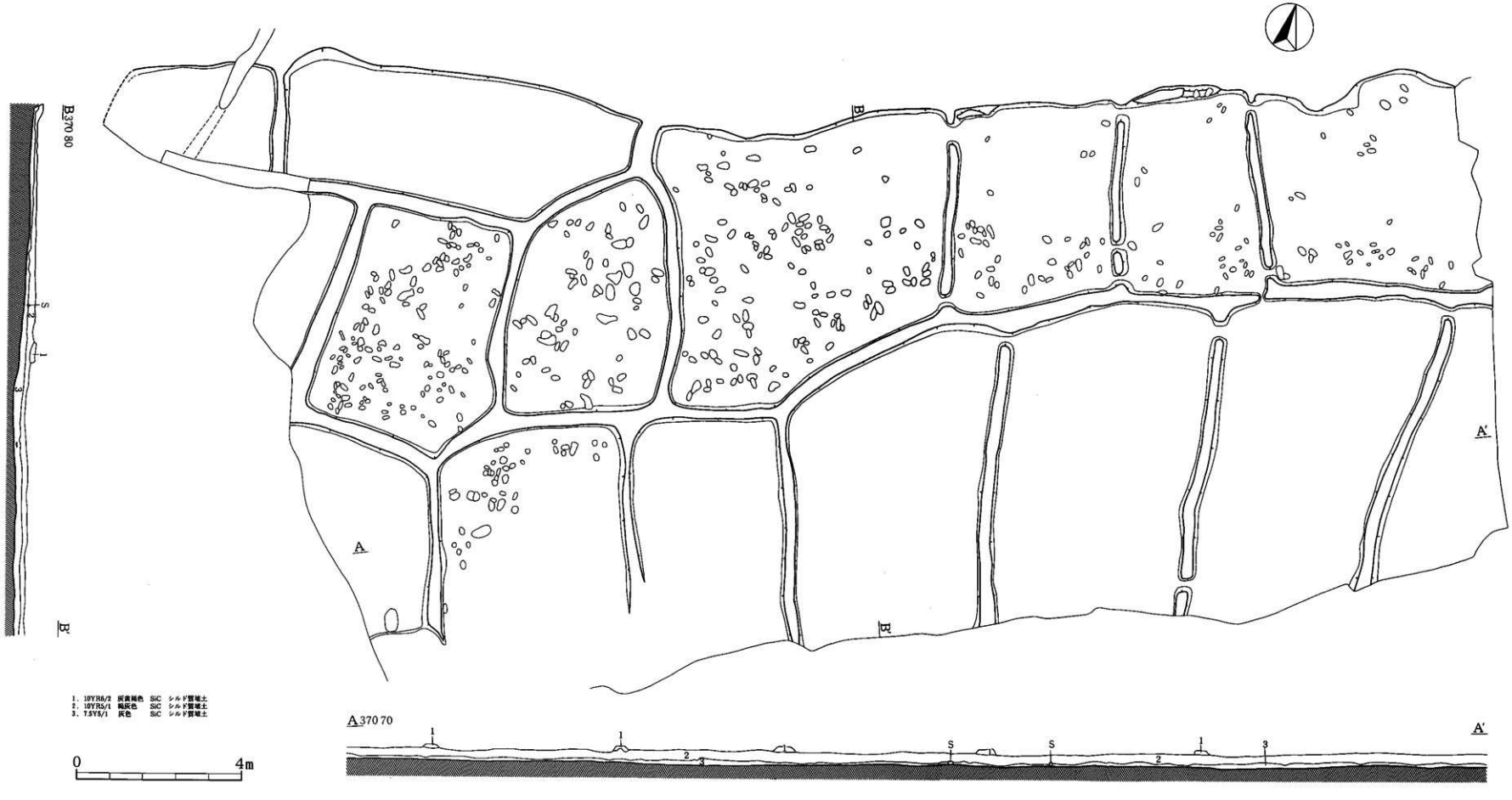
図版31 SD06～08・SX02



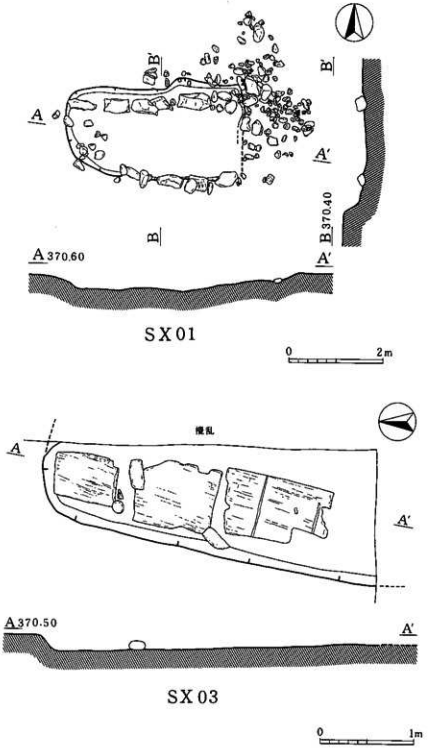
図版32 SD11・12



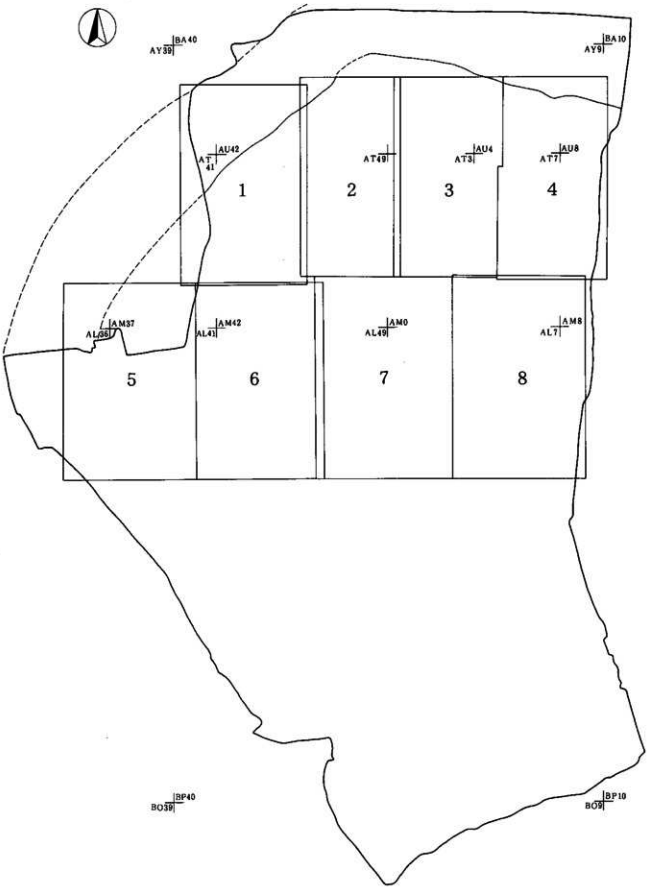
図版32　土留め状遺構


B 370 80
B'
A
A'
B
B
1. 10YR6/2 灰黄褐色 SiC シルド質埴土
2. 10YR5/1 褐灰色 SiC シルド質埴土
3. 7.5Y5/1 灰色 SiC シルド質埴土
0
4m
A 370 70
A'

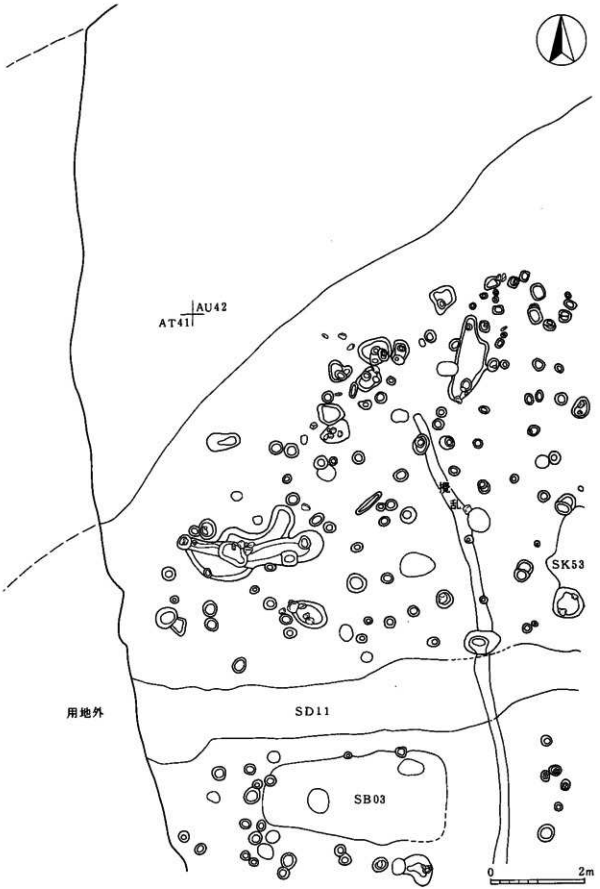
図版34 水田址



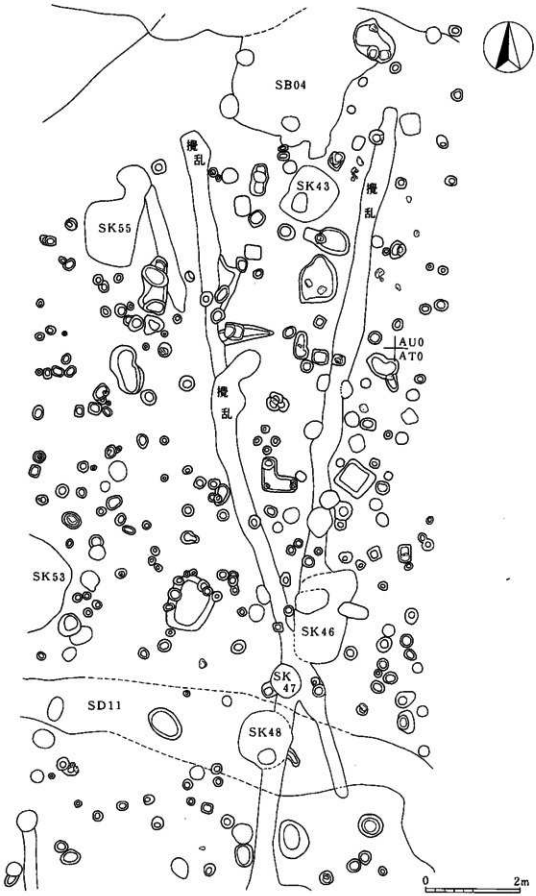
図版35　SX01・03



図版36　周辺ピット割付図

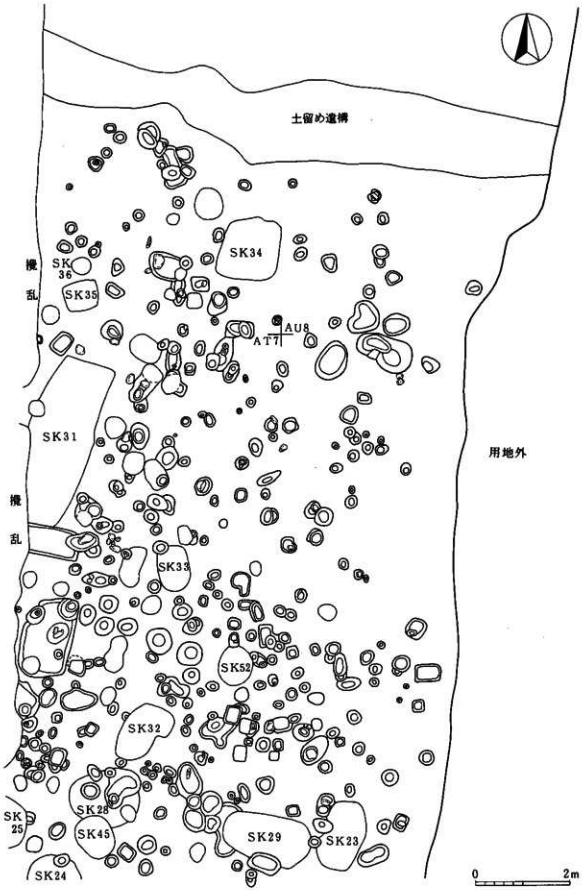


図版37　周辺ピット図1

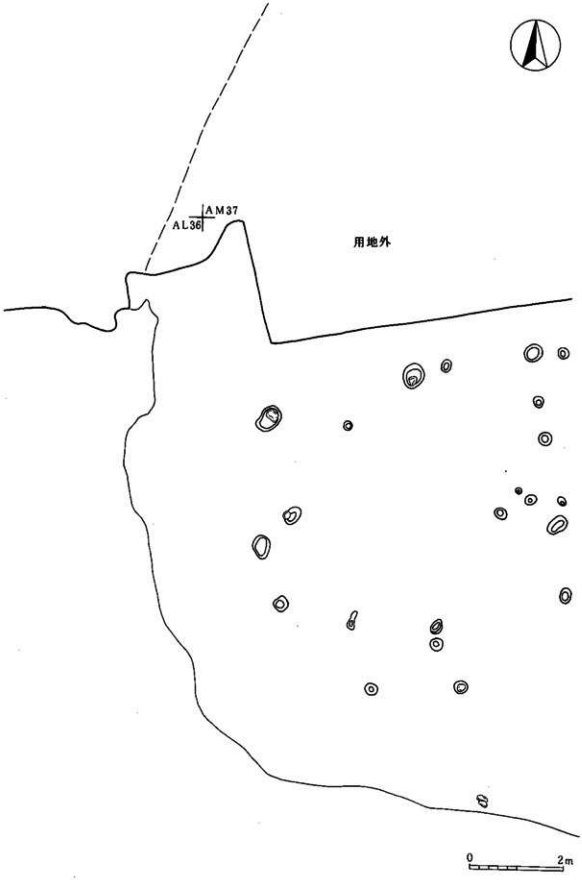


図版38　周辺ピット図2

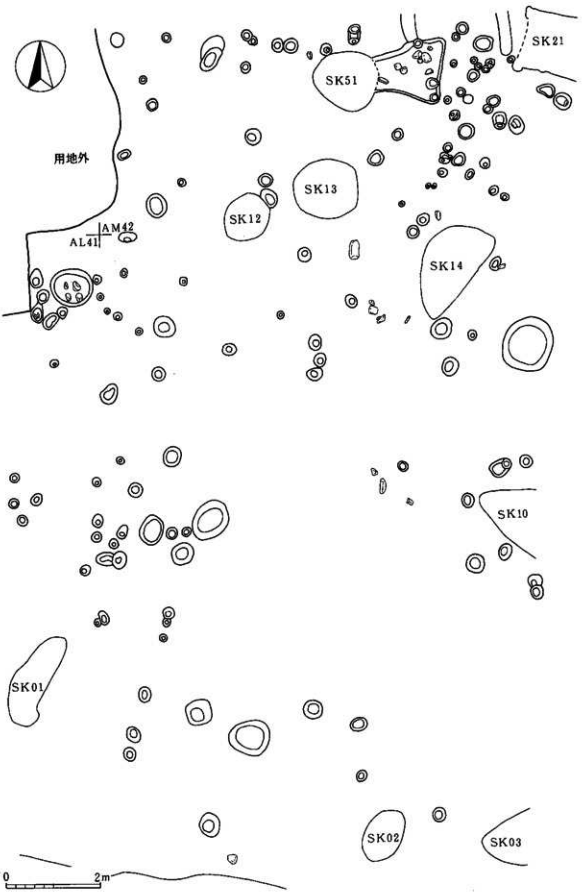
図版39　周辺ピット図3



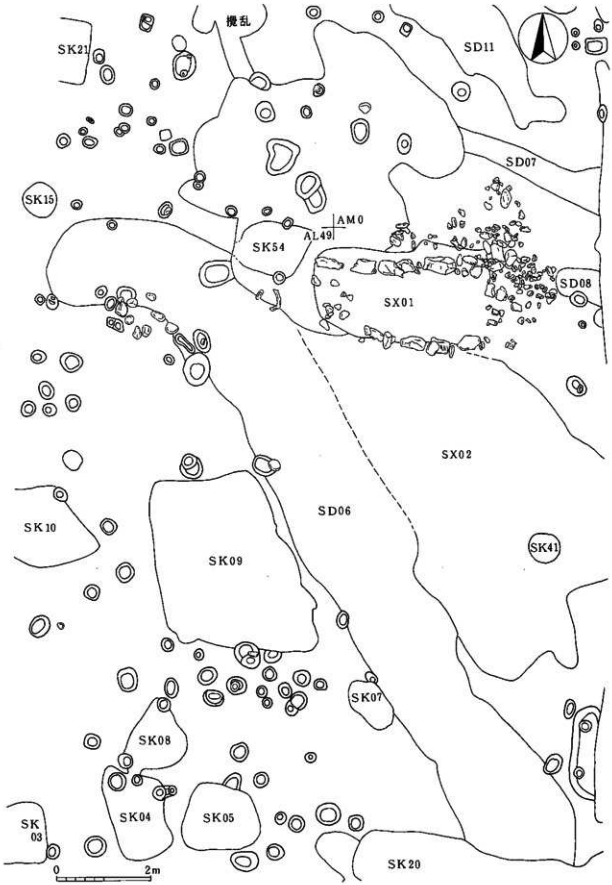
図版40　周辺ピット図4



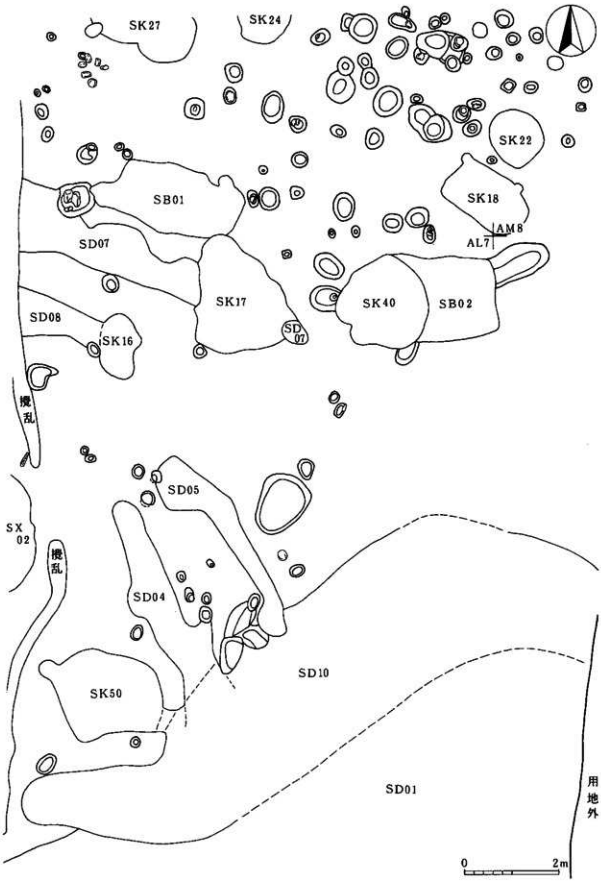
図版41　周辺ピット図5



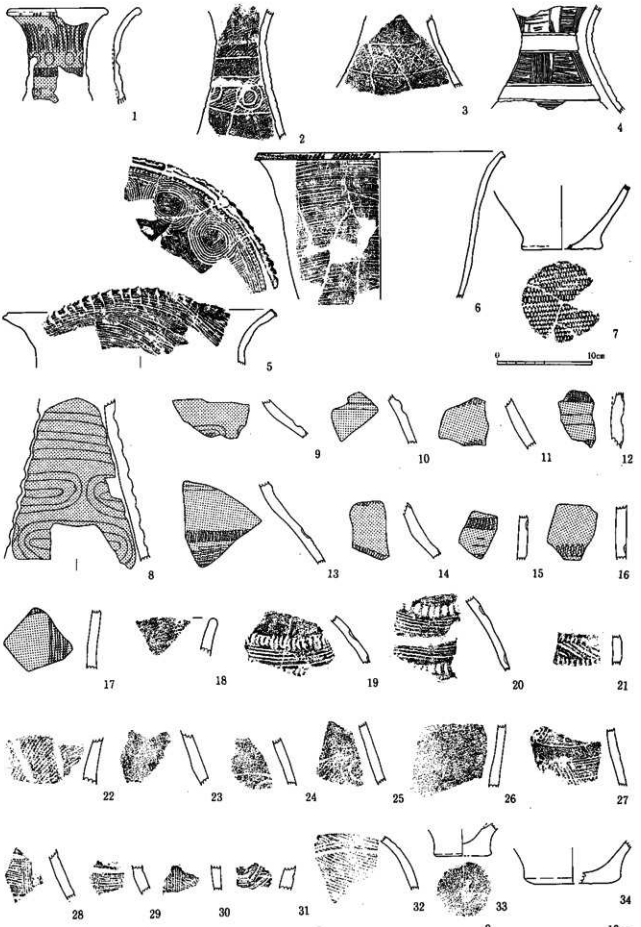
図版42　周辺ピット図6



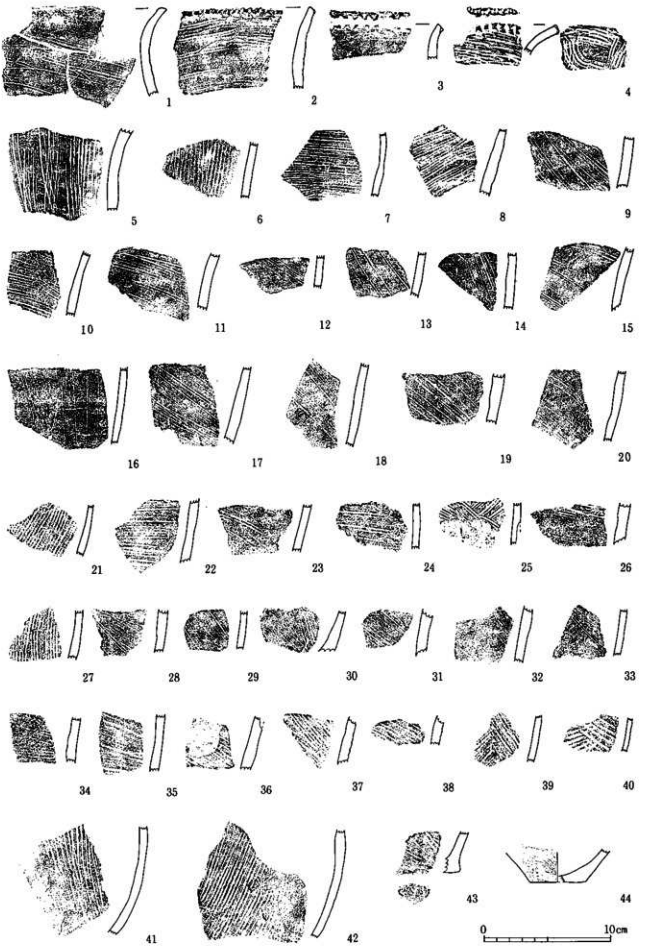
図版43　周辺ピット図7



図版44　周辺ピット図8

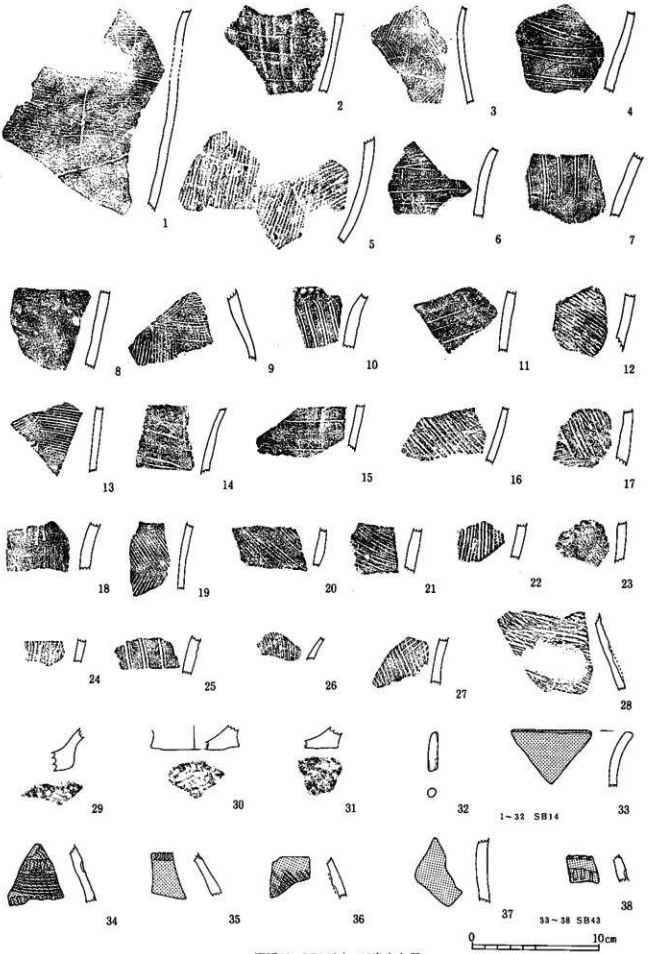


図版45　SB06出土土器(1)

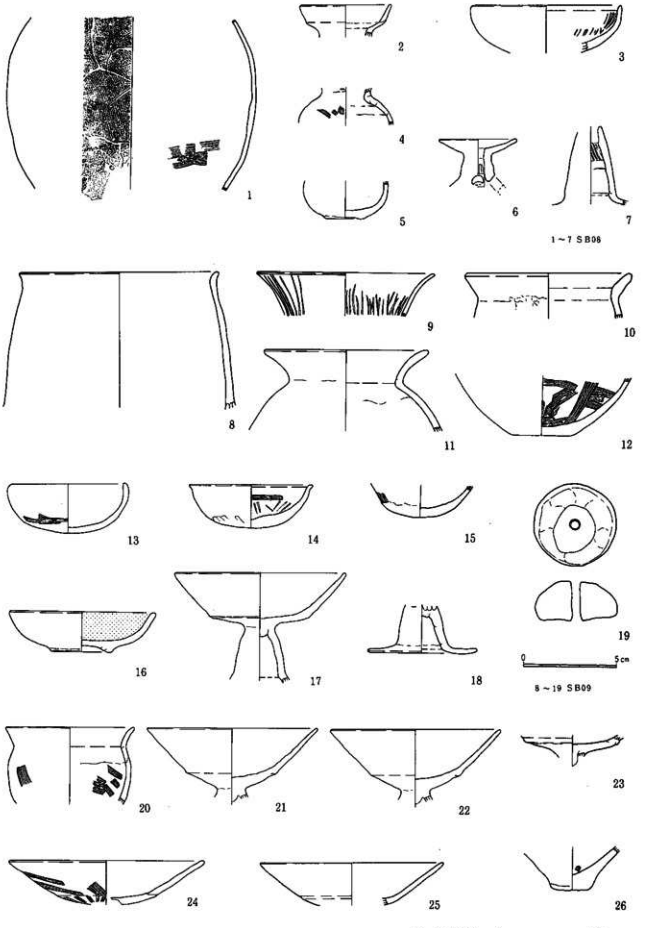


図版46　SB06出土土器(2)

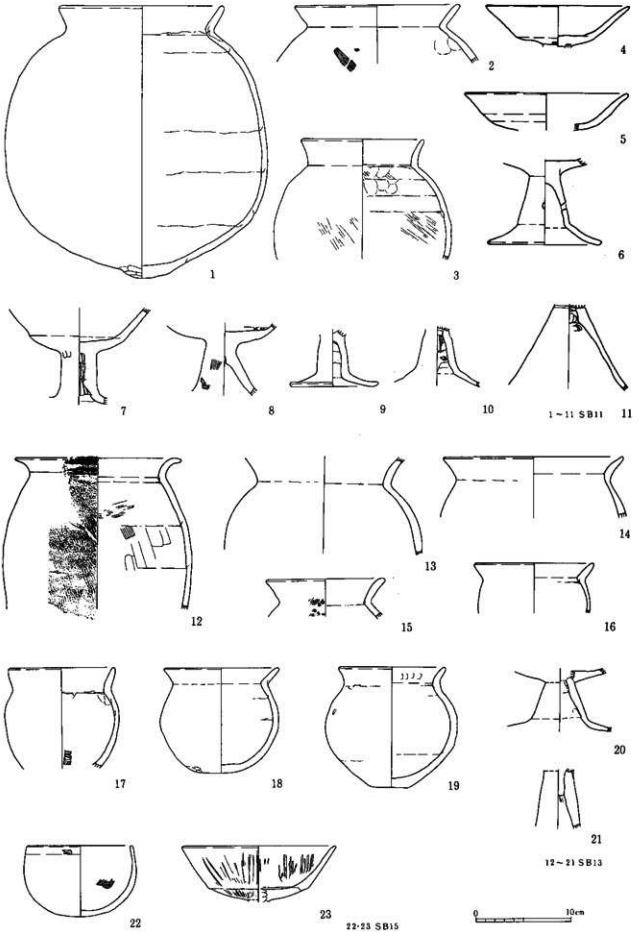
図版47　SB14出土土器(1)



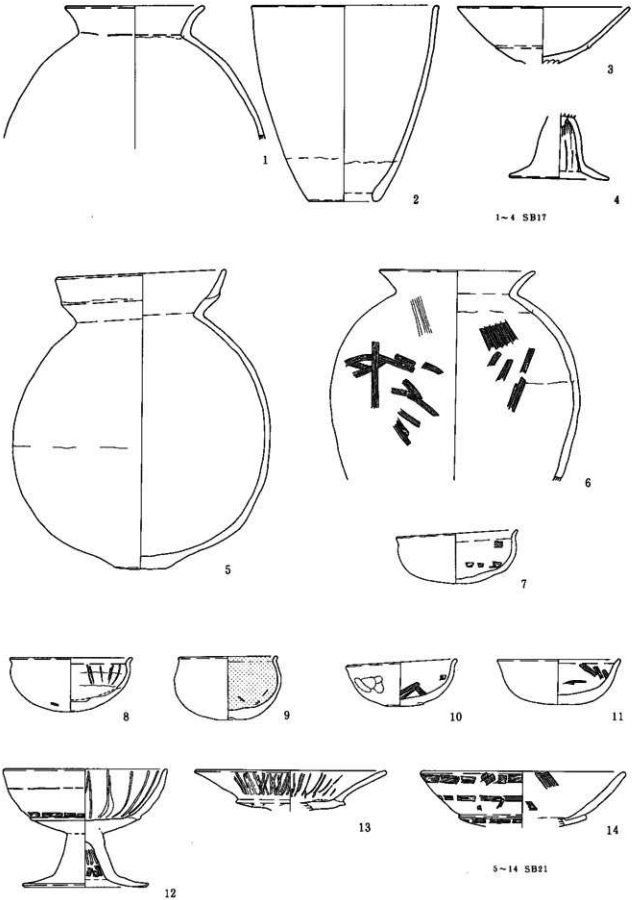
図版48　SB14(2)・43出土土器



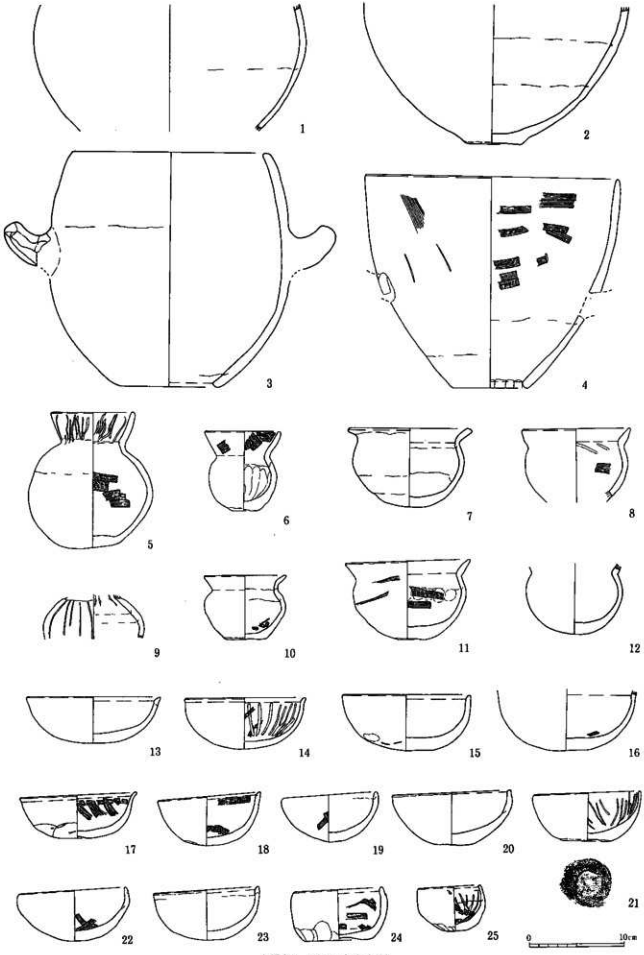
図版49　SB08～10出土土器



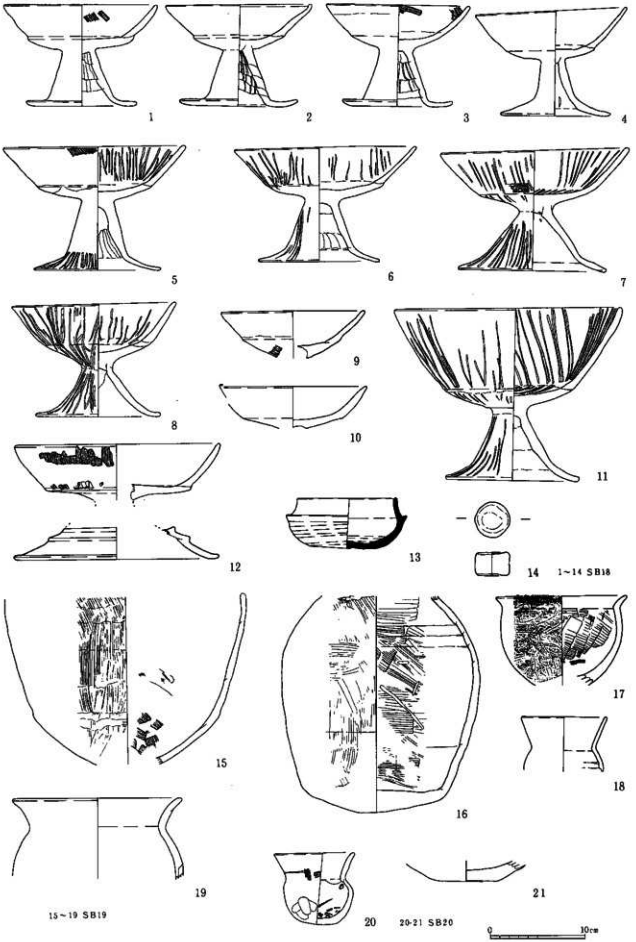
図版50　SB11・13・15出土土器



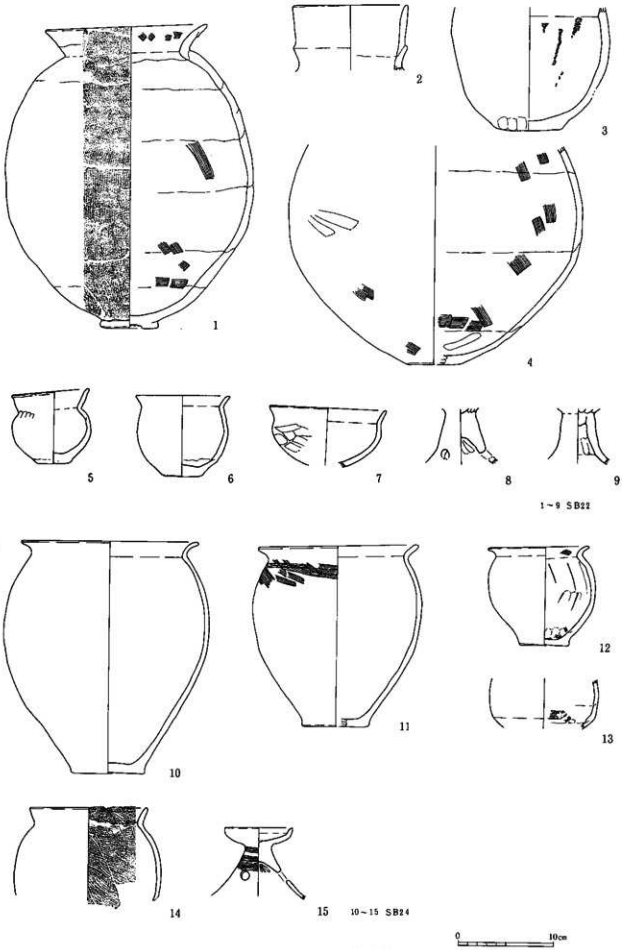
図版51 SB17・21出土土器



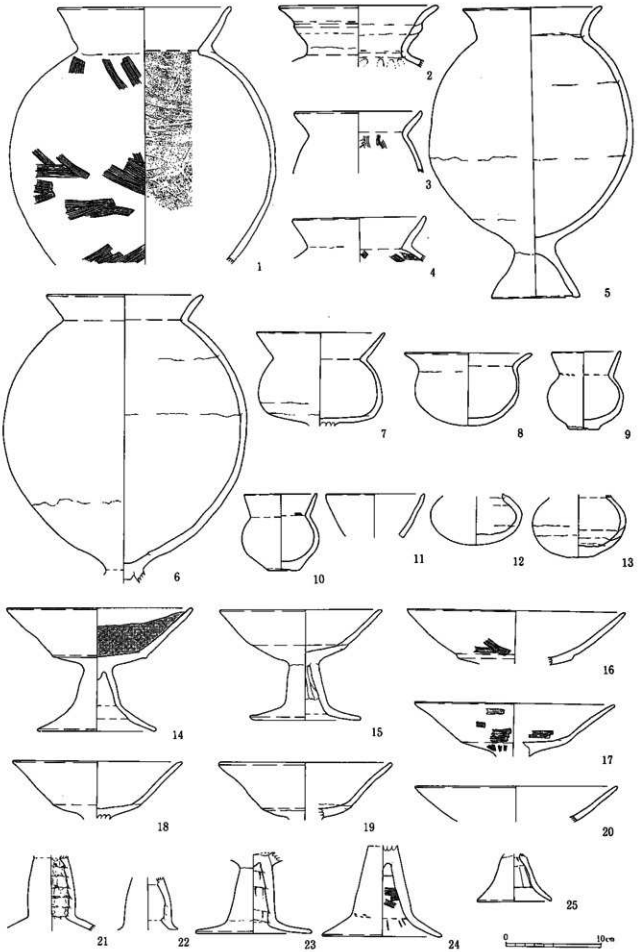
図版52　SB18出土土器



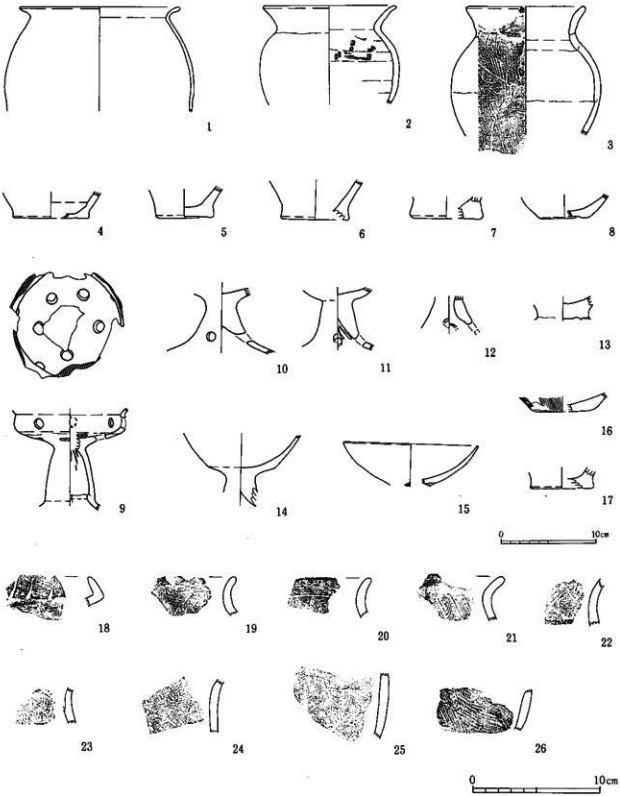
図版53　SB18・19・20出土土器



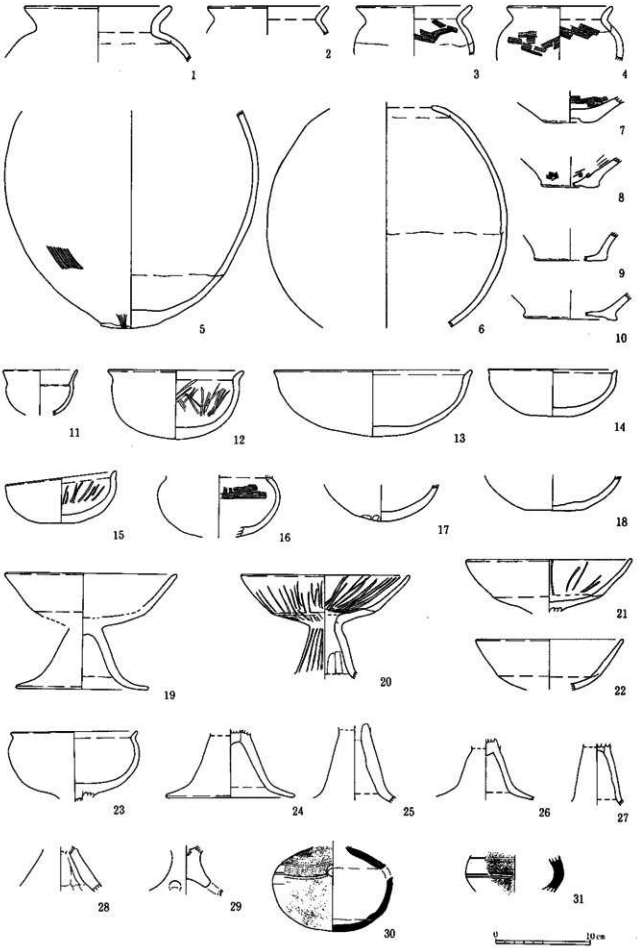
図版54　SB22・24出土土器



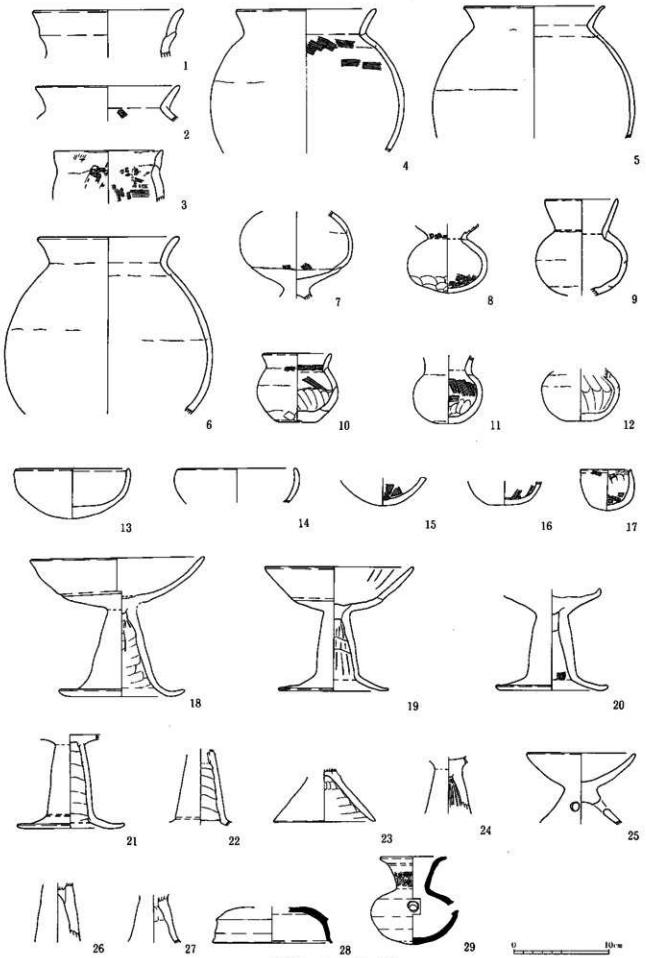
図版55　SB25出土土器



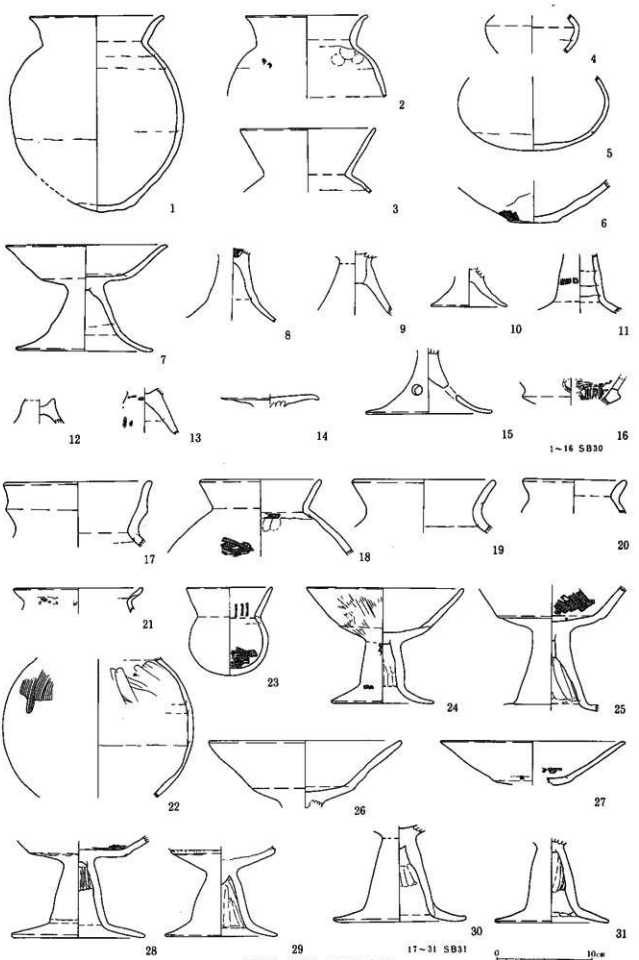
図版56　SB26出土土器



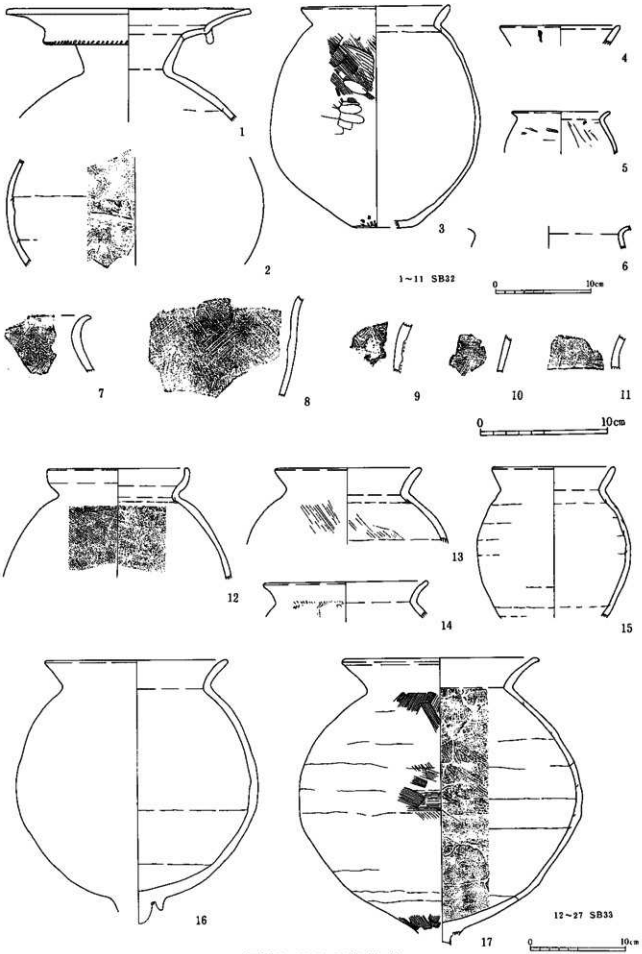
図版57　SB27出土土器



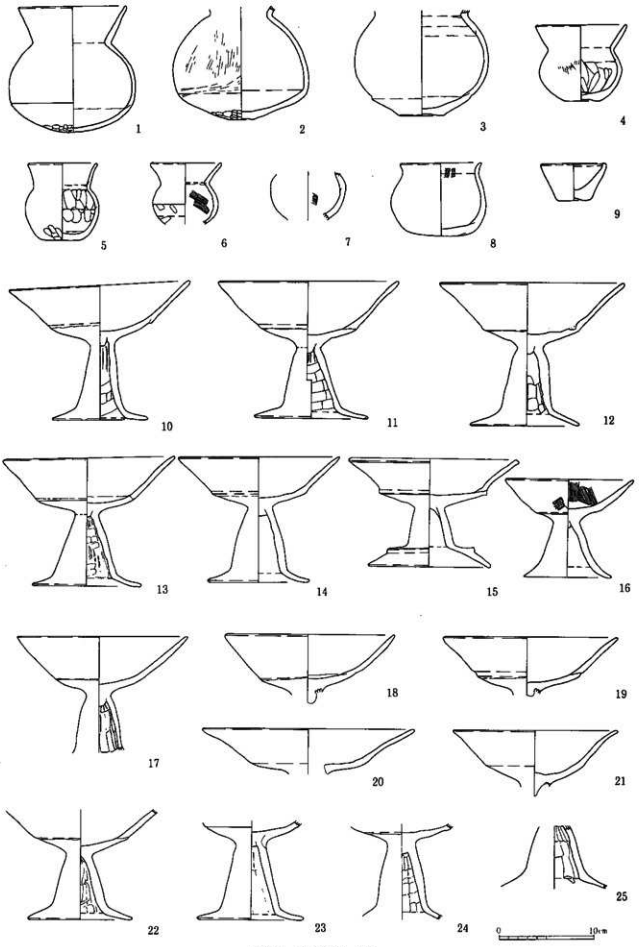
図版58　SB29出土土器



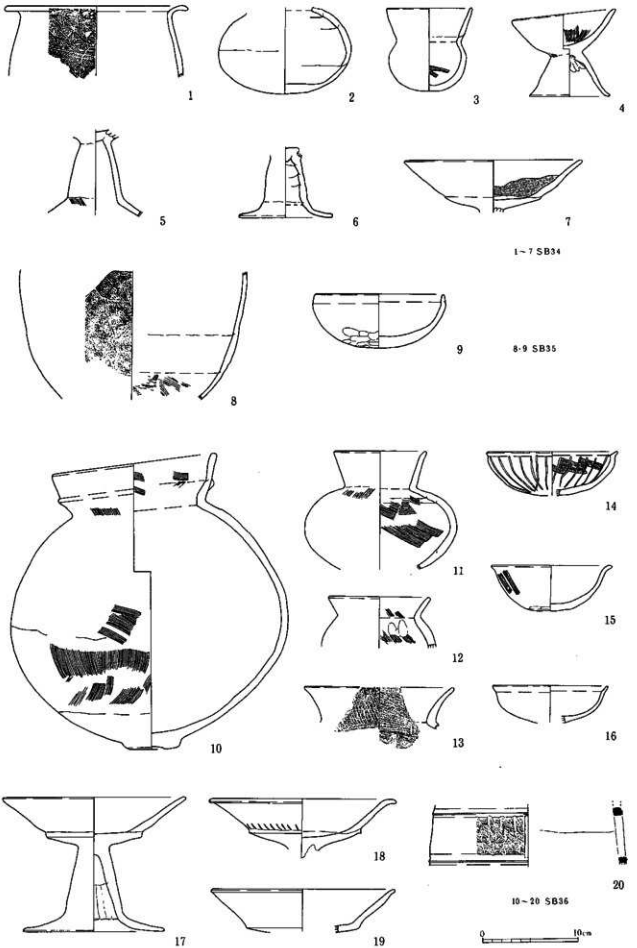
図版59　SB30・31出土土器



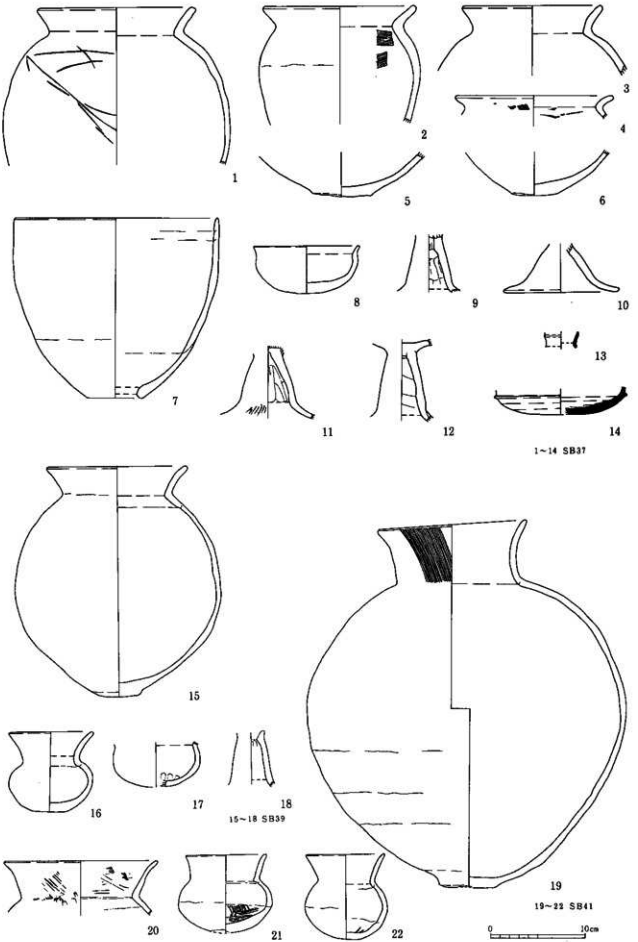
図版60　SB32・33出土土器



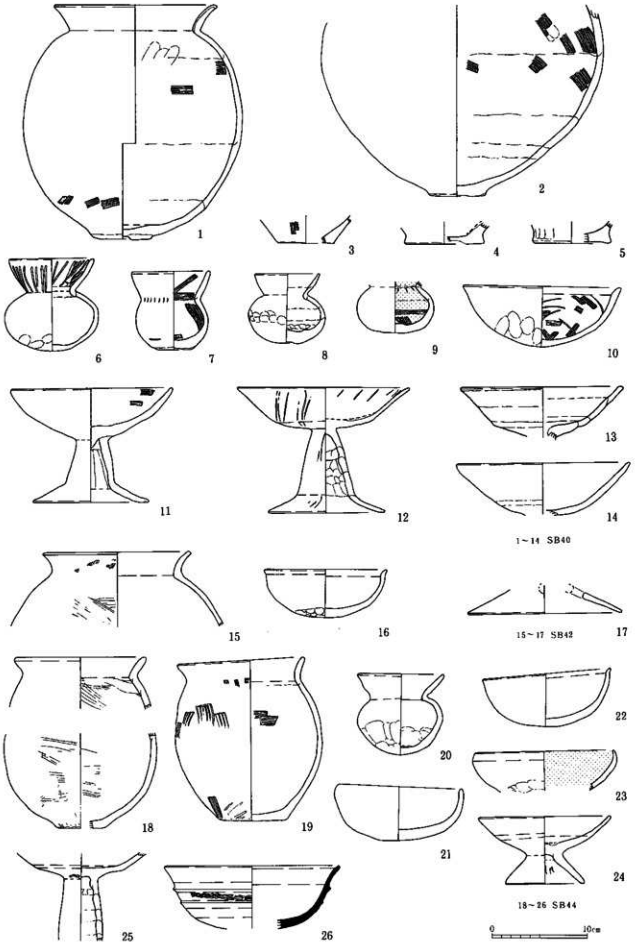
図版61　SB33出土土器



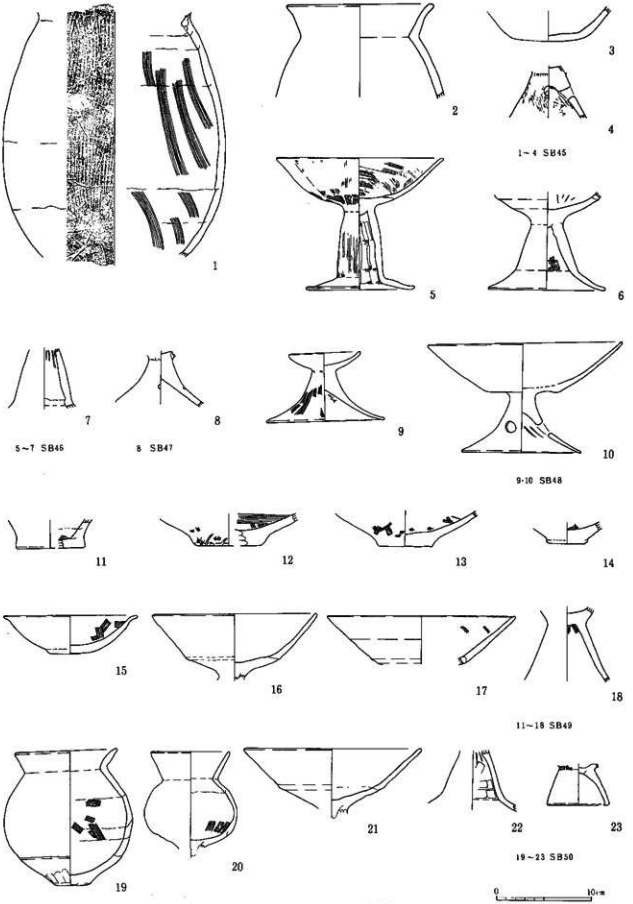
図版62　SB34～36出土土器



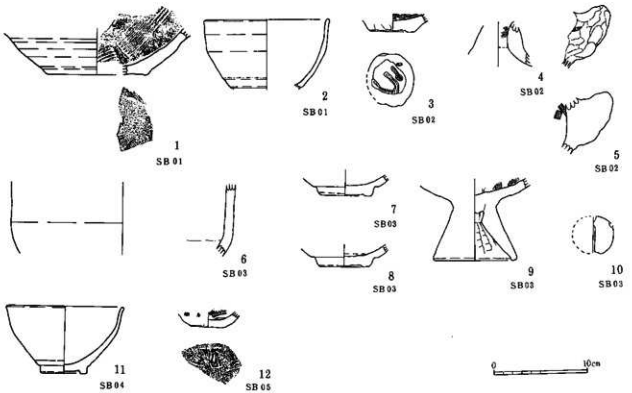
図版63　SB37・39・41出土土器



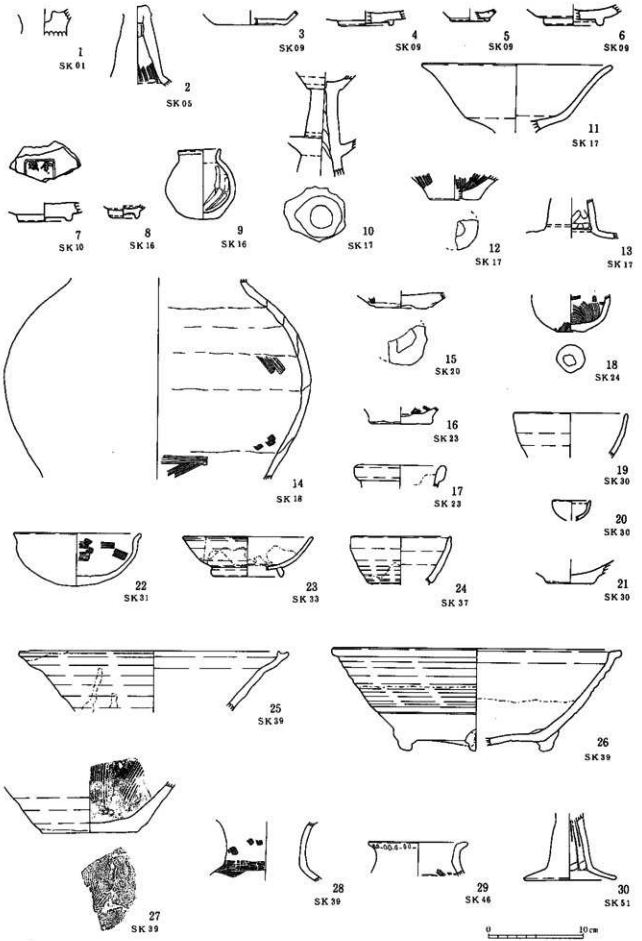
図版64　SB40・42・44出土土器



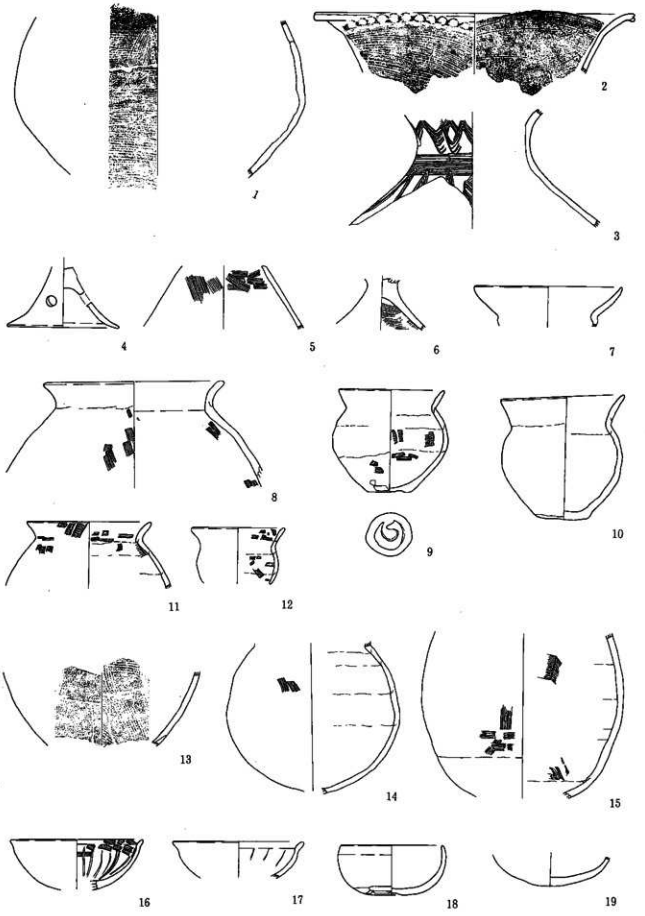
図版65　SB45～50出土土器



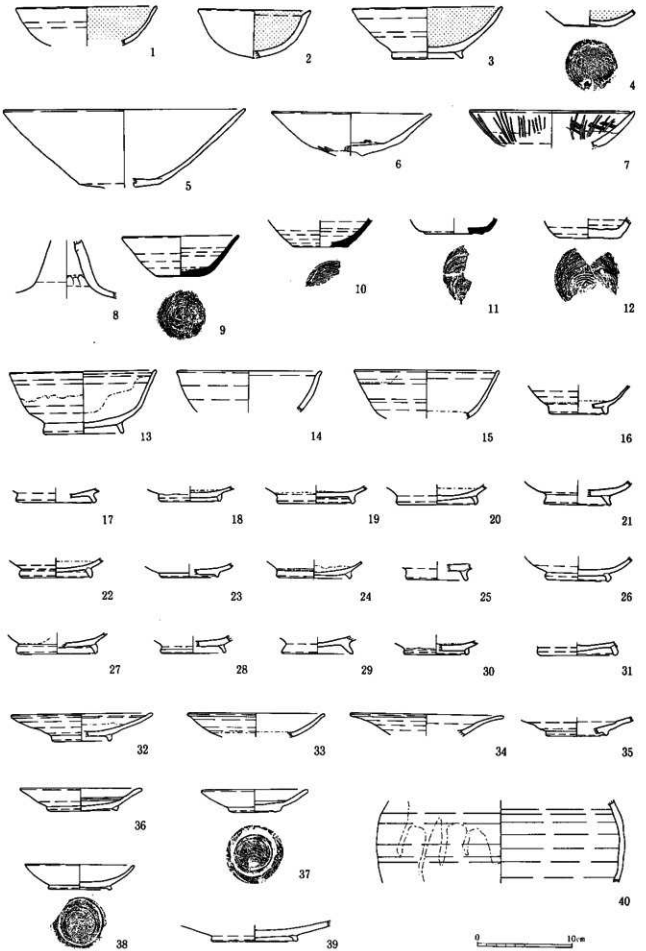
図版66　SB01～05出土土器


1
SK 01
2
SK 05
3
SK 09
4
SK 09
5
SK 09
6
SK 09
7
SK 10
8
SK 16
9
SK 16
10
SK 17
11
SK 17
12
SK 17
13
SK 17
14
SK 18
15
SK 20
16
SK 23
17
SK 23
18
SK 24
19
SK 30
20
SK 30
21
SK 30
22
SK 31
23
SK 33
24
SK 37
25
SK 39
26
SK 39
27
SK 39
28
SK 39
29
SK 46
30
SK 51
0
10cm

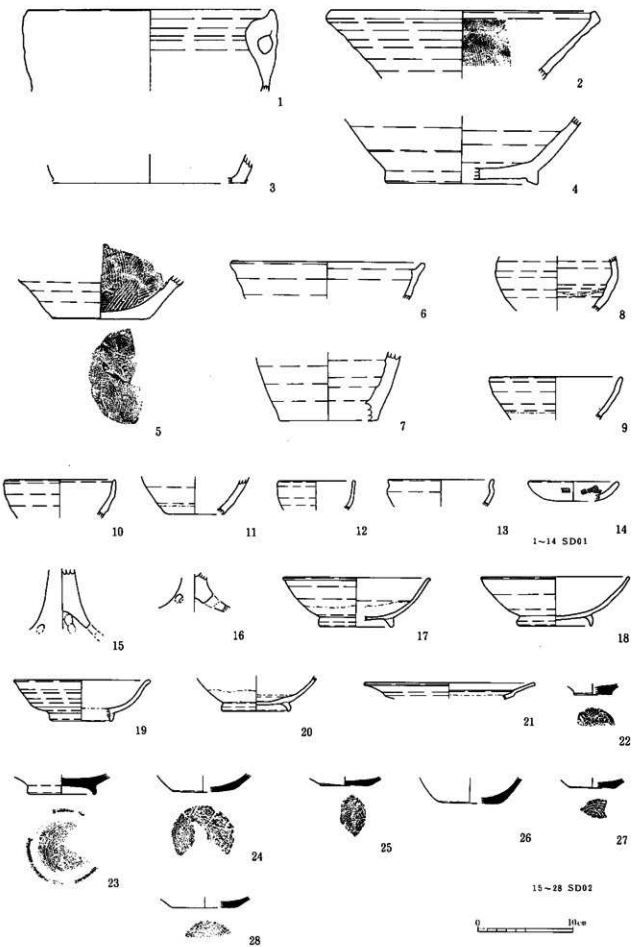
図版67　SK出土土器



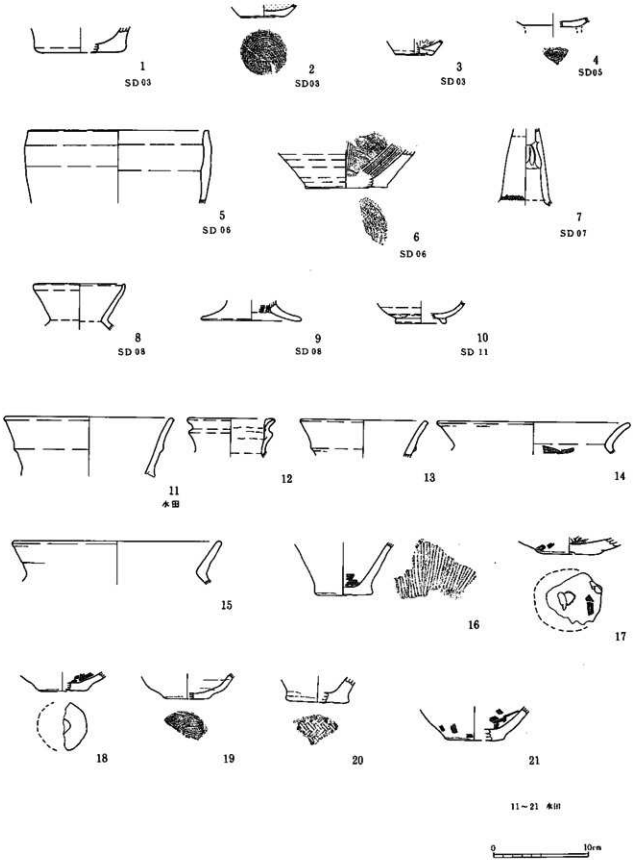
図版68　SD01出土土器(1)



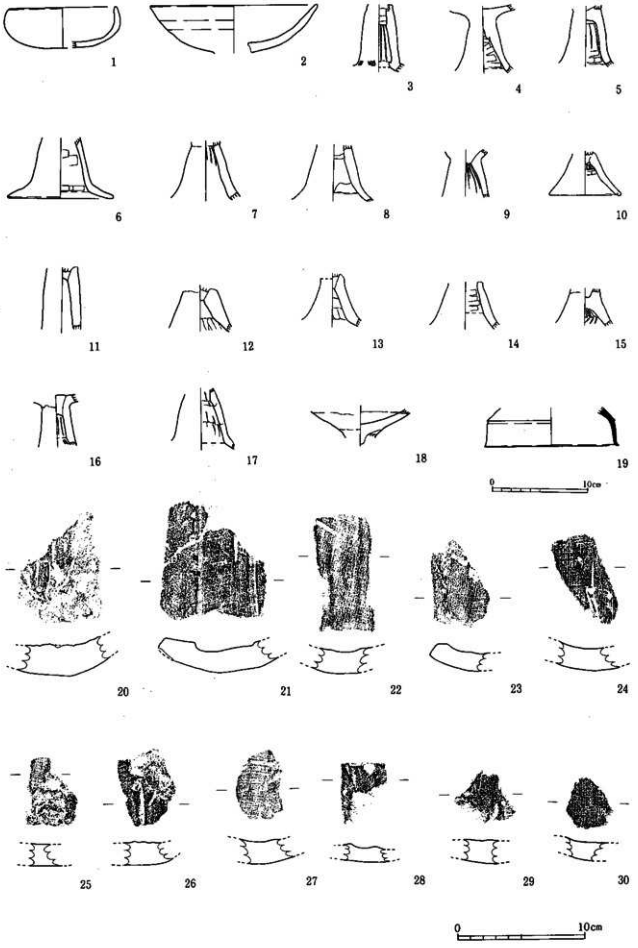
図版69　SD01出土土器(2)



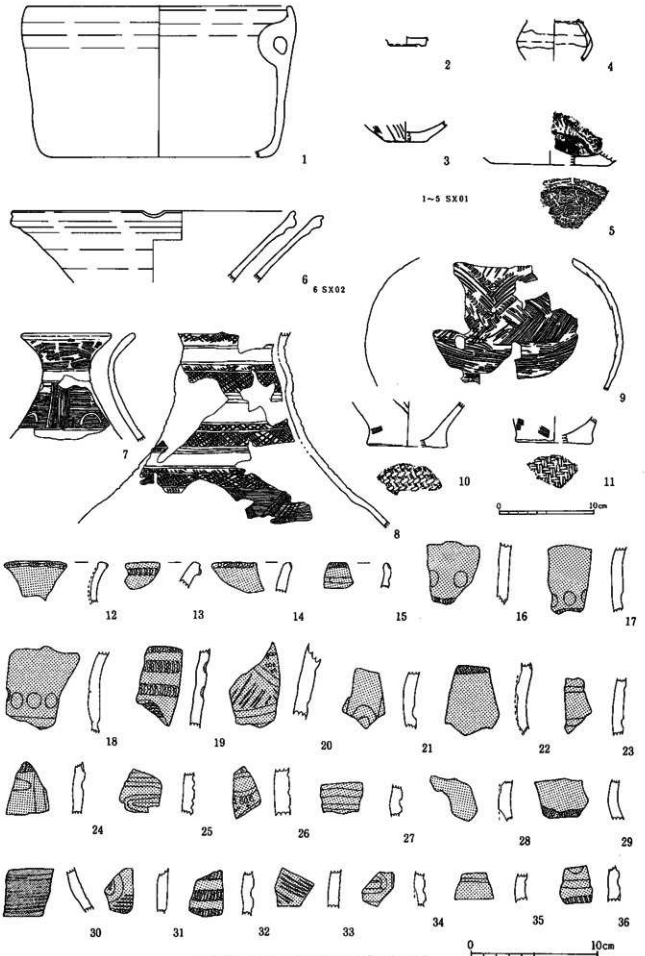
図版70　SD01(3)・02出土土器



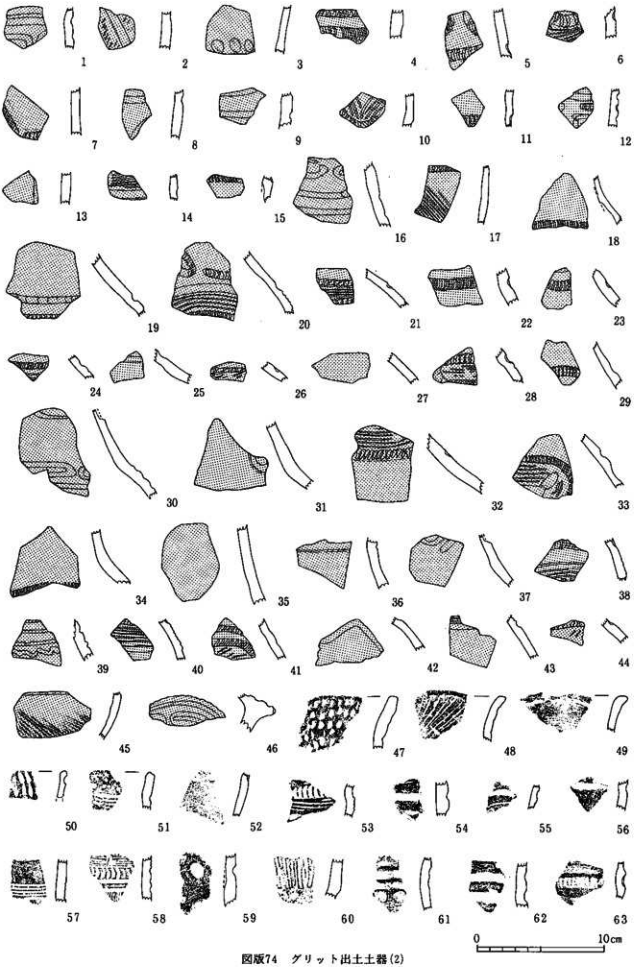
図版71 SD・水田出土土器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
0
10cm
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
0
10cm

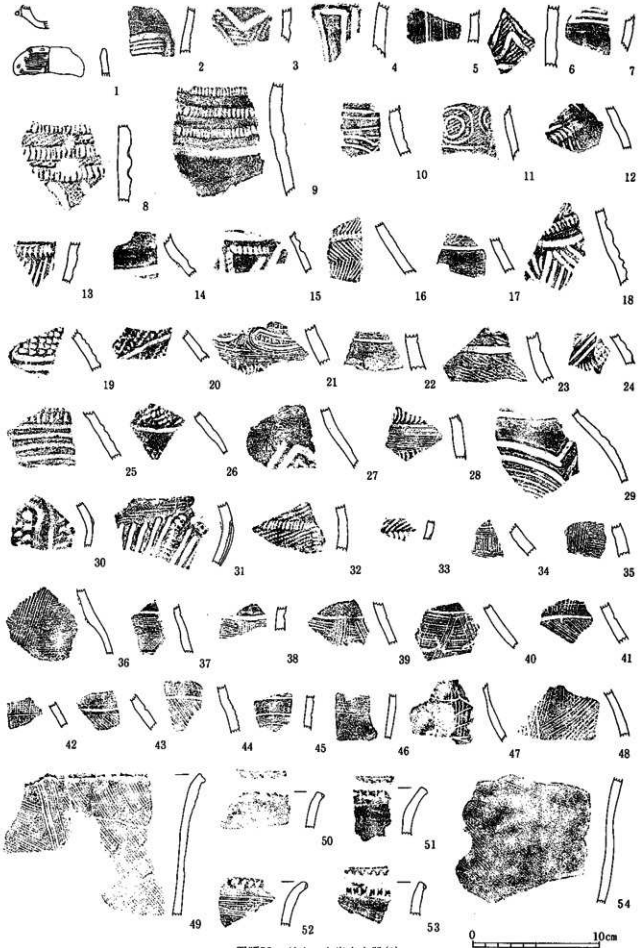
図版72　水田出土遺物



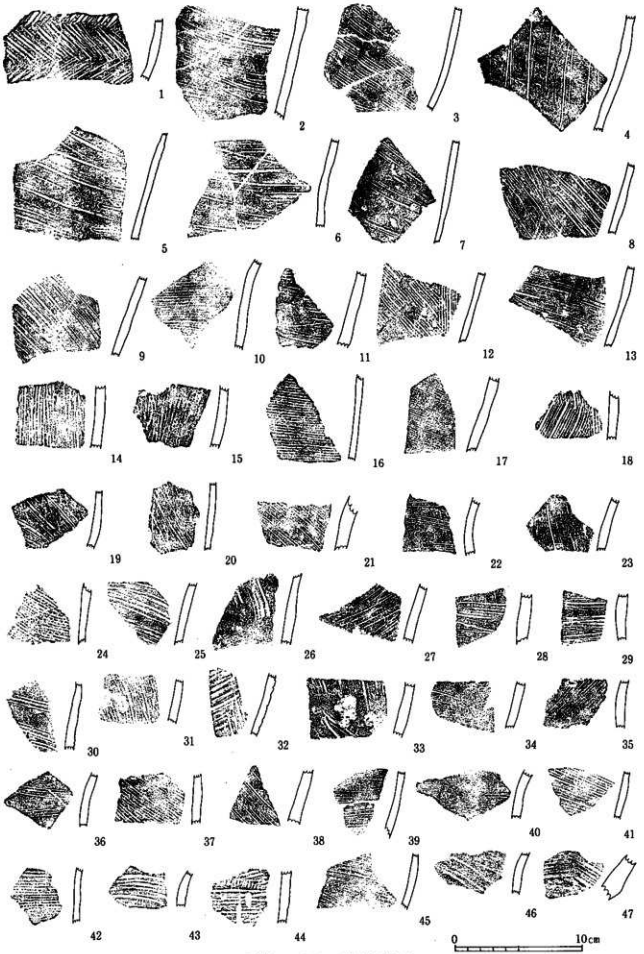
図版73　SX01・02・グリット出土土器(1)



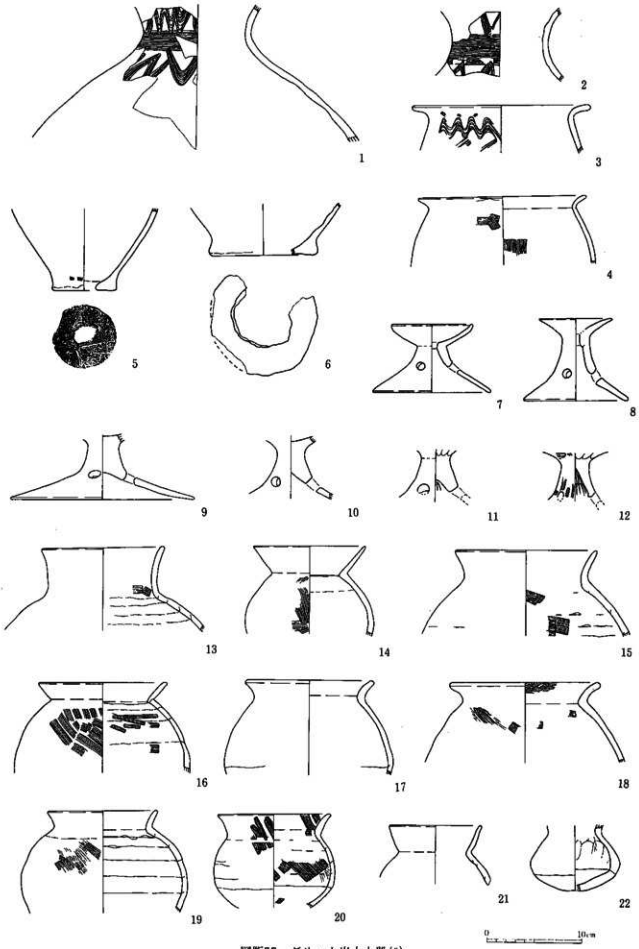
図版74　グリット出土土器(2)



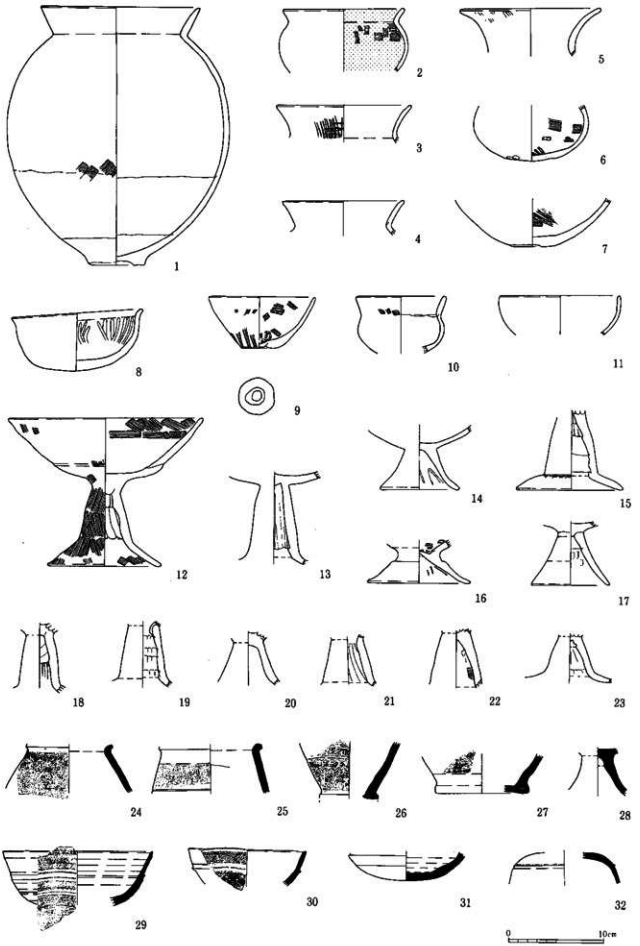
図版75　グリット出土土器(3)



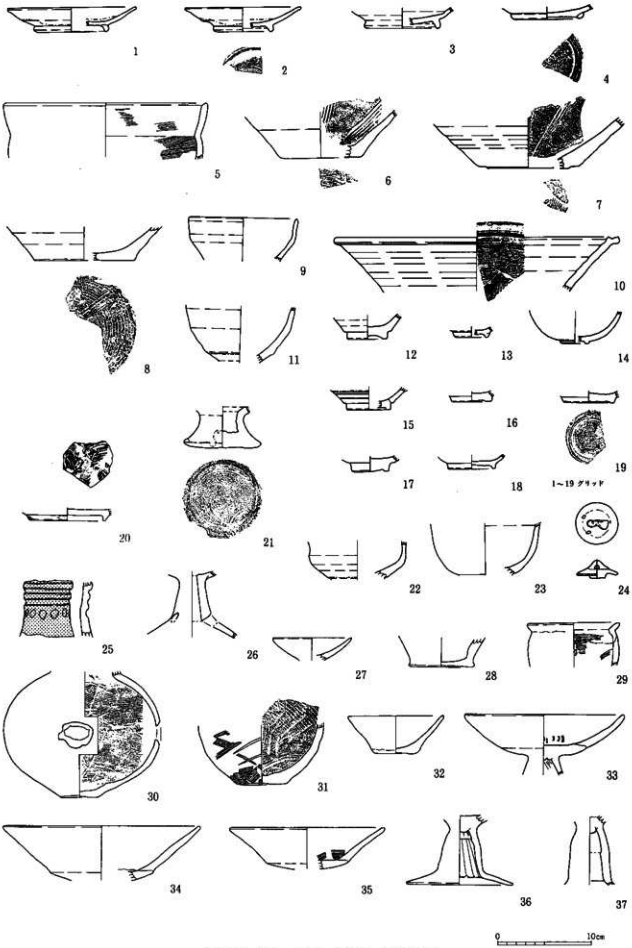
図版76　グリット出土土器(4)



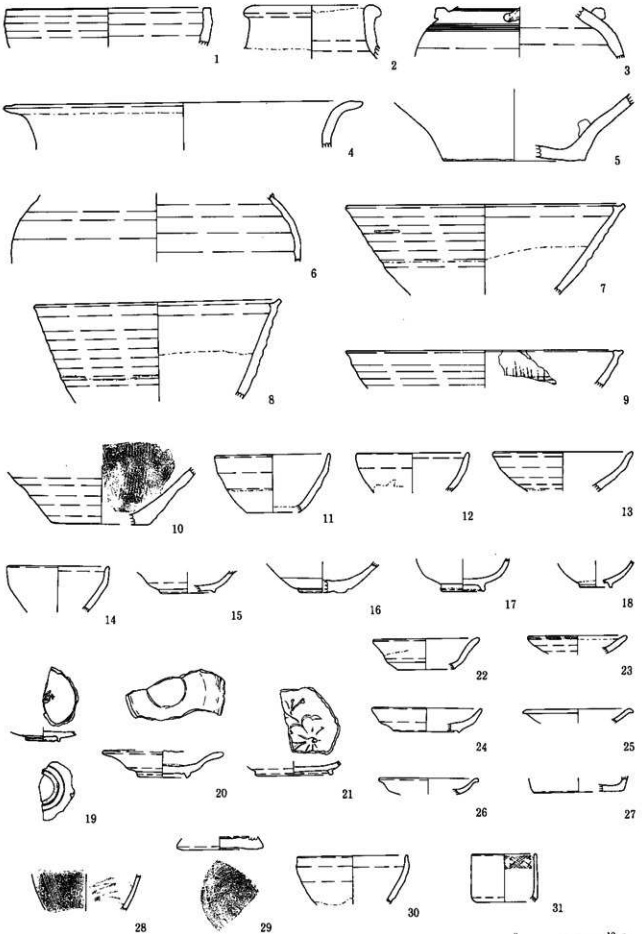
図版77　グリット出土土器(5)



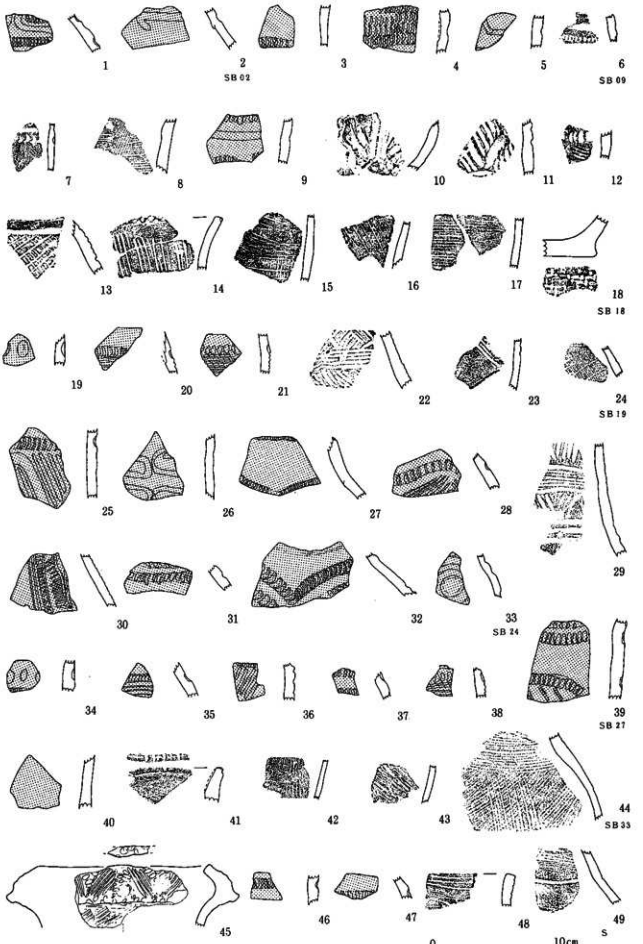
図版78　グリット出土土器(6)



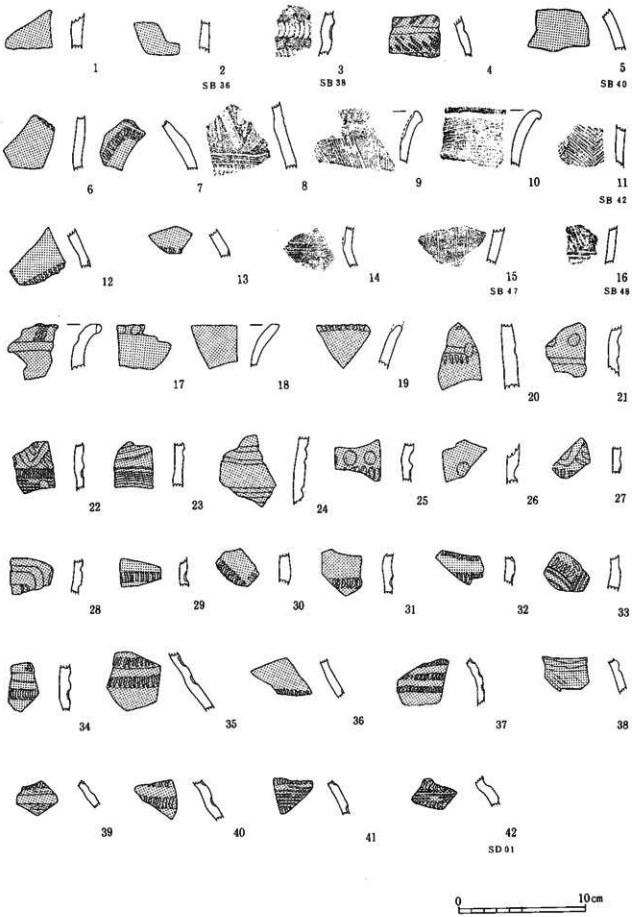
図版79　グリット出土土器(7)・遺構外(1)



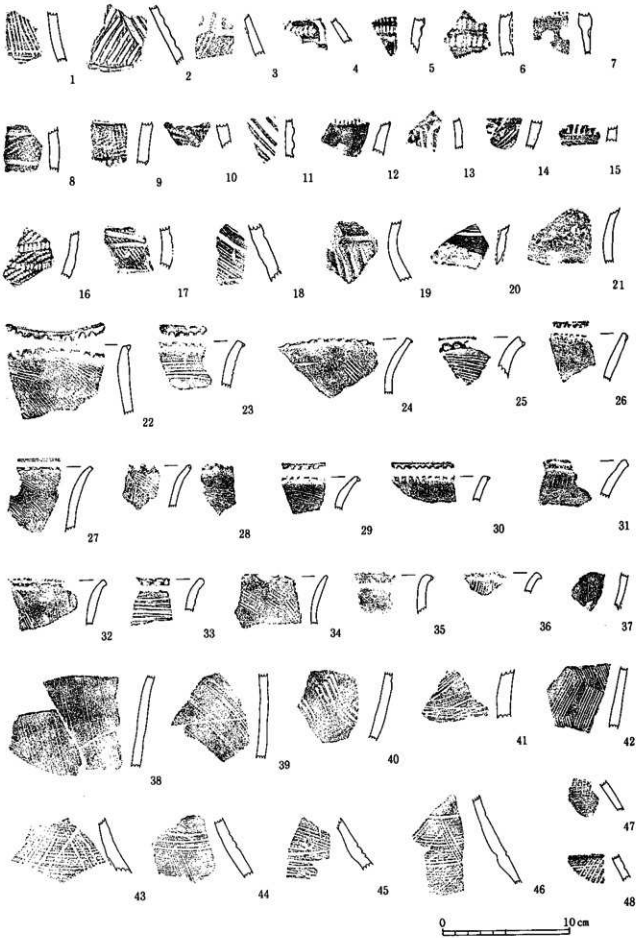
図版80　遺構外出土土器(2)



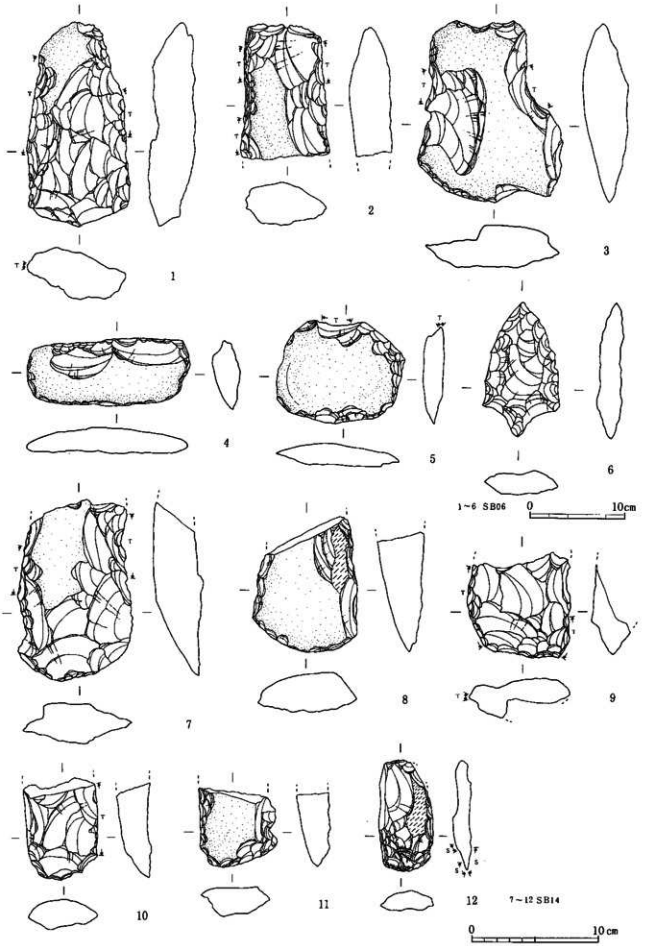
図版81　遺構覆土出土弥生中期土器(1)



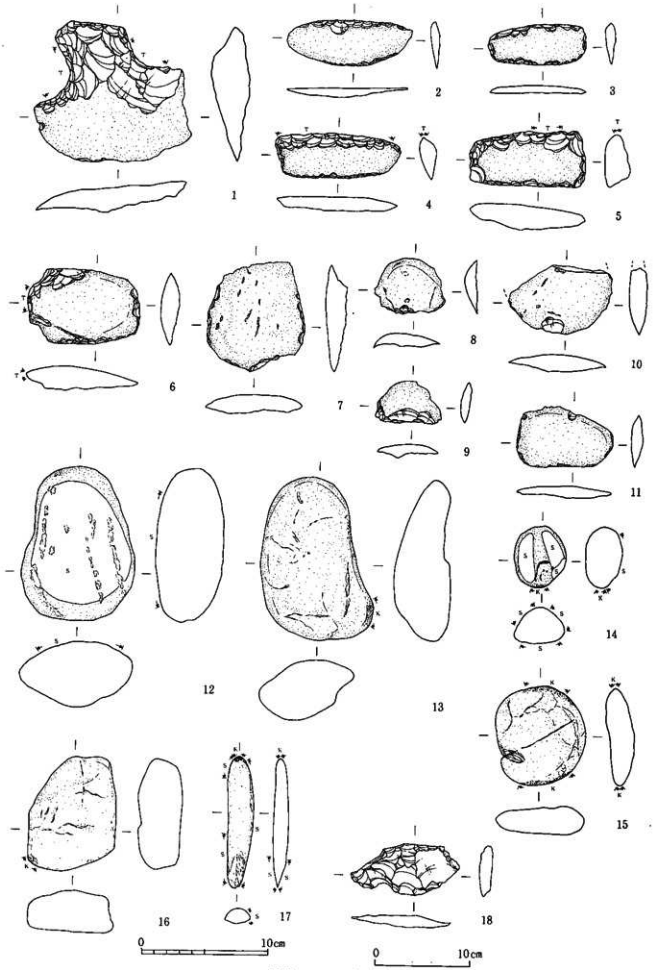
図版82　遺構覆土出土弥生中期土器(2)



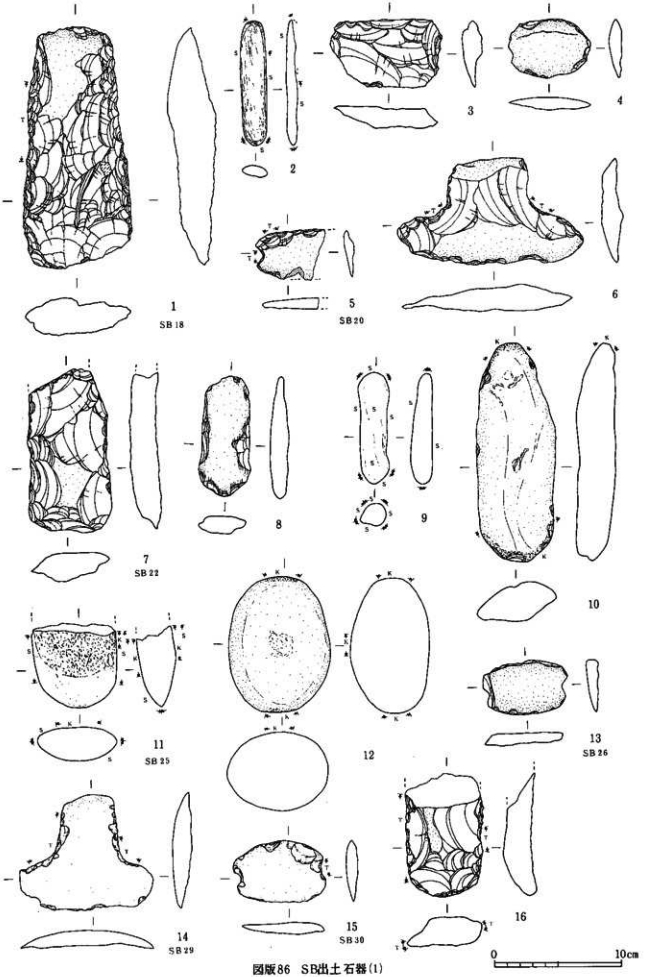
図版83　遺構覆土出土弥生中期土器(3)



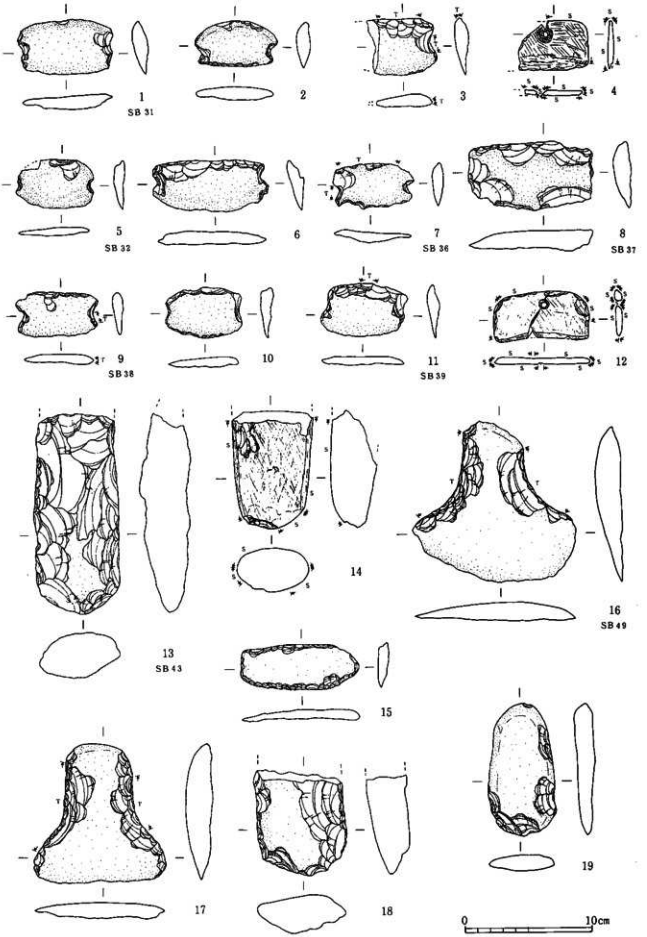
図版84　SB06・14出土石器



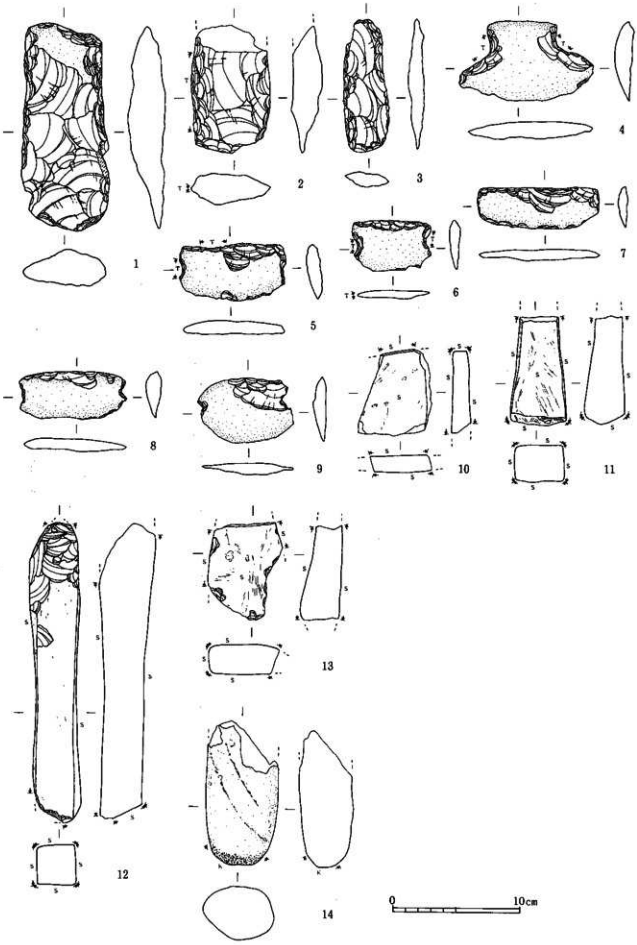
図版85　SB14出土石器



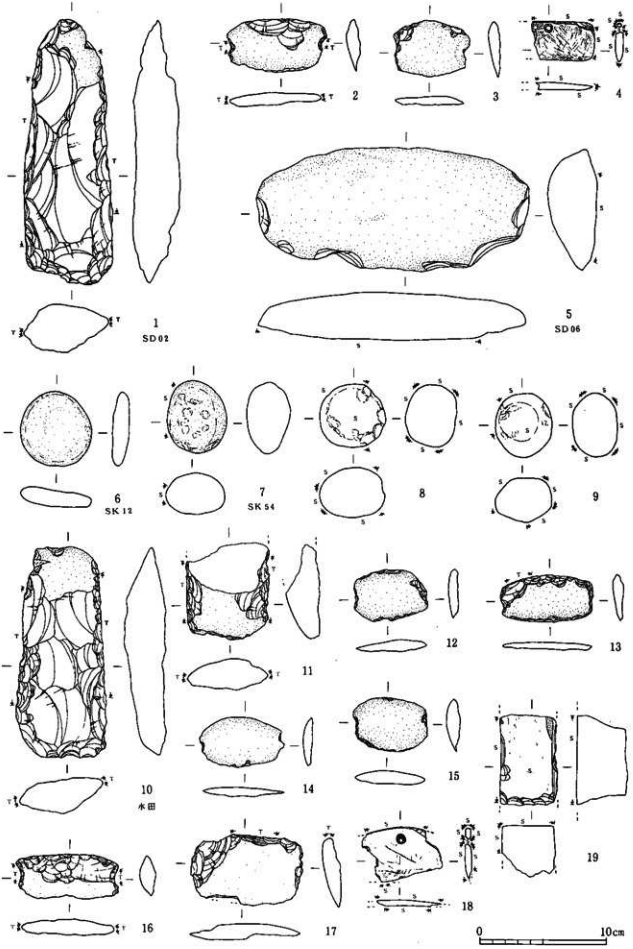
図版86　SB出土石器(1)



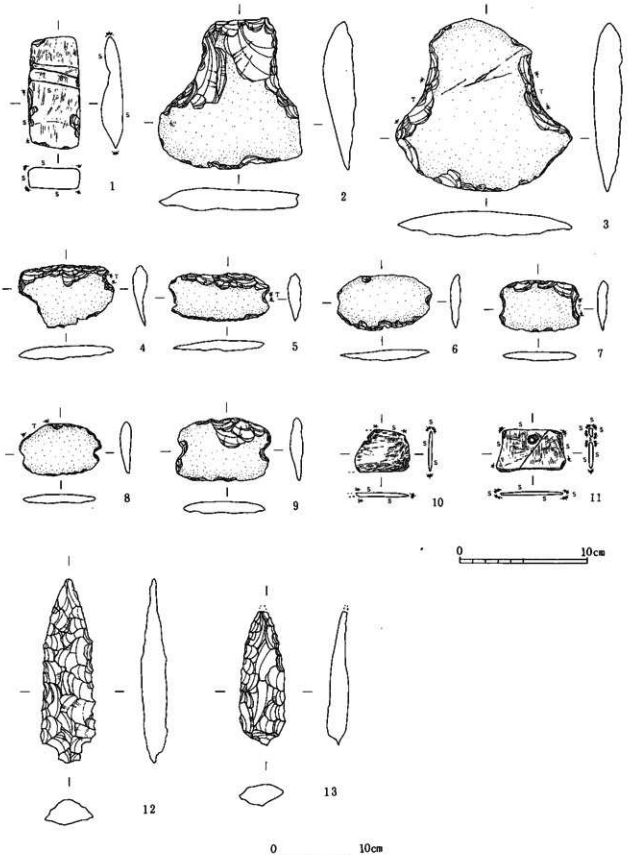
図版87　SB出土石器(2)



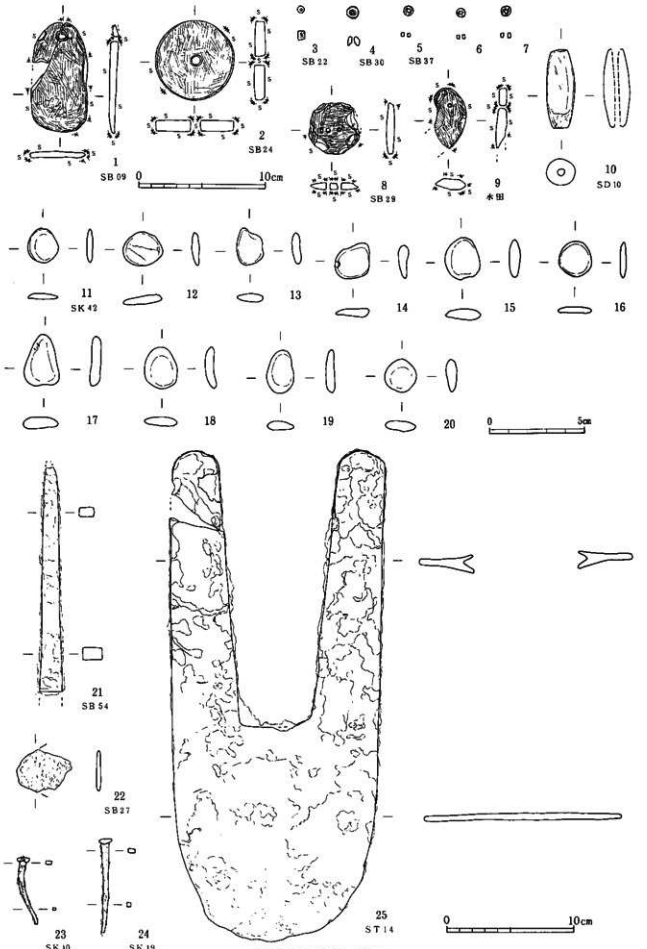
図版88　SD出土石器



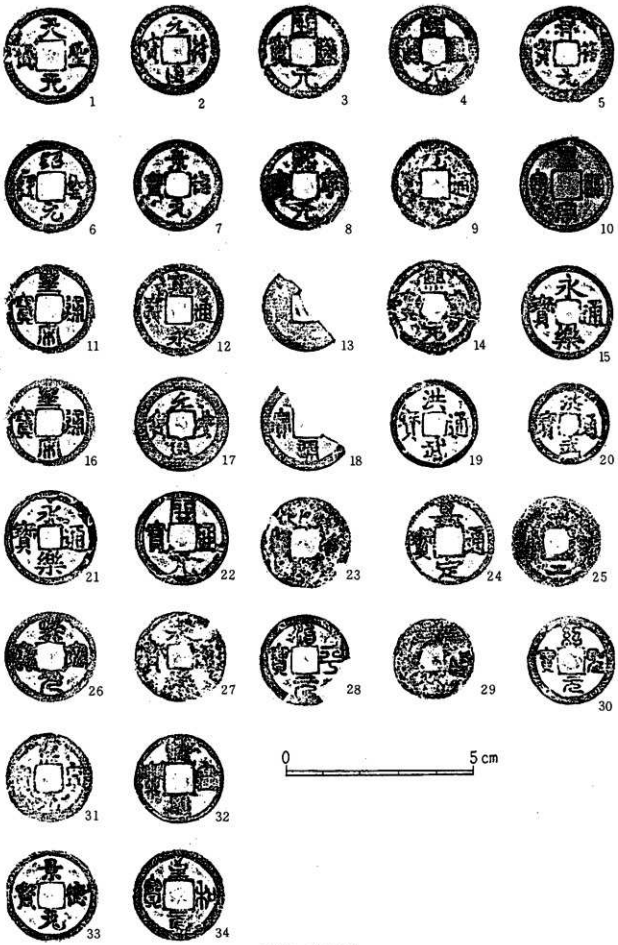
図版89 SD・SK・水田址出土石器



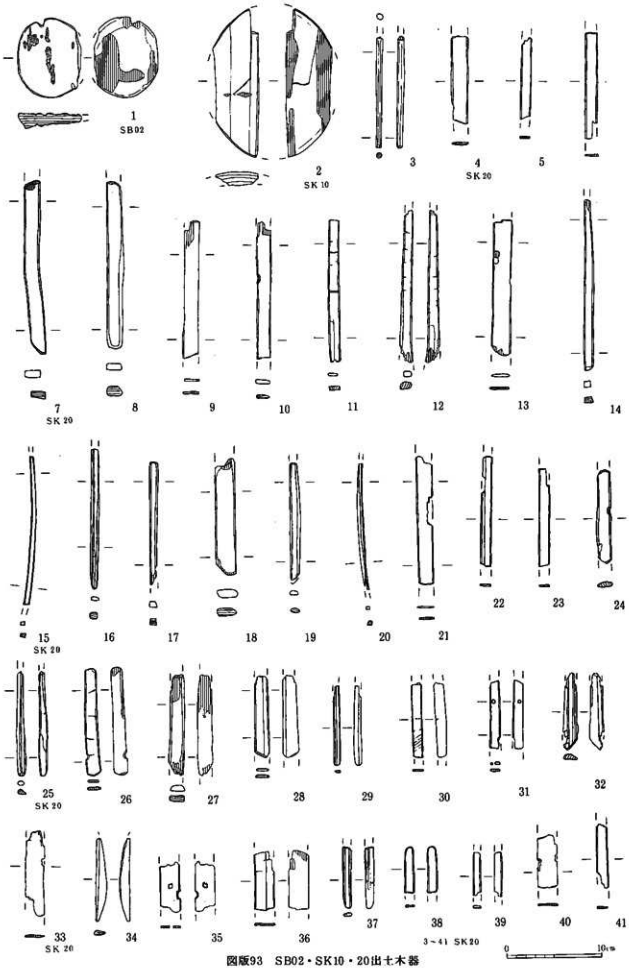
図版90　グリット出土石器


1
SB 09
2
SB 24
3
SB 22
4
SB 30
5
SB 37
6
7
8
SB 29
9
水田
10
SD 10
11
SK 42
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
SB 54
22
SB 27
23
SK 10
24
SK 19
25
ST 14
0
10cm
0
5cm
0
10cm

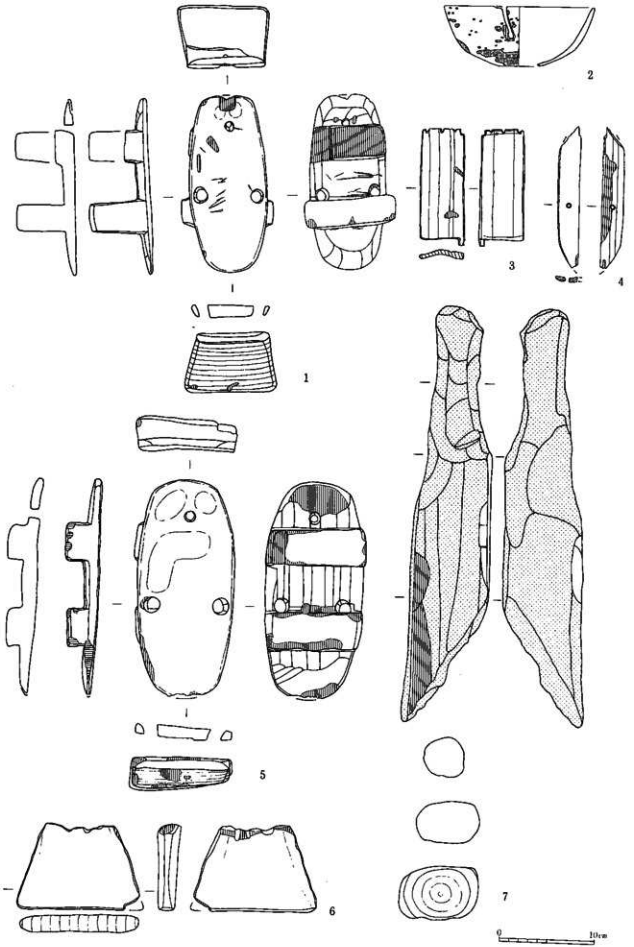
図版91　石製品・鉄器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
0
5 cm

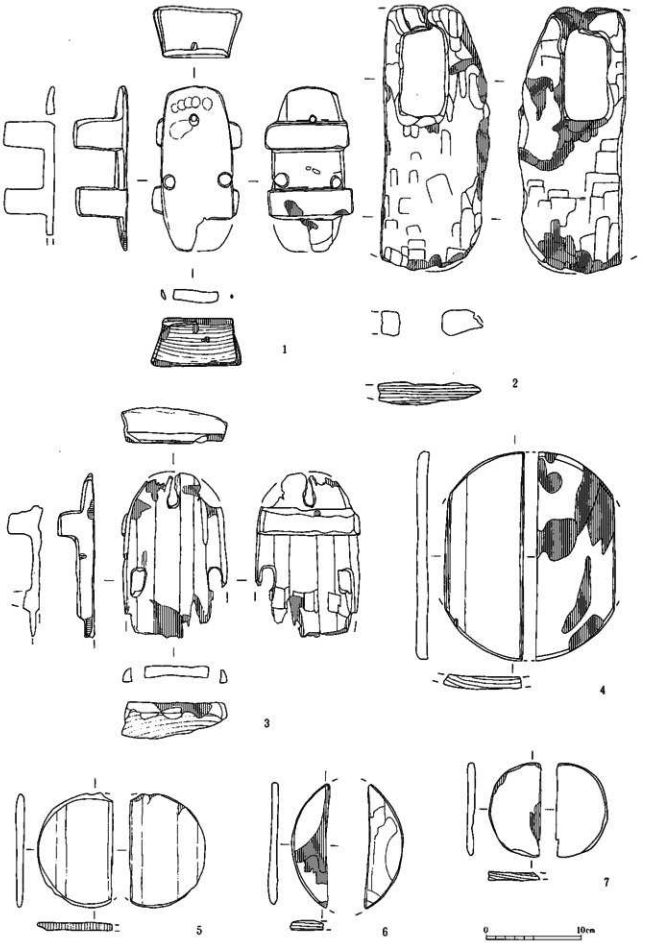
図版92　出土銭貨



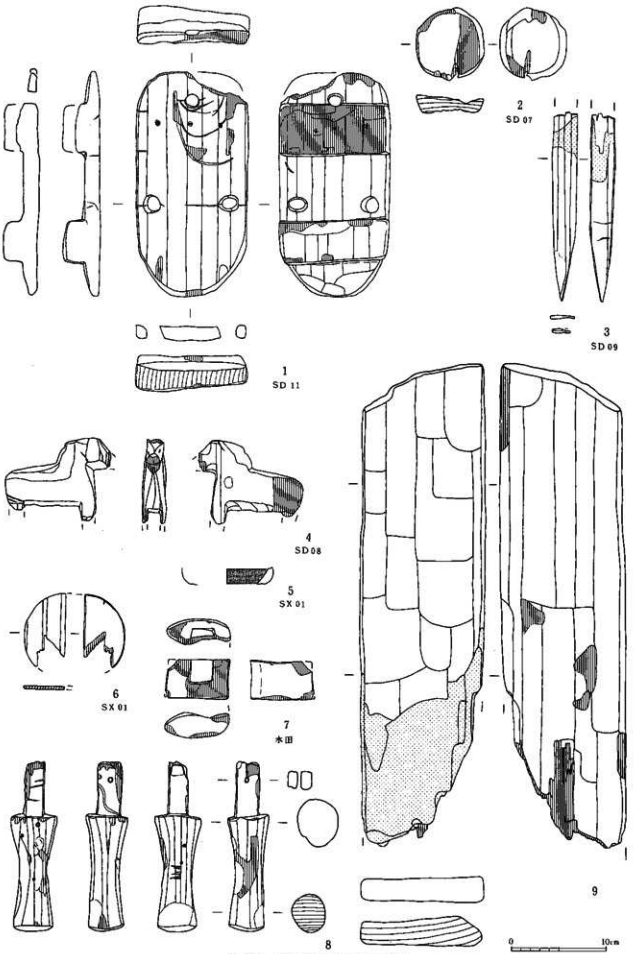
図版93　SB02・SK10・20出土木器



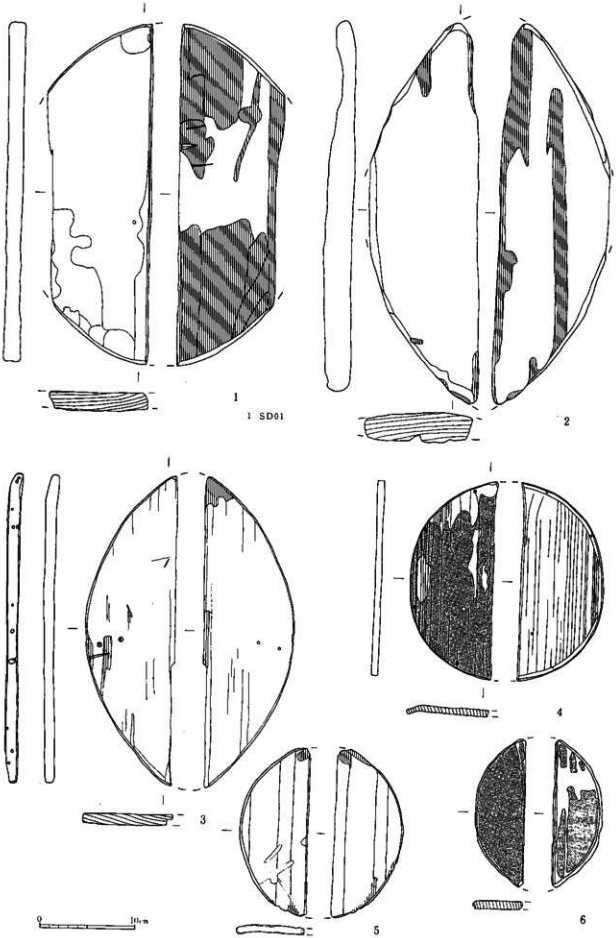
図版94　SD01出土木器



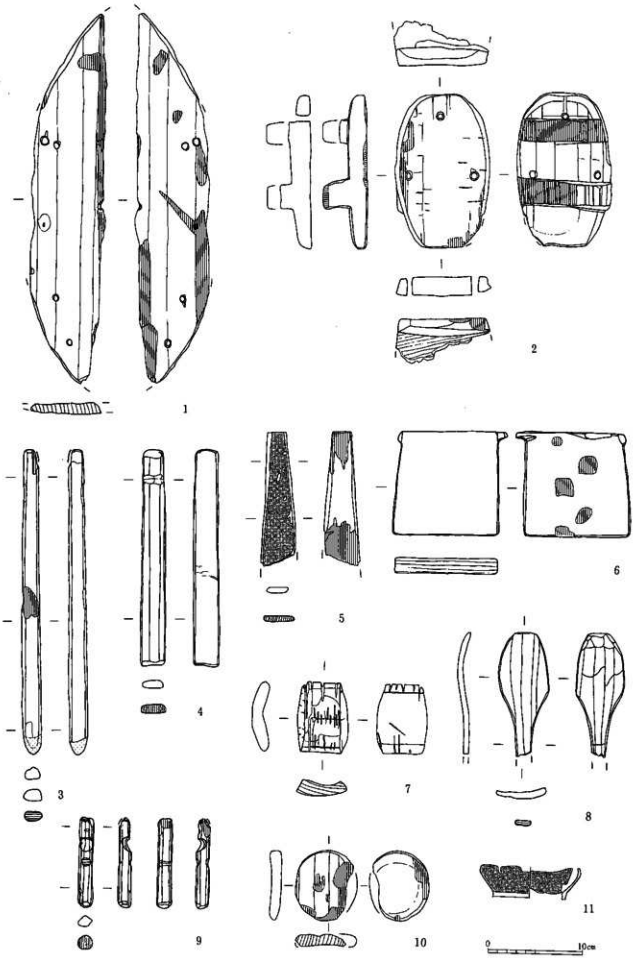
図版95　SD01出土木器



図版96　SD・SX・水田出土木器



図版97　SD01・遺構外出土木器



図版98　遺構外出土木器

写真図版

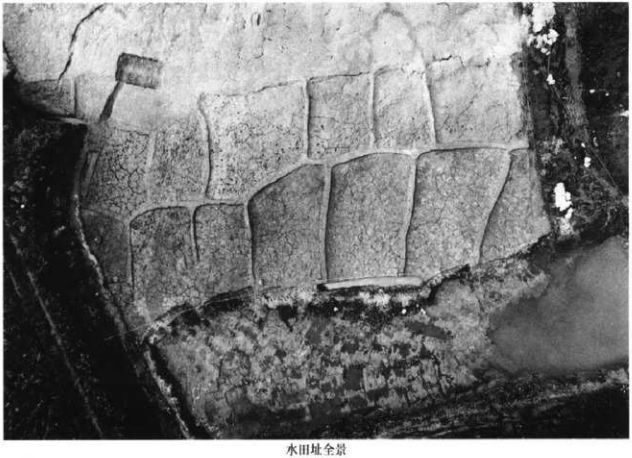
＊遺物写真中の数字は　図版番号－遺物番号　を示す。

遺跡遠景

遺跡近景

図版 2

中世道構全景

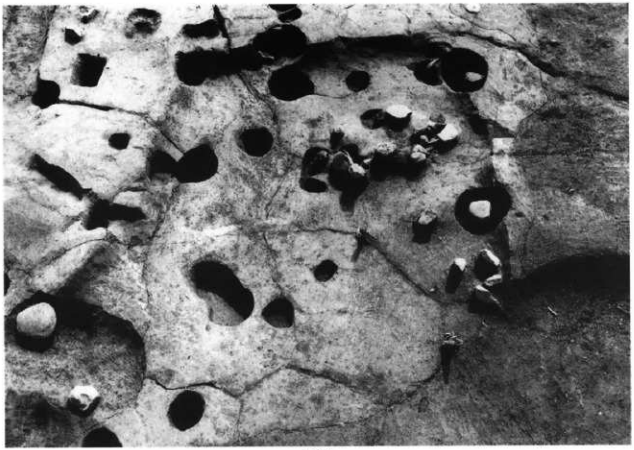


水田址全景

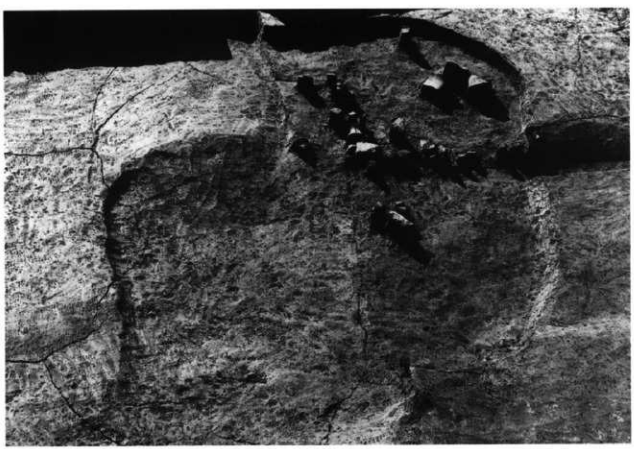
SB01

SB02

図版4

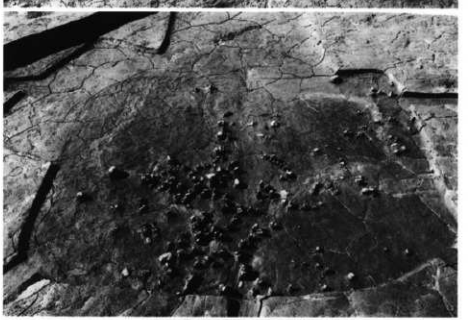


SB04



SB06

SB08



SB14

SB17

図版 6

SB18

SB18カマド

SB18遺物出土状況

SB19

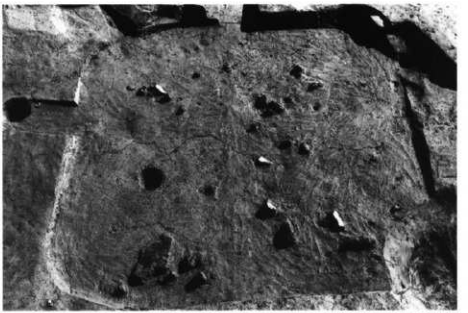
SB19カマド

図版 8

SB20

SB21

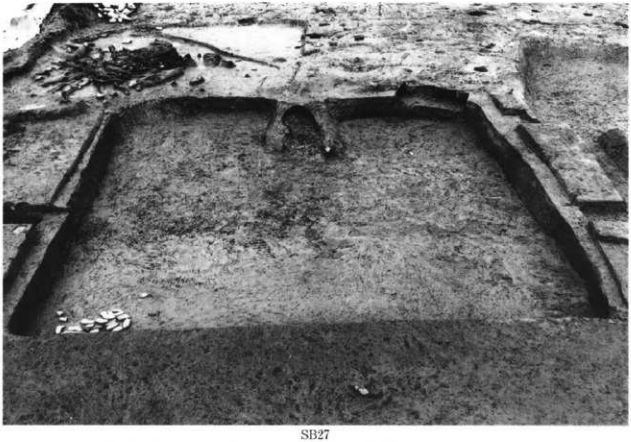
SB22



SB23

SB24

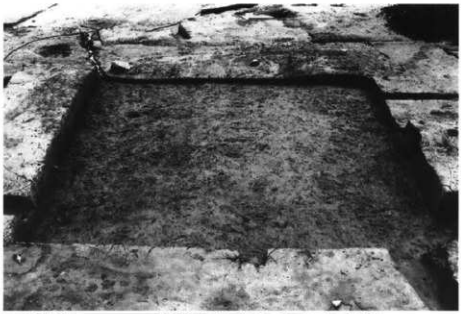
SB25



SB27

SB27カマド

SB27遺物出土状況



SB29

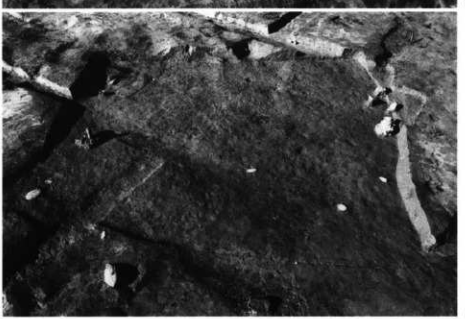
SB30

SB31

図版12

SB33

SB34



SB36

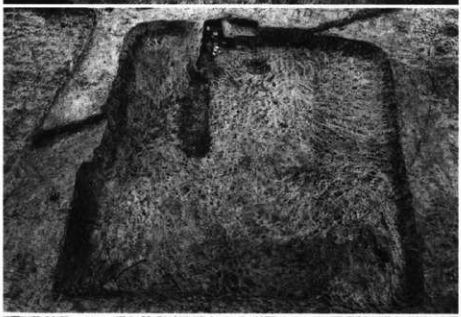
SB37

SB40

SB41

図版14

SB43



SB45

SB46

SK20

SK20

図版16

SK05

SK07

SK08

SK18

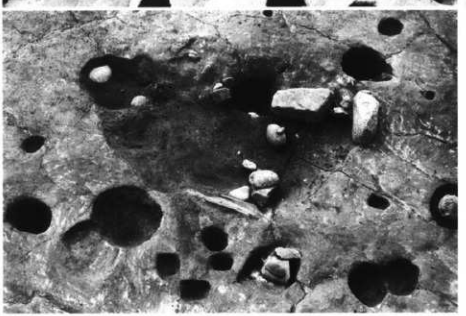
SK21

SK22

図版18

SK25

SK30



SK53

SD01

SD01南側抗列

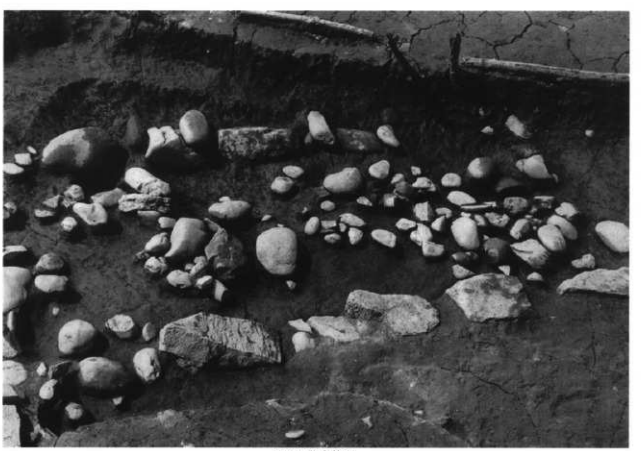
図版20

SD02

SD06

SD12

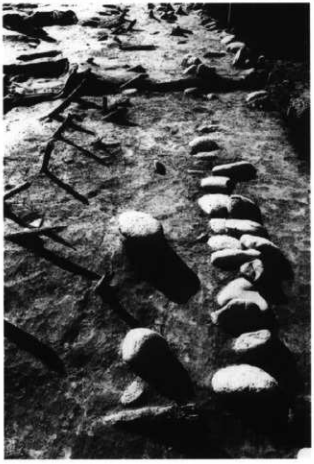
SX01



SX01検出状況

図版22

土留め状遺構



重機作業風景

調査風景

委託写真測量風景

45－6

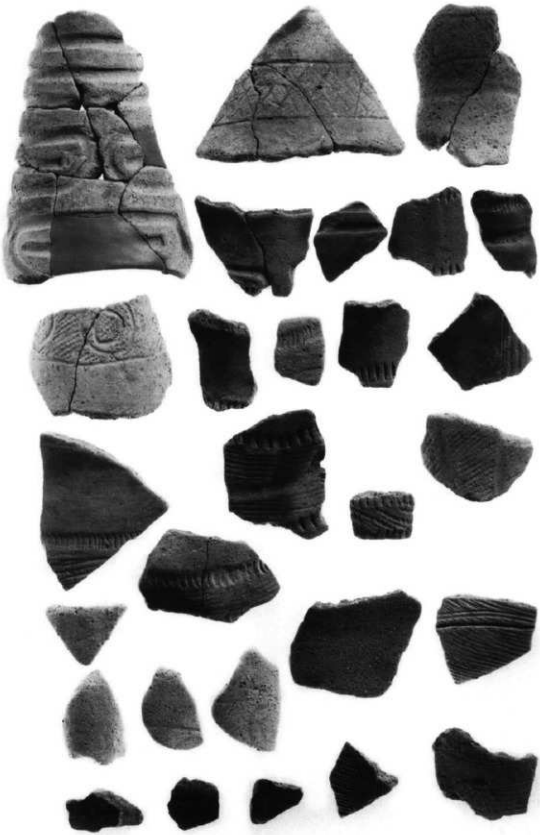
47－2

45－1

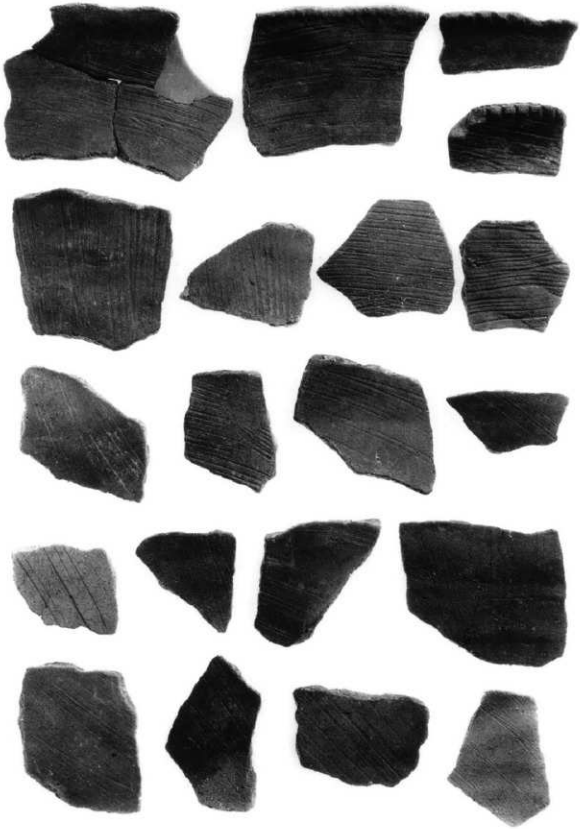
73－7

45－4

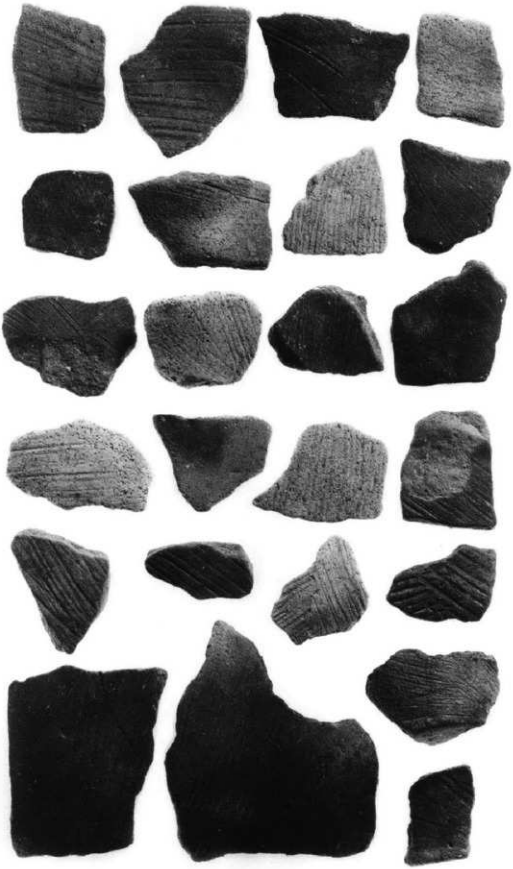
SB06・14・遺構外出土土器



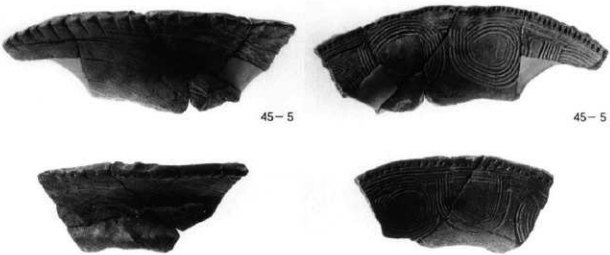
SB06出土土器 (1)



SB06出土土器(2)

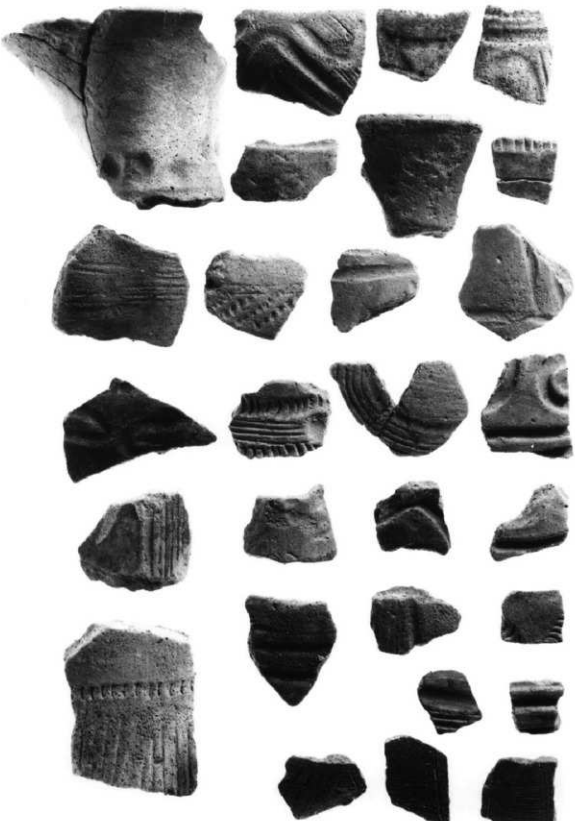


SB06出土土器(3)

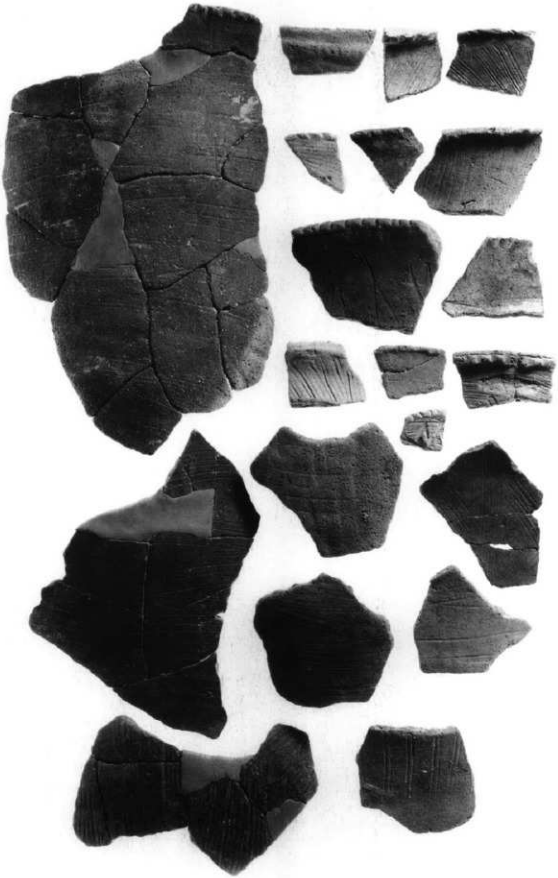


SB06出土土器(4)

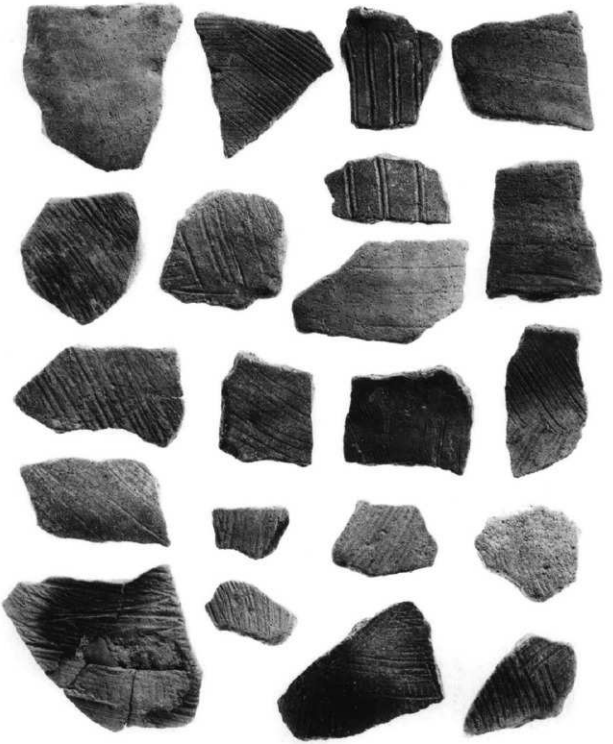
SB06出土土器



SB14出土土器(1)



SB14出土土器(2)



SB14出土土器(3)

SB14出土土器

65－10

77－9

77－7

65－9

60－1

73－8

SB32・48・グリット出土土器

54－10

54－15

54－11

56－9

54－12

56－10

SB24・26出土土器

49－13

50－6

49－14

50－7

50－1

50－18

50－3

50－19

SB09・11・13出土土器

51－1

51－6

51－2

51－12

51－5

51－9

51－7

SB17・21出土土器

51－8

51－10

51－11

54－3

54－5

54－1

54－6

SB17・22出土土器

SB18出土土器セット